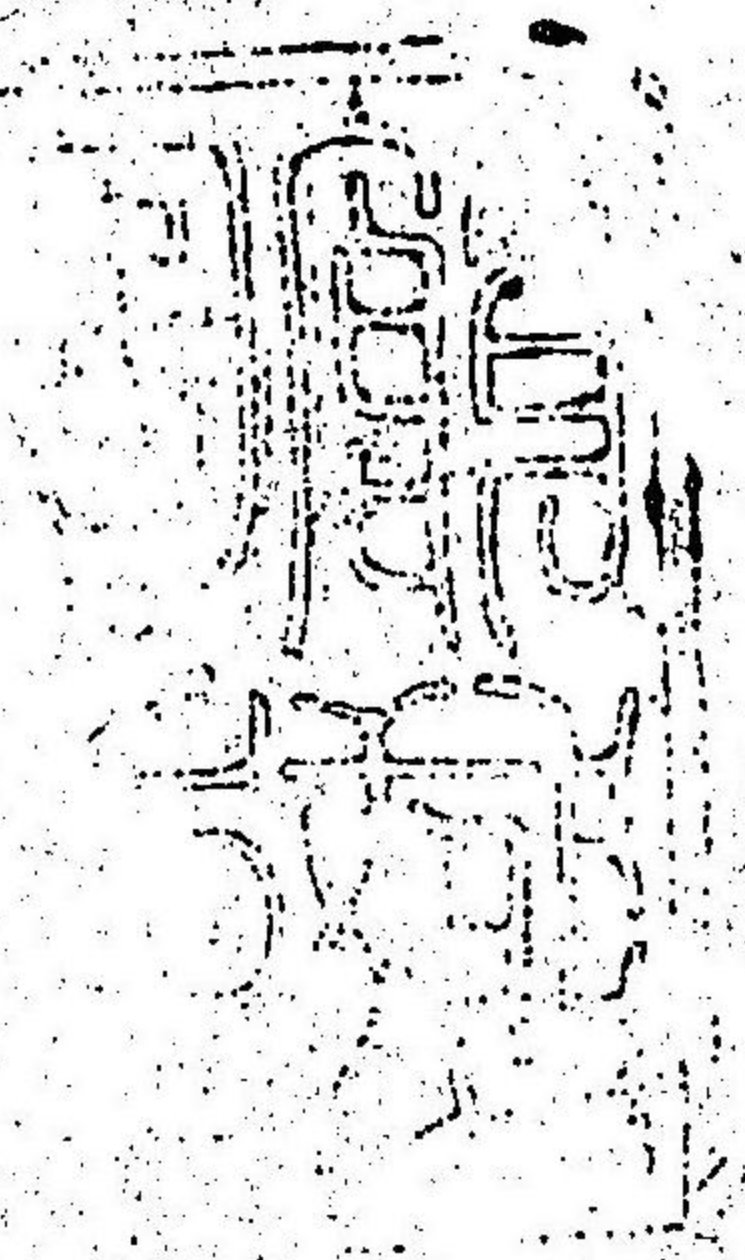


特 16
450

明治十一年九月刊行

法集解

橋本 胖三郎 譯述
西園 遜 明校正



凡例

一 此書ハ「コオドベナルエキスブリッケ」註解シテ刑法ト「テフリイジユコオドベナル」譯シテ刑法アル原論ト云フト及ヒ佛蘭西諸學士ノ論說トヲ譯シ合セテ刑法一部ノ註釋書トシ題シテ佛蘭西刑法集解ト名ク「コオドベナルエキスブリッケ」ハ佛蘭西大審院檢事局ノ書記官「ログロン」ノ著述ニ係ル該書ハ其註解ヲ每條ニ加ヘ條項ノ既ニ改正アリシ者ハ悉ク其舊文ヲ掲載シ或ハ上告並ニ控訴ニ係ル裁判事例ヲ収録シ其辨明ヲ以條項ノ意旨ヲ申明セリ故ニ該書ヲ基礎トシ專ラ之ヲ載録ス「テフリイジユコオドベナル」ハ「シヨフボアドルフ」ホオスタノエリ「兩學士」ノ著述ニ係ル該書ハ佛蘭西刑法ノ沿革ヲ推論シ歐米各國刑典ノ異同ヲ比較シ其幽ヲ闡キ微ヲ顯ハス最モ詳密ナリトス故ニ意旨深遠ナル條項ニ於テハ勉メテ其論說ヲ採録ス且諸學士ノ論法理ノ進歩ニ關スル極メテ多シ或

ハ之ヲ全收シ或ハ之ヲ節録シ以テ註釋ノ一端ニ供ス
一書中ノ譯字原意ヲ盡ス能ハサル者ハ原語ヲ存シ初出ノ條ニ於テ小註ヲ俟シ其意義ヲ解釋ス
一字傍ニ單條ヲ畫スル者ハ氏名ニシテ雙條ハ地名ノ符號ナリ
一此書ハ原ト二三ノ社友ト謀リ佛蘭西ノ刑法ヲ講述シ隨テ講シ隨テ筆ス始メヨリ世ニ公ニスルノ意ナシ歲月ノ久キ積テ冊ヲ爲ス因リテ今之ヲ剖削ニ付シ寫手ノ勞ヲ省カムトス獨リ社友ノ便益ノミナラス或ハ又世ノ斯學ニ從事スル者庶幾クハ裨益スル者アラム
一凡ソ裁判事例ハ一定ノ例規ト謂フ可カラスト雖法律ノ時勢ト人情トニ適スルハ裁判事例ニ就キテ徵スヘキナリ讀者此ニ依リテ其條項ヲ推窮セハ實際上大ニ益スル所ノ者アラム

明治十一年九月

譯者誌

佛蘭西刑法集解目錄

卷之一

小引

前置則

第一編 重罪輕罪ノ刑及ヒ其刑ノ効用

第一章 重罪ノ刑

第二章 懲治ノ刑

第三章 重罪輕罪ニ對シ言渡スヘキ刑及ヒ其他ノ處分

第四章 重罪又ハ輕罪ノ累犯ノ刑

卷之二

第二編 重罪又ハ輕罪ノ爲メ罰スヘキ人宥免スヘキ民事上ノ責

務ニ任スヘキ人

二 第一章

卷之三

第三編 重罪輕罪及ヒ其罰

第一卷 公事ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一章 國家ノ安寧ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一款 國家ノ外部ノ安寧ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第二款 國家ノ内部ノ安寧ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一節 皇帝又ハ皇族ニ對スル暴害及ヒ陰謀

第二節 内亂又ハ法ニ背キテ兵ヲ動カシ又ハ公ケニ亂妨

掠奪ヲ爲スニ依リ國家ヲ騷擾スル重罪

前款ニ通シ用フ可キ規則

第三款 國家ノ内部又ハ外部ノ安寧ヲ害スル重罪ヲ告發シ

又ハ告發セサル事

卷之四

第二章 憲法ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一款 公權ヲ行フニ付キ其妨害ヲ爲シタル重罪及ヒ輕罪

第二款 人民ノ自由ヲ害スル罪

第三款 官吏徒黨ノ罪

第四款 行政權及ヒ司法權ヲ侵ス罪

第三章 公ケノ靜謐ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一款 偽造ノ罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

第二節 國璽銀行ノ手形國債証票金銀極印証券印紙及ヒ

記號ヲ偽造スル罪

四

第三節 公ケノ書類公正ノ書類及ヒ商業又ハ銀行ノ書類

ヲ偽造スル罪

第四節 私書ヲ偽造スル罪

第五節 旅行証書銃獵免狀兵士ノ路次証書及ヒ保証券ヲ

偽造スル罪

通則

卷之五

第二款 瀆職ノ罪及ヒ官吏其職務上ニ於テ犯シタル重罪及

ヒ輕罪

第一節 公ケノ預リ人其預リタル物件ヲ竊取スル罪

第二節 官吏収斂ノ罪

第三節 官吏其職務ニ於テ爲スヘカラサル事件又ハ商業

ニ干渉スル罪

第四節 官吏収賄ノ罪

第五節 擅權ノ罪

第一種 人民ニ對スル擅權ノ罪

第二種 公事ニ對スル擅權ノ罪

第六節 身上証書ヲ保有スルニ付テノ罪

第七節 官吏未ダ正當ニ其職務ヲ行フ能ハサル前又ハ既

ニ職務ヲ行フ能ハサル後法ヲ犯シ其職權ヲ行フ
罪

特別ノ規則

第三款 僧徒其職務ヲ行フニ當リ一般ノ秩序ヲ騷亂スル罪

第一節 人ノ身分ノ証ヲ害スル罪

五

六

第二節 僧徒公ケノ説教ヲ爲スニ當リ官ニ對シ誹謗罵詈

ヲ爲シ人民ヲ教唆スル罪

第三節 僧徒其説教ノ書ニ於テ官ニ對シ誹謗罵詈ヲ爲シ

又ハ人民ヲ教唆スル罪

第四節 僧徒教法ノ事ニ付キ外國ノ政府又ハ國王ト通信
スル罪

卷之六

第四款 官命ニ抗抵違背スル罪其他官ニ對スル罪

第一節 官命ニ抗抵スル罪

第二節 公ケノ權又ハ公ケノ兵力ヲ預ル者ニ對シ汚辱ヲ

與ヘ又ハ暴行ヲ爲ス罪

第三節 正シク公務ノ請求ヲ受ケ之ヲ肯ムセサル罪

第四節 囚徒逃亡ノ罪及ヒ罪人ヲ隱匿スル罪

第五節 封印ヲ破毀スル罪及ヒ公ケノ預所ニアル証書類

ヲ奪取スル罪

第六節 建物ヲ破壞スル罪

第七節 官名又ハ官職ヲ僭スル罪

第八節 自由ニ禮拜ヲ行フヲ妨害スル罪

卷之七

第五款 兇徒ノ集合流浪及ヒ乞丐ノ罪

第一節 兇徒集合ノ罪

第二節 流浪ノ罪

第三節 乞丐ノ罪

流浪及ヒ乞丐ニ通シ用フヘキ規則

七

第六款 著述者印刷者彫刻者ノ姓名ナシ發行セシ書類肖像彫刻物ヲ以犯シタル罪

特別ノ規則

第七款 不正ノ集合又ハ集會

卷之八

第二卷 人民ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一章 身體ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一款 故殺ノ罪死刑ニ該ルヘキ重罪及ヒ身體ニ對シ暴行ヲ加ヘムト脅迫スル罪

第一節 故殺謀殺尊屬殺子殺及ヒ毒殺ノ罪

第二節 脅迫ノ罪

第二款 故意ヲ以犯シタル創傷毆擊ノ罪及ヒ其他故意ヲ以

犯シタル重罪及ヒ輕罪

第三款 故意ニアラスシテ人ヲ殺害シ又ハ創傷毆擊スル罪
宥恕スヘキ重罪及ヒ輕罪又ハ之ヲ宥恕ス可カラサル場合又重罪トモ輕罪トモ稱ス可カラサル殺害又ハ創傷毆擊ノ罪

第一節 故意ニ非スシテ人ヲ殺害シ又ハ創傷毆擊スル罪
第二節 宥恕スヘキ重罪及ヒ輕罪并ニ之ヲ宥恕ス可カラサル場合

第三節 重罪トモ輕罪トモ稱ス可カラサル殺害又ハ創傷毆擊ノ罪

第四款 風儀ヲ亂ス罪

第五款 擅ニ人ヲ捕縛シ及ヒ拘留スル罪

第六款 幼稚者ノ身分ノ証ヲ妨ケ又ハ失ハムトシ又ハ其性命ヲ危フスル重罪及ヒ輕罪幼稚者ヲ誘拐スル罪埋葬ノ規則ニ違背スル罪

第一節 幼稚者ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第二節 幼稚者ヲ誘拐スル罪

第三節 埋葬ノ規則ニ違背スル罪

第七款 偽証誣告罵詈漏告ノ罪

第一節 偽証ノ罪

第二節 誣告罵詈漏告ノ罪

卷之九

第二章 財産ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第一款 盜罪

第二款 倒産ノ罪詐偽取財及ヒ其他詐偽ノ罪

第一節 倒産及ヒ詐偽取財ノ罪

第二節 背信ノ罪

第三節 賭博場富場典舖ノ規則ニ違背スル罪

第四節 糶賣ノ自由ヲ妨ケル罪

第五節 製造商業及ヒ技術ニ管スル規則ヲ犯スル罪

第六節 供給者ノ罪

第三款 滅盡破壊損害ノ罪

總則

卷之十

第四編 違警罪及ヒ其刑

第一章 刑

第二章 違警罪及ヒ其刑

第一款 第一種

第一號 行政所分ノ要件及ヒ法式

第二號 邑政治布達ノ要件及ヒ法式

第二款 第二種

第三款 第三種

前三款ニ通シ用フヘキ規則

總則

佛蘭西刑法

小引

一 刑典ハ重罪輕罪違警罪ノ性質及ヒ之ニ適用ズヘキ刑ヲ定ム各法律ノ大輳スル者ナリ

一 事件ノ如何ヲ問ハス重罪輕罪及ヒ違警罪ノ部内ニ於テ其正條ナキ者ハ之ヲ罰スルヲ得ス若シ此ニ反スレハ是法律ノ位置ニ我意ヲ措ク者ナリ

一 罪ノ元素ハ意想ニ在リ故ニ法律ニ於テハ白痴瘋癲或ハ意外ノ事變ニ由リテ爲シタル所業ニ對シ該刑ヲ言渡ス可カラズ

一 法律ノ眼ヲ以之ヲ視ルニ人民社會ヲ害シ或ハ人民社會ヲ害セムトシタル所業ハ比例アリ其比例ニ照準シテ各罪ノ區別アリトス蓋シ刑ヲ用フル本意ハ其損害ヲ償ハシムルニ在リ故ニ損害シタル罪ニ

適當セサル過不及ノ刑ヲ加ヘテ之ヲ償ハシムルハ濫刑ナリ是ヲ以
立法官ハ各罪ノ性質及ヒ輕重ニ於テ尤モ能ク商量シテ刑ノ權衡ヲ
詮定セリ

一立法官ハ第一線ニ於テ國家ニ對スル重罪及ヒ輕罪ヲ論定ス是全國
人民ヲ恐赫シ其安寧ヲ妨害シ且社會ノ基礎タル建造物ヲ動搖スル
カ故ナリ

第二線ニ於テハ人民ノ性命榮譽及ヒ其自主自由ニ對スル重罪及ヒ
輕罪ヲ論定ス此犯罪ハ第一線ノ國家ニ直接スル罪ニ反對シ間接ニ
一般ノ安寧ヲ損害スルカ故ナリ

最終ノ線ニ於テハ人民ノ所有權ニ對スル重罪及ヒ輕罪ヲ論定ス此
犯罪ハ人民ノ勉強ト才智トノ二ツニ由リテ獲ル所ノ結果ヲ剝奪シ
社會ノ目途ヲ誤マリ失ハシムルカ故ナリ此社會ノ目途ハ力取ノ世

イ

態變シテ法律ノ世界トナル社會進步ノ目途ナリ

紀元一千六百六十五年

佛國大審院檢事局書記官シアログロン誌

佛蘭西刑法集解卷之一

橋本胖三郎譯述

猪子清筆記

西岡滄明校正

前置則

第一條 法律上違警ノ所爲ヲ治スル刑ヲ用ヒ罰スル罪ハ違警罪ナリ

法律上懲治ノ刑ヲ用ヒ罰スル罪ハ輕罪ナリ

法律上施体或ハ加辱ノ刑ヲ用ヒ罰スル罪ハ重罪ナリ

違警ノ所爲ヲ治スルノ刑 此刑ハ違警ノ所爲ノ輕重ニ從ヒ階級ヲ

設クル者三等第一「フラン」ヨリ五「フラン」迄ノ罰金ヲ科スル違警罪

四七一 第二六「フラン」ヨリ十一「フラン」迄ノ罰金ヲ科スル違警罪 四七五

二

第三十二「フ」ヲ「ヨ」リ十五「フ」ヲ「迄」ノ罰金ヲ科スル違警罪 四七九又

場合ニ於テハ違警罪ヲ言渡スニ付キ一日ヨリ少カラズ五日ヨリ多
カラサルノ禁錮アリ 四六五

違警罪ナリ 違警罪ノ裁判ハ違警罪裁判所ニ屬ス之ヲ辨明スレハ
治安裁判役又ハ邑長ニ屬ス 治一三九
一六六

懲治ノ刑 此刑ハ懲治場内ニ於テ有期ノ禁錮及ヒ定期間公權民權
屬權幾分カノ停止並罰金 九

輕罪ナリ 輕罪ハ輕罪裁判所之ヲ所轄ス 治一七九
施体或ハ加辱ノ刑 此刑ハ死無期ノ懲役流有期ノ懲役城塞内ノ拘

留監役 七 加辱ノ刑ハ即チ追放及ヒ剝奪公權ナリ 九
重罪ナリ 重罪ハ重罪裁判所之ヲ裁判ス 治二三一

附錄 或者曰ク此區別ハ三裁判所ノ順序ニ就テ之ヲ設ク其順序ハ

重罪ヲ裁判スル重罪裁判所輕罪ヲ裁判スル輕罪裁判所違警罪ヲ裁
判スル違警罪裁判所ナリ但シ官有ノ森林ニ管スル違警罪又ハ森林
ノ監守者原告トナルヘキ所ノ森林ニ管スル違警罪ト出版ニ管スル
違警罪トヲ輕罪裁判所ノ權内ニ屬スル如キハ此例外ナリトス

第二條 執行ノ端緒ニ因テ現ハレシ重罪ノ總テノ「タ」ノ「チ」
「ア」ニ「惡事」ノ
「譯」シテ未遂犯罪ハ犯人ノ意ニ管セサル模様ニ於テ之ヲ中止シ又ハ
効ヲ虧キタル時ハ其重罪ト同ク論ス

重罪ノ總テノ「タ」ノ「チ」
「ア」ニ「重罪」ノ「タ」ノ「チ」
「ア」ハ總テ之ヲ罰シ輕罪
ノ「タ」ノ「チ」
「ア」ハ別段ノ規則アルニ非サレハ之ヲ罰セス後條ニ於テ
重輕罪「タ」ノ「チ」
「ア」ノ區別アルヲ見ルヘシ凡ソ惡事ノ思想ハ人爲裁
判ノ得テ支配スル者ニ非ス然レドモ「タ」ノ「チ」
「ア」ハ社會其害ヲ受ク
故ニ之ヲ罰スルハ重罪ノ既ニ遂クルヲ待タズ蓋シ重罪ノ既遂ト重

三

四

罪ノ「タンダチイブ」トハ審理上難易ノ差アリ一ハ形迹顯然タル者一ハ明者ト雖看破シ易カラサル者故ニ法律上預シメ其濫刑ヲ防キ重罪ト同ク論スル所ノ「タンダチイブ」ニ就テ其摸樣ヲ指示セリ第一執行ノ端緒ニ因テ現レタル時第二犯者ノ意ニ管セサル摸樣ニ依テ之ヲ中止シ又ハ効ヲ虧キタル時此二者ハ欠ク可ラサルノ要件ナリ若シ其一ヲ虧カハ重罪ノ「タンダチイブ」ハ社會ノ公訴ヲ遁レ得ヘシ執行ノ端緒ニ因テ現レシ此摸樣ハ「タンダチイブ」ヲ其重罪ト同ク論スルノ際第一ノ要件ナリ

紀元一千八百三十二年立法官ニ於テ舊條ニ記シタル外顯ノ所爲ニ依テノ一語ヲ刪除シ且曰ク外顯ノ所爲ト執行ノ端緒トハ其形混シテ常ニ現ハル然ルニ之ヲ兩語ニ言著ハシ且外顯ノ語ハ廣キ意味ヲ包含スル者ニ非ス若シ之ヲ刪セサレハ實際上無益ノ錯雜ヲ生スト

五

予亦外顯ノ語ハ廣キ意味ヲ與フ可カラサルヲ信ス一二ノ例ヲ舉テ之ヲ証ス可シ喻ヘハ牆壁ヲ越エムトシ梯子ヲ牆壁ニ架ス若シ此ニ廣キ意味ヲ與ヘ之ヲ論スレハ乃チ外顯ノ所爲ナリ牆壁ヲ越エ室内ノ財函ヲ破毀スル時ハ仮令其所業ハ意外ノ摸樣ニ依リ遂クル能ハスト雖是外顯ノ所爲ニシテ乃チ執行ノ端緒ナリ然レドモ執行ノ端緒ハ法律上其區域ヲ劃定セサリシ故ニ裁判役仮令此點上ノ失アルモ犯者破毀ヲ求ムルノ理由トナラス第三百十七條ハ此原則ヨリ之ヲ除棄セリ該條ハ墮胎ヲ論ス婦女及ヒ其墮胎ニ助力シタル技術者ハ方法ヲ施用シ畏ルヘキノ結果ヲ見ルニアラサレハ皆之ヲ罰セス此除棄ノ理ハ他ナシ犯者所業ヲ遂クル能ハス而シテ用フル所ノ方法ハ墮胎ノ爲メニ嘗テ其功ヲ見スト證出セハ法律上何ニ據テ重罪ヲ犯スノ意アリト之ヲ確認スヘキカ是其除棄スル所以ナリ

六

犯人ノ意ニ管セサル摸様 此摸様ハ「タンダチイプ」ヲ其重罪ト同ク論
スルノ際第二ノ要件ナリ毒ヲ混和シタル食物ヲ陷ハムトシテ食物
其意ニ適セス或ハ他人ノ告シルニ依リ俄ニ之ヲ撤去ス此摸様ハ行
害者ノ意ニ管セサル者ナリ故ニ其「タンダチイプ」ハ重罪ト同ク罰セサ
ルヲ得ス此ニ反シテ被告者毒物ヲ陷ハムトスルノ際行害者俄ニ自
ラ悔悟シ直ニ之ヲ停止シ且其企謀ヲ白狀ス此所業ヲ中止シ又ハ効
ヲ虧キタル摸様ハ犯者ノ真心悔悟ニ出ツ故ニ此「タンダチイプ」ハ罰ス
可カラス

凡ソ法律ハ己ムヲ得スシテ犯罪ヲ罰ス故ニ犯罪ヲ罰セムヨリ之ヲ
防遏スルヲ良法トス若シ「タンダチイプ」ノ犯者其預謀ヲ爲シタル後眞
心悔悟シ自ラ之ヲ制止スルアレハ法律上視テ完人トナス他ナシ其
悔悟ニ教導ト恩惠トヲ與ヘテ之ヲ獎勵スルナリ

凡ソ重罪ノ「タンダチイプ」ハ本條ニ記載シタル二個ノ摸様ノ竝ヒ現ハ
レ俱ニ發スルニアラサレハ其重罪ト同ク論セス故ニ檢察官ノ求刑
書ハ二個ノ摸様ヲ列記スルヲ至當トス列記セサル犯罪ハ重罪裁判
所ノ審斷ヲ歷ルト雖覆審院之ヲ破毀スルヲ得何トナレハ二個ノ摸
様ヲ列記セサル求刑書ハ法律ノ罰スヘキ犯罪求刑書ニ非サレハナ
リ

附録 佛蘭西人「ブウフ」曰ク重罪ノ「タンダチイプ」ニ就テ要件アリ左ノ
如シ

其一 執行ノ端緒ニ依テ現ハレタル時

其二 犯者ノ意ニ管セサル場合ニ於テ中止シ又ハ效ヲ遂クル能ハ
サル時此兩項ノ摸様アレハ其已遂犯ト同ク論ス

七

其三 犯者ノ意中ニ出テ中止シタル時ハ之ヲ罰セス

共四 「タンタチア」ハ重罪ニ於テノミ其已遂犯ト同ク論ス
 是其大綱ナリ而シテ期ノ如ク重罪ノ「タンタチア」ヲ其已遂犯ト同ク
 論スルハ道義ト自然法トニ戻ルト謂ハサル可ケムヤ
 往時羅馬ノ法一二ノ重罪ノミ其「タンタチア」ヲ罰シタリキ佛蘭西ノ
 舊法亦羅馬法ニ據リ皇帝ノ生命ニ對スル罪尊屬親ヲ殺ス罪謀殺ノ
 罪毒殺ノ罪及ヒ放火ノ如キ重罪ニ於テノミ同シク之ヲ論シタリキ
 紀元一千七百九十一年ノ法律第十三條謀殺及ヒ毒殺ノ罪ノミ其「タ
 ソタチア」ヲ罰シタリシ共和四年ノ法律ニ於テ始メテ悉ク重罪ノ
 「タンタチア」ヲ罰ス紀元一千八百十年刑典制定ノ日ニ當リ尋キテ此
 規則ヲ採擇シ紀元一千八百三十二年刑典改正ノ際第二條ノ書方ヲ
 刪正スト雖尙此規則ヲ存置ス抑重罪ノ「タンタチア」ハ其既遂犯ヨリ
 輕減セサル可ラス又既遂ノ「タンタチア」ハ執行ノ端緒ニ由テ未遂ノ
 現ハル者ヲ云フ

「タンタチア」豫備ノ所ヨリ輕減セサル可ラス然ルニ第二條ハ豫備ノ
 所爲ニ就テ之ヲ罰セス執行ノ端緒ニ依テ現ハル者ハ全刑ヲ用ヒテ
 之ヲ罰ス故ニ法律ニ於テハ既遂犯ト「タンタチア」トヲ區別セス何ソ
 其苛酷ナルヤ裁判役此苛酷ヲ補フ他ノ方法ナシ何レノ場合ヲ問ハ
 ズ犯罪ノ性情ニ依リ最重ヨリ最輕ニ至ル輕減ノ範圍内ニアリテ之
 ヲ輕減セムノミ

紀元一千八百三十二年改正シタル第二條ノ舊文ヲ錄ス左ノ如シ
 第二條 外顯ノ所爲ニ因テ現ハレ及ヒ執行ノ端緒ヨリ引續キタ
 ル重罪ノ總テノ「タンタチア」ハ犯人ノ意ニ管セサル模様ニ依テ之
 ヲ中止シ又ハ効ヲ虧キタル時ハ其重罪ト同ク論ス

第二條ニ就テ裁判事例ヲ錄ス左ノ如シ

刑典第二條ニ記載シタル「タンタチア」ノ兩個ノ模様ハ乃チ重罪ノ

元素トナル摸樣ニシテ刑ヲ加重スヘキ摸樣ニ非ス果シテ然ラハ此兩個ノ摸樣ハ各項ニ分チ之ヲ陪審ニ締問スルヲ要セサルカ覆審院ハ然リト判決セリ

刑典第二條ニ記載シタル兩個ノ摸樣ハ重罪ノ「タシタチ」ヲ形狀スル摸樣ニシテ刑ヲ加重スヘキ各個ノ摸樣ト相異ナレリ刑ヲ加重スヘキ摸樣ハ各項ニ分チ之ヲ陪審ニ締問セサルヲ得スト雖重罪ノ「タシタチ」ヲ形狀スル摸樣ハ各項ニ列載スル締問ニ非サルナリ然レトモ此兩個ノ摸樣ハ重罪ノ「タシタチ」ヲ形狀スル元素ナルヲ以テ兩個ノ摸樣既ニ併現スルアレハ其重罪ト同ク論シ又其刑ヲ以之ヲ罰ス實ニ欠ク可カラサルノ要件ナリ故ニ兩個ノ摸樣ハ各項ニ分チテ締問スルヲ要セサルモ併舉シテ之ヲ締問セサルヲ得ス但シ此方法ハ治罪法第三百三十七條ト抵觸スル者ニ非

ス云々紀元一千八百五十三年九月八日判決

輕罪ノ「タシタチ」ハ執行ノ端緒ニ因テ現ハレ及ヒ該犯ノ意ニ管セサル摸樣ニ依テ其効ヲ虧キ或ハ之ヲ中止スル時重罪ノ「タシタチ」ニ於テ陪審兩個ノ摸樣ヲ按シ罪ノ有無ヲ決スルカ如ク輕罪裁判所ノ裁判役モ亦兩個ノ摸樣ヲ按シ而シテ後罪ノ有無ヲ決セサル可ラサルカ

覆審院ハ左ノ三件ニ據テ否ト判決セリ

刑典第二條ノ規則ハ重罪ノ「タシタチ」ニノミ之ヲ論ス可シ輕罪ノ「タシタチ」ハ第三條ニ於テ記載セタル如ク特別ナル規則ヲ以之ヲ定ムル者ナリ

刑典第四百五條ニ於テハ第二條ノ如ク輕罪裁判所ノ裁判言渡書ニ兩個ノ摸樣ヲ記載スルヲ要セサリシ

今破毀ヲ求ムル所ノ裁判言渡書ヲ觀ルニ詐計ヲ以テ「フランク」ノ母
及ヒ其女ノ財産ヲ掠取セムトシタル此數次ノ「タンタチア」ハ輕罪
ノ性質アルヲ認視シ又執行ノ端緒ニ因テ現ハレタル其「タンタチ
ア」ハ犯者ノ意ニ管セサル模様ニ依テ効ヲ虧キタルナリ云々紀元
一千八百五十一年二月二十八日判決

甲ヲ殺サムトシ乙甲ノ家ニ就テ發砲ス甲其家ニ在ラス乙ノ發砲
ハ罰スヘキ重罪ノ「タンタチア」トスルガ

「モンペリエ」ノ控訴院ハ否ト判決セリ

刑典第二條ニ明記シタル執行ノ端緒ハ重罪ノ「タンタチア」ニ於テ
欠ク可カラサル要件ニシテ且其所業必ス遂クヘク其目途必ス達
スヘキ者ヲ云フ故ニ被害者其場所ニ在ラザレハ行害者ヲ以暗殺
ノ「タンタチア」ト論ス可カラス何トナレハ所業ノ遂ク可カラス目

途ノ達ス可カラサル徒爲ノ「タンタチア」ハ所業ノ遂クヘキ「タンタ
チア」ト相距ル遠シ假令此所爲ノ念ハ兇惡ナリト雖刑典ノ能ク管
轄スル所ニ非ス云々紀元一千八百五十二年二月二十六日判決

余ヲ以之ヲ觀ルニ此裁判ハ刑典第二條ニ違背ス犯人ノ意ニ管
セサル模様ハ第二條ニ明文アリテ犯者其罪ヲ遁ルヲ許サス此
原則ニ基ツカスシテ其裁判ヲナス之ヲ一般ノ通規ト爲ス可カ
ラス

余亦之ヲ聞ク紀元一千八百四十九年十二月八日「アジャン」ノ控訴
院ニ於テ此裁判ニ反對シタル裁判ヲシタリト云フ

塀ヲ越エテ人ノ住居シタル家ニ入ル是盜賊ノ狀アリト思量シタ
ル時ハ之ヲ重罪ノ「タンタチア」トナスヘキカ

「モンペリエ」ノ控訴院ハ否ト判決セリ

「ビエル」ハ「ガイル」ノ家ニ就テ數箇ノ物品ヲ窃取シタル後一月二十五日ノ夜同所ノ「ヲラモン」ノ家ニ入り又其屋ニ躡リ高サニ「メエートル」ノ牆壁ヲ越エ未タ閉鎖セサル戸口ヨリ遂ニ「メッツ」ノ家ニ至リ其部屋ニ潛伏ス翌日一月二十六日午前第八時「メッツ」ノ家丁此部屋ニ來リ一人ノ屋隅ニ匍匐スルヲ見テ大聲叫呼スルノ際「メッツ」亦來リテ之ヲ捕捉セリ

重罪ノ「タンマチイブ」ハ刑典第二條ニ記載シタル兩個ノ摸樣ノ備ヲサレハ其重罪ト同ク論セス然ルニ初審裁判所ノ裁判言渡書ヲ觀ルニ「ビエル」某ノ家ニ於テ竊盜シタル顛末及ヒ「メッツ」ノ家ニ入り室内ニ於テ盜賊ノ所業ニ着手シタル顛末ヲ明記セサリシ凡ソ重罪ノ「タンマチイブ」ハ既遂ノ重罪ト同ク論スト雖立法官ハ兇惡ノ意想又ハ兇惡ノ豫備ニ對シテ之ヲ罰スルヲ要セス只執行

ノ端緒ニ依テ現ハル、ヲ要ス云々紀元一千八百五十二年二月十九日判決

執行ノ端緒ノ區域上ノ點ニ就テ裁判役ノ失アリトシ上告シタル時ハ之ヲ受理スヘキカ

覆審院ハ裁判役ノ權ハ事實上ニ就テ獨立不羈トシ否ト判決セリ刑典第二條ニ於テ重罪ノ「タンマチイブ」ヲ論スルニ兩個ノ摸樣ヲ記載シタリト雖法律上其摸樣ノ原素トナルヘキ事体ノ區域ヲ記載セサルヲ以此區域ニ就テ之ヲ判定スルハ裁判役ノ權ナリトセリ此上告ヲ受タル裁判言渡書ヲ觀ルニ「ビスコレ」ノ所業ハ証シテ犯罪ノ預謀ト看做ヲ得ルト雖執行ノ端緒ニ非サルヲ明審シ且犯者ノ意ニ管セサル摸樣ニ依テ犯罪ヲ中止シタルハ嘗テ其証ナシト明言セリ

犯者ノ意中ヲ思量シテ之ヲ判定スルハ全ク裁判役ノ管轄ナリ故ニ此上告ハ受理セス云々紀元一千八百四十六年九月二十六日判決

第三條 輕罪ノ「タ」ノ「チ」ハ法律上別段ニ定メタル場合ニ於テノミ其輕罪ト同ク論ス 第二條兩個ノ摸樣ヲ備ヘタル重罪ノ「タ」ノ「チ」ハ悉ク其重罪ト同ク論スルノ明文アリ輕罪ノ「タ」ノ「チ」ハ此ニ異ナリテ本條別ニ明文アルニ非サレハ其輕罪ト同ク論セス 往時立法官本法ヲ制定スルノ時ニ當テ議者以爲テ輕罪ノ性質ハ重罪ノ性質ト相異ナルナリ輕罪執行ノ端緒ハ著手前ニアリテ現ハル者甚ク少ナシト蓋シ其所業ノ狀形ト順序トハ成功ノ迹ニ就テ初テ之ヲ認知スヘケレハナリ故ニ輕罪ノ「タ」ノ「チ」ヲ以重罪ノ如ク

一般ニ之ヲ罰スルハ實ニ危嶮ナリトセリ

法律上輕罪ノ「タ」ノ「チ」ヲ罰スル場合ハ甚ク少ナシ第七十九條 官吏ヲ誘惑スルノ「タ」ノ「チ」第四百一條 竊盜及ヒ拘捕ノ「タ」ノ「チ」第四百五條 詐偽取財ノ「タ」ノ「チ」第四百十四條 第四百十五條 職工ノ雇賃ヲ貴騰シ或ハ工業場ニ於テ其工業ヲ妨ケムトシタル「タ」ノ「チ」此數條ノミ

法律上輕罪ノ「タ」ノ「チ」ヲ罰スルハ第二條ニ記載シタル如ク兩個ノ摸樣ヲ要スルノ明文ナシ且紀元一千八百五十一年二月二十八日覆審院ノ判決書中亦之ヲ要セサルヲ明言セリ然レトモ此兩個ノ摸樣ヲ按セスシテ輕罪ノ「タ」ノ「チ」ヲ審判スルハ到底信用スヘカラサルモノトス何トナレハ只意想上ニノミ生シタル所業ヲ罰スルノ弊害アレハナリ

法律上輕罪ノ「タ」ン「チ」イ「ブ」ハ本條明文アル場合ニ非サレハ其輕罪ト
同ク論セサルモノトセリ此規則ニ依テ之ヲ推考スレハ違警罪ノ「タ」
「シ」ヨ「フ」ボ「エ」リ「ノ」ニ「ハ」ニ是裁判書ヲ駁シテ曰ク輕罪ノ「タ」ン「チ」イ「ブ」ハ

附錄 佛蘭西人或者曰ク第三條ハ輕罪ノ「タ」シ「タ」チ「イ」ブヲ論シ第二條
ハ重罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブヲ論セリ而シテ第二條ニ於テ記載シタル兩個
ノ摸樣ハ第三條之ヲ記載セスト雖前後相照セハ直ニ了解スヘシ重
罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブヲ確認スルモ輕罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブヲ確認スルモ是其
欠クヘカラサルノ要件ニシテ輕罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブト重罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブ
ト同一理ナレハナリ第二條第三條ハ共和四年及ヒ共和八年ノ法
律ヲ編成シタル者ナリ兩條同趣意タルハ論ヲ待タス且共和八年ノ
法律ニ於テ輕罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブハ重罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブト其同一理ナル

ヲ差示セリ論者或ハ曰ク重罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブハ輕罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブヨ
リ刑ヲ寬ニシテ之ヲ罰スト是極メテ解ス可カラサルノ說ナリ若シ
立法官ノ旨意輕罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブニ對シテハ重罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブニ對
スル如ク其精微ヲ要セストセハ審判上必ス不体裁ヲ生セム
紀元一千八百二十八年九月二十六日覆審院ノ裁判言渡書ニ曰ク重
罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブヲ確認スル兩個ノ摸樣ハ陪審ニ締問セサルヲ得ス
ト雖輕罪裁判所ノ裁判役ハ輕罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブヲ確認スルニ此摸樣
ヲ明言スルヲ要セス且輕罪裁判所ノ裁判役ハ其事實ヲ審問シ及ヒ
法律ヲ擬スルノ任アルヲ以其「タ」ン「タ」チ「イ」ブノ兩個ノ摸樣アレハ則チ
此犯者ハ輕重ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブト確認スルヲ得ルト云々前說ニ反シタ
ル裁判事例ナルヲ以姑ク此ニ之ヲ録ス
「シ」ヨ「フ」ボ「エ」リ「ノ」ニ「ハ」ニ是裁判書ヲ駁シテ曰ク輕罪ノ「タ」ン「タ」チ「イ」ブハ

兩個ノ摸樣ノ具備セサレハ之ヲ罰セス裁判言渡書ハ刑罰ヲ公正ニ
セム爲メ此摸樣ヲ記載セサル可カラズ然ラサレハ其「タンタイブ」ハ
罰スヘキ犯罪ニアラサルナリ法律上罰スヘキノ要點ハ如何シテ之
ヲ確認シタルカト云々

第三條ニ就テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ

竊盜ノ贓物時日ヲ經スシテ其事主ニ還付スル者アリ是輕罪ノ性
質ヲ變易シ且既ニ遂ケタル盜罪ヲ斥テ之ヲ「タンタイブ」下ナスカ
覆審院ハ其事主ニ還付シタルハ酌情減等ノ摸樣アリト判決セリ
其理由左ノ如シ

竊取シタル贓物ヲ事主ニ還付スルハ輕罪ノ性質ヲ變スル者ニ非
ス且犯者ノ意ニ關セサル摸樣ニ依テ中止シタル「タンタイブ」下云
ヘカラス蓋シ己ノ所有トナサムトシ私意ヲ起シ他人ノ所有ニ屬

シタル物品ヲ竊取シタレハ是既ニ遂ケタル竊盜ナリ而シテ時日
ヲ經ス且捺捕以前ニ於テ之ヲ其事主ニ還付スレハ酌量減等ノ狀
情アリト雖竊盜ノ罪名ハ決シテ變易スルヲ得スト云々紀元一千
八百四十二年六月十日判決

第四條 違警罪輕罪重罪ヲ問ハス其犯前ニ刑典上未タ制定セサル所
ノ刑ヲ用ヒテ罰スルヲ得ス

其犯前ニ刑典上未タ制定セサル所ノ刑 此規則ハ民法第二條法律
ハ將來ノ事ヲ定ムルノミニシテ之ヲ既往ニ施行ス可ラストノ原則
ニ據リ重罪輕罪及ヒ違警罪ニ通シ用フル者ナリ

舊法ノ時重罪ヲ犯シ犯者未タ判決ヲ經サルノ際新法頒布セリ此新
法舊法ヨリ嚴科ナル時ハ新法ヲ用フヘキカ曰ク否ナリ此新注ヲ用
フレハ是乃チ新法ヲ既往ニ及ス者ナリ

新法若シ舊法ヨリ寛裕ナル時ハ舊法ヲ用フヘキカ曰否ナリ紀元一
 千八百十年七月二十三日ノ布告書ニ曰ク犯者ノ爲メニ便益ナル刑
 法ハ犯時ノ前後ヲ論セス法律ノ新舊ヲ問ハス之ヲ適用スヘシ
 第四條ニ據レハ法律ハ既往ニ及ハス若シ既往ニ及フ者トセハ是其
 犯時ニ在テ法律上未タ禁セサルノ事件ヲ罰シ或ハ現時法律上記載
 シタル刑ヨリ更ニ苛酷ノ刑ヲ適用スルニ至ルヘシ然レトモ新法ヲ
 頒布シ其法律舊法ヨリ寛ナル時ハ此理ヲ以テ論ス可カラス蓋シ刑
 ハ輕ニ從フヲ以原則トス且犯者ハ刑ノ寛ナルヲ以テ控訴スルヲ得
 ス

第五條 此法律規則ハ兵事ニ關スル違警罪輕罪及ヒ重罪ニ適用ス可
 カラス 軍人ノ犯シ
 兵事ニ關スル違警罪輕罪及ヒ重罪ニ適用ス可カラス

タル輕重罪ハ悉ク兵事ニ關シタル輕重罪トナス可カラス頃者覆審
 院ノ裁判言渡書及ヒ參議院ノ指令書ヲ參考スルニ歸寧ヲ許サレタ
 ル水夫非職士官及ヒ解隊人ノ犯罪ハ兵事ニ關スル輕重罪ニ非スト
 云々

軍律ニ記載セサル輕重罪ハ陸軍裁判所ニ於テ常律ニ據リ其記載シ
 タル刑ヲ犯者ニ適用スルヲ以原則トス
 覆審院ノ説明ニ曰ク刑典第五條ハ累犯ヲ論シ其刑ヲ加重スル第五
 十六條ト相抵觸ス可カラス蓋シ初犯ノ刑ハ軍律ニ依ルト雖後次他
 ノ所業アレハ之ヲ累犯ト謂ハサルヲ得ス該刑ノ加重ハ累犯シタル
 ノ罪重キヲ以目的トス故ニ初犯ハ兵事ニ係ル輕重罪ト雖累犯ニ至
 リテ乃チ第五十六條ヲ適用ス可シト云々又其説明ニ曰ク再犯ノ刑
 ヲ適用スルハ重罪輕罪ヲ論セス初犯常律ニ依ル者ヲ指テ之ヲ謂フ

軍律ニ關スル者ハ此例ニ非スト云々
後説ハ第五十六條ノ真意ニ適セリ第五十六條累犯ノ刑ヲ適用スル
ハ初犯常律ニ依テ言渡サレタル者ニ限レハナリ
陸軍裁判所ニ於テ第五十六條ニ據リ累犯ノ刑ヲ適用スルヲ得蓋シ
初犯常律ヲ以輕重罪ニ處シ累犯亦同ク常律ニ據リ輕重罪ノ言渡シ
ヲ受ル者ニ限ルトス

第一篇 重罪輕罪ノ刑及ヒ其刑ノ効用

此篇ハ一般ノ刑名並ニ刑ノ執行及ヒ其効用ヲ概示シタル者ニシテ
各事各体ノ犯罪ニ就テ其刑ノ適用ヲ論スル者ニ非ス

第六條 重罪ノ刑ハ施体及ヒ加辱或ハ單ニ加辱ナリ

施体及ヒ加辱 施体ノ刑ハ悉ク加辱ナリ加辱ノ刑ハ必スシモ施体
ナラス施体ノ刑ハ其身體ヲ苦楚シ加辱ノ刑ハ乃チ處刑人ノ榮譽ヲ

剝奪ス後條ニ於テ施體及ヒ加辱ノ刑ヲ論セム

或ハ單ニ加辱ナリ 加辱ノ刑ハ處刑人ノ家族ニ及ハス何トナレハ
耻辱ハ處刑人ノ一個ニ止マル故ニ罪ス可カラサル人ニ此刑ヲ及ホ
スハ道理人情ニ反スルナリ

第七條 施體及ヒ加辱ノ刑

一 死

モガル
トラボオ、ホルセエ、ア、ベルベチ、ユイテ

一 無期ノ懲役

アホルタマシヨ

一 流

トラボオ、ホルセエ、ア、ダンガ

一 有期ノ懲役

アタシシヨ

一 城寨内ノ拘留

レクリユシヨ

一 監役

死 第十二條第十三條第十四條ハ此刑ノ執行ト方法トヲ論セリ

死刑ニ就テハ諸家ノ異論極メテ多シ曰ク宜シク刑典中ヨリ之ヲ除
 去スヘシト紀元一千八百三十二年刑法改正ノ時ニ當テ特選委員某
 國民議院ニ建議シテ曰ク廢死刑ノ說ハ人民ノ感應力ヲ攪擾シ且道
 理ヲ紋亂ス恐ルヘキ問目ニアラスヤ余性理家者流ノ異論及ヒ世間
 詭說ヲ好ム者ニ對シ敢テ陳辨スルヲ要セス各國人民ノ公許スル所
 及ヒ數百年間經驗シタル所ノ其効驗ハ適ニ以之カ答辨トナスニ足
 レリト云々苛酷ニ涉ラスシテ効力アル所ノ刑罰ニ因リ其保護ヲ離
 ル可カラサル社會ノ利益ト國家ノ大勢ト人民ノ輿論ト漸次相進ミ
 死刑廢止スルノ期自ラ至ルハ乃チ此道理ノミアリトス且紀元一千
 八百三十二年刑典改正ノ時ニ於テ立法官ハ酌量減等ノ規則ヲ設置
 シ四六三治三四一徒黨罪ノ規則ヲ改正シ八八八八九又人ノ生命ヲ
 犯サザリシ場合ハ死刑ヲ廢セリ一二九一八八一此改正ニ就テ之ヲ

論スルニ蓋シ刑罰寛宥ニ過ル如キ者アルヲ觀ルナリ紀元一千八百
 四十八年ニ至リ又刑典ヲ改正シ國事犯ニ對シ遂ニ死刑ヲ廢止シタ
 リキ

無期ノ懲役 此刑ハ男女ヲ分タス之ヲ適用ス然レトモ執行ノ方法
 ハ男女之ヲ異ニス 一五 一六

凡ソ刑ノ要旨ハ犯者ヲシテ悔改セシムルニ在リ無期ノ懲役ハ悔改
 ノ効ナシトシ其廢止ヲ論スル者往々コレアリ余之ヲ排シテ曰ク刑
 ノ目的ハ犯罪ヲ未發ニ遏止スルニ在リ而シテ人心ヲ恒ニ省警セシ
 ムヘキハ唯刑ヲ嚴格ニシ深ク恐怖セシムルニ在ルノミ

懲戒ノ効アルハ悔改ノ効アルヨリ最モ大ナリトス何トナレハ悔改
 ハ犯者ノ一身ニ止マリ懲戒ハ社會ノ一般ニ及ブ而シテ犯者苟モ悔
 改スルアレハ政府恩赦ヲ與ヘサル可カラサルヲ以一旦刑ニ處セラ

レ既ニ其自由ヲ失フ者ト雖常ニ恩赦上ニ注目シテ自棄スルニ至ラ
 ス故ニ懲役ノ無期ハ決シテ其悔改ヲ妨クル者ニ非ス
 無期ノ處刑ニ於テ犯者苟モ悔改スルアレハ是社會ノ利益ナリ故ニ
 社會モ亦勉メテ此ニ注意ス若シ犯者悔改セサレハ仍ホ無期ノ刑ニ
 處ス是矯正スヘカラサル者ヲ社會ヨリ取除ケ且社會ノ爲メニ新犯
 罪ヲ未發ニ遏止ス抑無期ノ刑ハ社會ヲ保護シ且社會兇惡ヲ恐懼ス
 ルノ勞念ナカラシムル所以ナリ加之無期ノ懲役ハ死刑ト有期ノ刑
 トノ中間ニ位スル階級ナリ若シ無期ノ懲役ヲ廢スレハ刑ノ階級ハ
 犯罪ノ階級ト適合セス遂ニ至大ノ距離ヲ生ス
 流 此刑ハ法律上明記シタル所ノ歐洲大陸外ノ佛蘭西領地ニ就テ
 其犯者ヲ遷謫ス而シテ終身此ニ移住セシム
 城寨内ノ拘留 紀元一千八百三十二年立法官ニ於テ新ニ有期ノ一

刑 即チ城寨ヲ創定シ之ヲ重罪刑ノ階級中ニ置キ一般ニ適用セリ
 内ノ拘留

○二 城寨内ノ拘留ハ之ヲ監役ニ比スレハ稍重シ城寨内ノ拘留ハ其期限
 短期ハ五年長期ハ二十年監役ハ短期五年長期十年ナリ 二 舊條ノ
 末項ハ裁判役犯罪ノ情狀ニ依テハ烙印ノ刑或ハ財産沒収ヲ言渡ス
 ヘキヲ明記シタリキ紀元一千八百三十二年立法官ニ於テ烙印ノ刑
 ハ法律ノ原則ニ背戻スルヲ以テ遂ニ之ヲ發棄セリ蓋シ此刑ハ重罪ノ
 痕迹終身滅盡ス可カラサルヲ以其悔改ノ効ヲ妨ケ且恩赦ノ特權ヲ
 障害シ皇帝ハ完全ノ恩赦ヲ行フ能ハサルナリ
 財産沒収ノ法ハ紀元一千八百十四年一千八百三十年ノ「カルト」國民
 求ヲ特許ス 及ヒ一千八百四十八年十月四日ノ憲法ヲ以テ之ヲ廢棄セ
 ルノ憲法 然レトモ此廢棄ハ一般ノ沒収ノミヲ廢棄シテ特別ノ沒収即チ犯

者ニ屬シタル犯罪ノ物件及ヒ犯罪ヨリ生シタル物品ノ没収ハ仍ホ
其規則ヲ存置ス宜シク注意シテ相混スル勿レ
四五三 四七〇 四
七二 四七七 四八

一

監役 此刑ハ犯者ヲ苦役シ且檻室ニ拘置ス 二二

此刑ハ懲治刑ノ禁錮ト相混ス可カラス 四〇

監役ハ加辱ノ刑ナリ禁錮ハ加辱ノ性質ヲ有セス

紀元一千八百三十二年立法官ニ於テ「カルカソ」ノ舊刑ヲ廢ス「カルカ

ソ」ノ刑トハ鐵輪ヲ以テ處刑人ヲ木板ニ絆束シ刑壇上ニ肆ス者是ナ

リ此刑ハ施體ノ刑ヲ執行スル方法ニシテ本刑ニ非サルナリ 舊條二

二

此「カルカソ」ノ刑ハ往時本刑トシテ之ヲ用フル者多シ 舊條二四一二

紀元一千八百三十二年犯罪ノ情狀ニ依テ附屬トシテ之ヲ適用シ主

刑及ヒ執行ノ方法トシテ用フルヲ廢止ス今日ニ至リテ一切之ヲ廢
止ス第二十二條ヲ參照ス可シ

覆審院ハ紀元一千八百四十八年ノ布告書及ヒ同年十一月二十四日

ノ憲法第五條ヲ以國事犯ノ死刑ヲ廢シタリト雖第七條ニ掲載シタ

ル刑ノ順序ヲ追ヒ死刑ノ次級ニ記スル無期ノ懲役ヲ以之ニ代フ可

カラスト判決セリ刑典第七條第八條ハ重罪刑ノ圖表ニシテ刑ヲ用

フル順序ヲ論スル者ニ非ス且刑典ノ精神ハ國事犯ト常事犯トヲ區

別シ此國事犯ノ死刑ヲ廢スルニ當テ格段ナル刑ノ種類ニ依テ之ヲ

該犯ノ各事各體ニ擬スルヲ至要トセリト云々

紀元一千六百五十年六月八日ノ法律ニ曰ク憲法第五條ニ依テ廢シ

タル國事犯ノ死刑ハ陸地外城寨内ノ流ニ代ヘ之ヲ罰スヘシ但シ此

場所ハ法律ニ於テ之ヲ差定ム可シ

第八條 單ニ加辱ノ刑

一 追放

一 國民權ノ剝奪

加辱ノ刑 加辱ノ汚漬ハ該刑ノ滿期ニ於テ滅盡スル者トスルカ曰
ク然ラス復權ノ方法ニ依ルニ非サレハ滅盡スル者ニ非ス 治六三三
追放 此刑ハ加辱ナリト雖施體ニシテ加辱ヲ兼ルノ流トハ似テ相
同シカラス追放ノ言渡シヲ受シ者ハ佛蘭西領地外ニ放逐セラレ且
其期限ハ流刑ノ如ク無期ニ非サルナリ 三二
國民權ノ剝奪 此刑ハ總テノ官職國民權又ハ族權ヲ剝奪シ及ヒ之
ヲ禁止ス 二八一四

第九條 懲治ノ刑

一 懲治場有期ノ禁錮

一 公權民權或ハ族權ノ幾部ノ有期ノ停止

一 罰金

有期ノ禁錮 法律上此刑ヲ以加辱トナサ、ルハ前既ニ之ヲ陳辨セ
リ

公權民權或ハ族權 公權民權族權之ヲ説明スレハ乃チ代議士ヲ選
舉シ代議士ニ選舉セラレ陪審トナリ親屬會議ノ議員トナリ後見人
トナリ兵器ヲ携帯スル等ノ諸權是ナリ 四二

此刑ハ適用ノ場合極メテ多シ嘯集暴行ヲナス者或ハ脅迫シテ國民
ノ公權ヲ行フヲ妨ゲタル者代議士選舉ノ時ニ於テ投票ノ數ヲ減シ
或ハ之ヲ買ヒ又ハ之ヲ賣リタル者ニ對シ之ヲ適用ス 一〇九 一〇二

第十條 凡ソ刑ヲ言渡スニハ被害者ノ要求スル物品ノ追還及ヒ損害
ノ賠償ニ差支トナル勿ル可シ

物品ノ追還及ヒ損害ノ賠償ニ差支トナル勿ル可シ 治罪法ニ依テ之ヲ觀レハ要償ノ訴ト刑事ノ訴トハ同一ノ事件ニ起ル者ト雖其淵源スル所各同シカラス蓋シ社會ヲ害シタル犯罪ノ訴ハ社會ノ一般ニ屬スル者ニシテ乃チ公訴ナリ被害者要償ノ訴ハ一人一己ニ關スル者ニシテ乃チ私訴ナリ故ニ犯者刑ニ處セラルレハ社會遍テ法律ノ保護ヲ受ク而シテ物品ノ追還及ヒ損害ノ賠償モ亦被害者ヲ保護シ要求ノ權利アラシム

被害者一旦私訴原告人トナリ刑事裁判所ニ就テ物品ノ追還又ハ損害ノ賠償ヲ要求シ之ヲ得ル能ハサルニ於テ更ニ之ヲ民事裁判所ニ訴フルヲ得ス何トナレハ刑事裁判所ニ於テ私訴ト公訴トヲ同ク之ヲ受理シ亦同ク之ヲ裁決シタレハナリ若シ此ニ反シ民事原告人トナラサル時ハ刑事裁判所ノ裁決ニ拘ハラズ民事裁判所ニ訴フルヲ

得蓋シ公訴ト私訴トハ同時ニ之ヲ爲シ又各別ニ之ヲ爲シ得レハナリ 治三

第十一條 監視罰金所有權ノ犯者ニ屬シタル犯罪ノ物件又犯罪ヨリ生シタル物件及ヒ犯罪ノ用ニ供シ或ハ共用ニ供セムトシタル物件ヲ別段沒收スルノ刑ハ皆重罪輕罪ニ通シ適用ス可シ

監視 此刑ハ往時政府ノ權ヲ以犯者處刑ノ後其居住ヲ禁スヘキ場所ヲ定ム現今ハ政府ノ權ヲ以處刑ノ後其居住スヘキ場所ヲ定メリ 四四 紀元一千八百五十一年十二月八日ノ布告第三條

監役及ヒ追放ニ處セラレタル犯者ハ法律ノ固有力ニ依リ政府ノ監視ヲ受ク國事犯ニ依テ重罪及ヒ輕罪ニ處セラレタル犯者モ亦政府ノ監視ヲ受クルハ勿論ナリ

佛蘭西國ニ於テ創メテ此刑ヲ設ケシハ共和第十二年ナリキ

別段沒収スル刑 一般ノ沒收ヲ廢止シ別段ノ沒收ヲ廢止セザルハ
 前既ニ之ヲ論述セリ
 所有權ノ犯者ニ屬シタル犯罪ノ物件 犯罪ノ物件トハ犯罪ノ目的
 トナル總テノ物件ヲ云フ諭ヘハ寶石ニアラサル石類ヲ寶石ト偽リ
 之ヲ販賣スレハ其石ヲ沒収スルノ類 四二三
 犯罪ヨリ生シタル物件 偽版ノ犯罪ハ其書籍ヲ沒収ス 四二七
 犯罪ノ用ニ供シタル物件 獵業ニ就テ紀元一千八百四十四年創定
 ノ法律アリ該第十六條ヲ錄ス左ノ如シ
 凡ソ獵業ニ係ル犯罪ノ裁決網具及ヒ獵器械ノ沒收ヲ言渡シ且獵業
 ニ用フ可カラスト禁シタル器械ハ之ヲ破毀シ武器ハ之ヲ徵収ス但
 シ銃獵ヲ免許シタル時間ニ於テ免許狀ヲ所持シタル者ハ此限ニア
 ラス

武器網具其他獵業ノ器械即時取押フ可カラサレハ後日犯者ヲシテ
 之ヲ出サシメ或ハ裁判言渡シヲ以其代價ヲ定メ之ヲ納メシム可シ
 但シ此價ハ五十フランヨリ下額ナルヲ得ス
 重罪輕罪ニ通シ 別段ノ沒收ハ違警罪裁判所ニ於テモ亦之ヲ言渡
 ス可シ 四六四
 附錄 第十一條ハ重罪及ヒ輕罪ニ通シ適用スヘキノ刑トス而シテ
 二個ノ注意スヘキ者アリ
 其一 該條違警罪ノ明文ナシ此別段沒收ノ刑ハ違警罪ニ對シ適用
 可カラサル者ナリ然レトモ此制限ハ至當トナシ難シ何トナレハ
 第四百六十四條第四百七十條違警罪ニ對シ別段沒收ノ刑ヲ適用ス
 其二 犯者ニ屬シタル犯罪ノ物件トハ犯者ノ所有ニ屬シタル物件
 ノミヲ云フナリ若シ此制限ヲ明ニセサレハ犯罪ノ用ニ供シタル物

件ハ犯者ノ所有ニ屬スルト否トヲ問ハス直ニ沒収ヲ言渡スニ至ル可シ

贓物ノ代價ヲ以買求メタル物件モ亦之ヲ沒収スヘキカ曰ク否ナリ沒収ハ乃チ刑ナリ故ニ法律上明記スル所ノ規則ニ依ラサレハ之ヲ言渡スヲ得ス盜罪ヨリ生シタル贓物或ハ盜罪ニ因テ得タル贓物ノ代價ヲ以更ニ買求メタル物品ハ之ヲ沒収スルノ明文ナシ苟モ明文ナケレハ之ヲ沒収ス可カラズ

第十一條ニ付テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ

幼者ノ犯罪ニ對シ陪審ハ其識別ナクシテ罪ヲ犯シタリト公認ス此幼者ハ政府ノ監視ヲ受ツヘキカ

覆審院ハ否ト判決セリ

刑典第六十六條ニ據テ之ヲ觀レハ十六年未滿ノ犯者識別ナクシ

テ罪ヲ犯サハ之ヲ放免ス蓋シ法律上之ヲ重罪又ハ輕罪ト公認セサルナリ法律上重罪裁判所ハ幼者ヲ拘留スルノ言渡シヲ爲スヲ得然レトモ此拘留ハ刑ニ非ス該時ノ摸樣ニ依リ其幼者ヲ親屬ニ依托ス可カラサレハ之ヲ監室ニ拘留ス是家庭ノ懲治ヲ補フ爲メノ方法ナリ

刑典第三章ニ於テ刑名ノ階級中ニ記載シ之ヲ重罪及ヒ輕罪ニ適用ス故ニ此刑ハ識別ナクシテ罪ヲ犯シタル十六年未滿ノ幼者ニ對シ之ヲ言渡ス可カラス云々紀元一千八百二十二年八月十六日判決

第一章 重罪ノ刑

第十二條 死刑ニ處スル者ハ之ヲ刎首スヘシ

治罪法第三百六十九條ニ曰ク裁判言渡書ニハ犯者ニ適用シタル刑

法ノ箇條ヲ記入スヘシト此規則ハ該刑ノ箇條ヲ記入スルノ謂ヒニシテ執行ノ規則即チ本條ノ如キ箇條ヲ記入スヘキヲ言フニアラス嘗テ覆審院ニ於テ此説明アリト云フ

第十三條 尊屬ノ親ヲ殺シタルニ因リ死刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ緇絆ノ儘跣足ニナシ首ニ皂被ヲ蒙ラシメ刑場ニ引キ行ク可シ該犯ハ使吏ノ處刑言渡書ヲ衆庶ニ讀ミ聞カスル時間刑壇上ニ肆シ置キ而シテ後直ニ之ヲ死ニ處ス可シ
尊屬ノ親ヲ殺シタルニ因リ死刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者 殺尊屬トハ本系ノ父母私生ノ子ノ父母養父母及ヒ本系ノ尊屬ヲ殺害スル者ヲ云フ 本系ノ尊屬トハ本系 二九九
覆審院ニ於テ妻ノ父母ヲ殺スハ殺尊屬ノ犯罪ニ非スト判定セリ凡ソ殺尊屬ノ犯名ハ本系ノ父母私生ノ子ノ父母養父母及ヒ本系ノ尊

屬ヲ殺スヲ云フ故ニ繼父母私生ノ子ノ父母ノ尊屬養父母ノ尊屬ヲ殺シ及ヒ弟其兄ヲ殺シ妹其姊ヲ殺シ婦其夫ヲ殺スノ類皆此罪名ヲ擬ス可カラズ是等ノ等親内ニ於テ爲シタル殺害ハ本法ニ於テ別ニ其適律アリ

紀元一千八百三十二年法律改正ノ時ニ於テ舊條内犯者ノ拳ヲ斷ルノ規則ハ苛虐ニ涉ルヲ以之ヲ廢止ス然レトモ其餘ノ規則ハ緇絆跣足民心ヲシテ怵暢スル所アラシムル執行ノ方法ナルヲ以仍ホ之ヲ存置セリ

酌量減等法ハ殺尊屬ノ犯者ニ對シ之ヲ用フヘキカ否ヤノ疑團アリ代議士某ノ建議ニ曰ク殺尊屬ノ犯者ハ陪審ニ締問スルニ酌量減等ヲ以ス可カラスト云々而シテ此建議ハ終ニ採用セラレスト云フ是ニ由テ之ヲ觀ルニ殺尊屬ノ所犯ニモ此酌量減等ノ點ニ於テ普通法

ニ依ラサル可カラズ

紀元一千八百五十三年六月十日立法官ニ於テ議定シタル本法第八十六條皇帝ノ生命ニ對スル犯罪ハ殺尊屬ニ準ス云々是ニ由テ之ヲ觀レハ該犯ハ此條ノ規則ヲ以其刑ヲ執行スルハ論ヲ待タズ

第十三條ニ就テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ

殺尊屬ノ共犯人ハ附從トシ此至重ノ刑ヲ科スヘキカ

覆審院ハ然リト判決セリ

重罪ノ共犯人ハ必ス其成就シ得ヘキ所ノ所業ヲ以他ノ犯者ヲ助

力シタルニ因リ法律上其附從ト論スルハ素ヨリ至當トス故ニ酌

量減等セヌシテ「マリイザロイック」ニ對シ云々ノ刑ヲ科シタルハ乃

チ刑典第二百九十九條第三百二條第十三條第五十九條ニ據リ正

シ之ヲ適用シタル者トス云々紀元一千八百四十八年六月九日判

決

第十四條 死刑ヲ受ケシ犯者ノ親族ヨリ其屍ヲ受取ラムト願ヒ出ル時ハ之ヲ引渡ス可シ但シ該親族ハ禮式ヲ用ヒヌシテ之ヲ埋葬スルノ責アリ

禮式ヲ用ヒス 死刑人ノ葬式ヲ盛ニスルハ是其裁判所ニ抗スル者トス社會ノ公訴ヲ受ケ既ニ死刑ニ處セラレタル者ニシテ豈ニ裁判所ニ抗スルノ理アラムヤ

第十五條 紀元一千八百五十四年五月三十日ノ法律ヲ以此條ニ更換セリ

紀元一千八百五十四年五月三十日ノ法律第一條 今後懲役ノ刑ハ「アルゼリイ」ヲ除クノ外佛蘭西ノ屬地ニ設置シタル場所ニ就テ之ヲ受ク可シ然レトモ處刑人ヲ送致スルノ際差支アラハ假ニ本國ニ於テ之ヲ受ク可シ
同上 法律第二條 處刑人ハ拓地及ヒ他ノ公益ノ最モ苦難ナル事業ニ使

用ス可シ

同上第三條 處刑人ニ對シ違則ヲ罰スルノ名義或ハ逃亡ヲ防クノ方法ニ依リ二人毎ニ鉄鎖ヲ以テ連接シ或ハ各人ニ鉄丸ヲ繫クルヲ得ヘシ

使用シタル事業上ヨリ生スル所ノ利益金ハ何人ニ屬スルヤノ疑團アリ此點ニ就テハ法律上此明文ナシ然レトモ紀元一千七百九十一年ノ法律此利益金ハ官府ニ於テ盡ク之ヲ収ム云々ノ明文アル者トハ素ヨリ同シカラズ

立法官此點ニ於テ明言セサル者ハ官府ノ爲メ處刑人ノ爲メ適度ノ利益ヲ得セシムルヲ要スレハナリ之ヲ詳説スレハ利益金ノ一分ヲ處刑人ニ與フヘキカ爲メナリ
此懲役ノ刑ヲ言渡スノ時滿六十年ノ犯者ハ監役ノ刑ニ換フ可シ七

○ 七二 紀元一千八百五十四年五月三十日ノ法律第五條

第十六條

紀元一千八百五十四年五月三十日ノ法律ヲ以此條ニ更換セリ

紀元一千八百五十四年五月三十日ノ法律 第四條 懲役ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル婦女ハ

植民地ニ於テ設ケ置キタル懲役場ニ送致スルヲ得其婦女ハ男子ト

區別シ年庚及ヒ性質ニ適シタル事業ニ使用スヘシ

年庚及ヒ性質ニ適シタル事業ニ云々 懲役ノ言渡シヲ受ケタル婦

女ハ男子ノ如ク鉄鎖ヲ以テ之ヲ連接セズ蓋シ其性質ノ軟弱ナルヲ以

ナリ且社會一般ノ常情婦女ヲ寬貸ス故ニ前條ト稍其差アリ

第十五條及ヒ第十六條ノ舊文ヲ錄ス左ノ如シ

第十五條 懲役ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ至難ノ事業ニ使用ス可

シ但シ使用ノ種類ニ因リ犯者ノ兩脚ニ鉄丸ヲ繫ケ又ハ兩人毎ニ

鉄鎖ヲ用ヒテ連接ス可シ

第十六條 懲役ノ言渡シヲ受ケシ婦女ハ懲役場内ノミニ於テ之ヲ使用ス可シ

紀元一千八百五十四年五月三十日ノ法律ヲ録ス左ノ如シ

第一條 第二條 第三條 第四條ハ本法第十五條第十六條ノ下ニ於テ之ヲ記載ス故ニ復之ヲ録セス

第五條 期限ナキ及ヒ期限アル懲役ノ刑ハ滿六十年ノ犯者ニ對

シ之ヲ言渡ス可カラズ該刑ハ無期或ハ有期ノ監役ニ換フ可シ

此法律ニ依リ本法第七十二條ハ廢止セリ

第六條 八年以下ノ懲役人ハ滿期ノ後其刑期ト同一ノ期限植民地ニ居住ス可シ

八年以上ノ懲役人ハ畢生間其地ニ居住ス可シ

但シ處刑濟ノ者ハ藩屬地長官ノ特旨ヲ以一時其地ヲ離レ去ルヲ

ニ

得ヘシ然レトモ如何ナル場合ヲ論セス佛蘭西國ニ復歸スルヲ許サス

恩赦ヲ受ケタル者ハ其恩赦狀ニ別段ナル特旨ヲ明記セサルニ非サレハ此植民地ニ居住スヘキ責ヲ免カル、ヲ得ス

第七條 期限アル懲役ノ刑ヲ受ケタル罪人上陸ノ際逃亡ノ罪ヲ犯シタル時ハ二年ヨリ五年迄ノ懲役ノ刑ヲ以更ニ之ヲ罰ス可シ但シ此刑ハ其以前言渡シタル懲役ト相混ス可カラス

期限ナキ懲役ノ刑ヲ受ケタル罪人同上ノ罪ヲ犯ス時ハ二年ヨリ少カラス五年ヨリ多カラサル時間鉄丸ヲ繫クヘシ

第八條 前第六條ニ違背シ免許ヲ得スシテ植民地ヲ去リ或ハ免許ヲ得ルト雖免許ノ期限ヲ經過シタル時ハ一年ヨリ三年迄ノ懲役ノ刑ヲ以之ヲ罰ス可シ

第九條 逃亡者第六條ニ違背シタル者其人ニ相違ナキ證據ヲ認視スルハ後條ニ明記シタル裁判所又ハ嚮ニ該刑ヲ言渡シタル重罪裁判所ニ於テ之ヲナス可シ

第十條 第七條第八條ヲ犯シタル罪及ヒ懲役ノ言渡シヲ受ケタル者ノ更ニ犯シタル輕重罪ハ植民地ニ設置シタル海軍裁判所ニ於テ之ヲ審擬ス可シ但シ其裁判所設立迄ハ植民地ノ陸軍第一會議局ニ於テ之ヲ審理スヘシ第一會議局ニハ海軍コソミサリヤ_二員之ニ附屬シ而シテ懲役人ニ關シタル輕重罪ノ法律及ヒ之ニ適用スヘキ刑ハ間斷ナリ執行セシム可シ

第十一條 諸事勉勵シ及ヒ悔悟ニ因テ恩怨ス可キ者ハ男女ヲ論セズ左ノ許可ヲ受クルヲ得ヘシ

一 植民地住民ノ爲メ或ハ地方政治ノ爲メ行政規則ニ於テ定

メタル工業ヲ爲スノ許可

二 土地ヲ借受ケ及ヒ己ノ爲メ其土地ヲ耕作スルノ許可此土地ノ貸與ヘハ處刑人放免ノ後ニ非サレハ確定トナスヲ得ス

第十二條 政府ハ植民地ニ於テ有期ノ懲役人ニ對シ法律上治産ノ禁ヲ以剝奪シタル公權ノ全部又ハ一分ヲ與フルヲ得ヘシ

政府ハ懲役人ニ對シ其財産ノ全部又ハ一分ヲ所持シ及ヒ其自由ヲ許可スルヲ得可シ

植民地ニ於テ處刑人ノ爲シタル契約ハ該犯裁判言渡シノ日ニ所持シタル財産或ハ遺物相續又ハ生存或ハ遺囑ノ贈遺ニ因テ受クル所ノ財産ヲ放免ニ至ル迄其契約物件トスルヲ得ス但シ此財産ハ許可ヲ得テ所持シタル者ハ此限ニアラス

政府ハ其放免ヲ受ケタル者ニ對シ本法第三十四條ノ第三項及ヒ

第四項ニ依リ剝奪シタル權利ヲ植民地ニ於テ復スルヲ得ヘシ
第十三條 土地ヲ假ニ貸附ケ或ハ確定シテ貸附クルハ該所刑者
植民地ニ在留スル時之ヲ爲スヘシ

第十四條 凡ソ行政ノ規則ハ此法律ニ關係シタル總テノ事件ヲ
論定シ就中左ノ事件ヲ論定スベ

第一 懲役場ノ罰則

第二 假ノ貸附ケト確定ノ貸附ケトヲ問ハス犯者ノ諸事勉勵
及ヒ悔悟ニ因テ處刑人ニ許可シ或ハ既ニ放免ヲ受ケタル者ニ
許可シ得ル所ノ土地貸附規則

第三 貸附ケタル土地ニ付キ存生シタル其配偶者及ヒ相續人
ノ權利

第十五條 此規則ハ第六條及ヒ第八條ヲ除クノ外既ニ言渡シヲ

受ケタル處刑人及ヒ此以前ニ犯シタル重罪ニモ之ヲ適用ス可シ
紀元一千八百五十年六月八日ノ法律

第一條 本法第十七條ノ下ニ於テ既ニ之ヲ載録ス故ニ贅セス

第二條 城寨内ノ流ニ該ルノ犯者酌量減等スヘキ情狀アル時ハ
通常ノ流刑或ハ囚獄ノ刑ニ適用ス可シ

第八十六條第九十六條及ヒ第九十七條ニ記載シタル場合ニ於テ
ハ通常ノ流刑ヲ適用ス可シ

第三條 如何ナル場合ニ於テモ流刑ニ處セラレシ者ハ準死ノ言渡
シヲ受ケスシテ公權剝奪ヲ受ク可シ

流人ハ刑典第二十九條及ヒ第三十一條ニ從ヒ法律上治産ノ禁ヲ
受ケタル性質アリトス然レトモ城寨内ノ流ノ外ハ謫所ニ於テ公
權ヲ行フヲ得ヘシ

政府ノ許可ニ依リ流人ニ對シ財產ノ全部或ハ一分ヲ引渡スヲ得
ヘシ

此許可ニ依テ引渡シタル財產ヲ除クノ外謫所ニ於テ流人ノナシ
タル契約ハ其處刑言渡シヲ受ケシ日所持シタル財產又ハ其後遺
物相續或ハ贈遺ニ依リ受ケタル所ノ財產ヲ其契約ノ物件トナス
ヲ得ス

第四條第五條 本法第十七條ノ下ニ於テ亦之ヲ載録ス故ニ贅セ
ス

第六條 政府ハ處刑人ノ願ヒニ因リ營業ノ方法ヲ指定ム可シ
政府ハ資力ナキ流人ニ對シ其給養ニ注意ス可シ

第七條 法律ヲ以謫所ヲ改變スル時ハ流人ハ舊謫所ヨリ新謫所
ニ遷徙ス可シ

第八條 此法律ハ布告前ニ犯シタル重罪ニモ適用ス可シ

第十七條 流刑ハ佛蘭西帝國ノ陸地外ニ於テ法律上差定メタル場所
ニ貶謫シ終身居住セシムル者トス

若シ流人謫處ヨリ佛蘭西帝國ノ土地ニ歸リ來タル時ハ其人ニ相違
ナキ証ノミヲ以テ無期ノ懲役ニ處ス可シ

若シ流人佛蘭西帝國ノ土地ニ歸リ來タラサルモ佛蘭西兵ノ略取シ
タル土地ニ於テ逮捕ヲ受ケタル時ハ之ヲ其謫所ニ送還ス可シ

若シ流ノ場所ヲ設置セサリシ時流刑ニ處セラレタル者ハ裁判役ノ
處刑言渡書ニ於テ格段差定ムルニ循ヒ本國內ノ獄舎又ハ法律上明
記シタル藩屬地ノ獄舎ニ於テ終身之ヲ繋囚ス可シ

若シ本國ト謫所トノ間往來梗塞スル時ハ假ニ本國內ニ於テ之ヲ執
行ス可シ

終身居住セシムル者トス 流刑ノ言渡シハ處刑人ヲ陸地外ニ貶謫シタル日始メテ其効ヲ生ス猶ホ準死ノ刑執行ノ日ヨリ其効ヲ生スル者ト同一ナリ但シ準死ハ紀元一千八百五十四年五月三十一日ノ法律ヲ以廢止セラレタリ

第七條ノ下ニ於テ紀元一千八百五十年六月八日ノ法律ヲ概論ス今茲ニ其細目ヲ録ス左ノ如シ

第一 憲法第五條ヲ以廢シタル死刑犯ノ場合ハ陸地外城寨内ノ流ニ換ヘ之ヲ罰ス但シ此場所ハ法律ヲ以差定ム可シ

第二 拘留人ハ謫所規則ヲ體認シ其自由ヲ保有スヘシ

第三 拘留人ハ行政規則ニ於テ設置シタル總テノ取締及ヒ監察ノ

式目ヲ循守スヘシ

法律ヲ以差定ム可シ 謫所ハ紀元一千八百五十年六月八日ノ法律

第四條第五條ヲ以之レヲ差定メタリ第四條ニ曰ク「マルキヰツ」ノ島内

「バイトオー」ノ内谷ヲ以紀元一千八百五十年六月八日ノ法律第一條ヲ適用スルノ流所トス第五條ニ曰ク「マルキヰツ」ノ島内「ヌウカイワ」名

ノ地ヲ以刑典第十七條ヲ適用スルノ謫所トス

帝國ノ土地ニ歸リ來タル時 本條ノ第一項ニ於テハ陸地外ノ流刑ヲ明記シ第二項ニ於テハ此陸地ノ字ナシ故ニ流人若シ佛蘭西ノ植民地ニ於テ逮捕ヲ受ケタル時ハ該犯帝國ノ土地ニ歸リ來タルト看做サヘル可カラス何トナレハ植民地モ亦帝國領地ノ一部分ナレハナリ

茲ニ反對ノ一説アリ抑立法官ニ於テ流刑ヲ設ケルハ該犯ヲ陸地外ニ遷謫スルヲ要旨トス故ニ處刑人本國內ニ現在スルニ非サレハ之ヲ歸リ來タル者ト認視スルヲ得ス且植民地ニ流人ノ現在スルハ陸

陸地内ニ現在スルカ如ク社會一般ヲ亂擾スルノ患ヒナシト云々
 法律上流人ノ歸リ來タルヲ罰スルハ故意ニテ歸リ來タルカ故ナリ
 若シ颶風ノ爲メ佛蘭西ノ海岸ニ漂着シタル者ハ無期ノ懲役ニ換ヘ
 之ヲ罰スルヲ得ス

其人ニ相違ナキ証ノミヲ以無期ノ懲役ニ處ス可シ 往時覆審院ニ
 於テ其人ニ相違ナキ云々ハ歸リ來タルノ流人現在ノ場合ニ非サレ
 ハ其証トスルヲ得スト判決セリ何トナレハ此所爲ハ法律上刑ヲ重
 加スヘキ事件ニシテ最モ慎重スヘキ者トス然ルニ如何ソ現在セサ
 ル流人ニ對シ其証ヲ用フ可ケンヤ且共和八年「プリメメル」月二十二日
 ノ法律第二條ニ曰ク其人ニ相違ナキヲ信認スルニハ檢察官ト被告
 者トノ請求ニ因リ呼出シタル証人ヲ推問シタル後之ヲ決定ス可シ
 ト此規則ハ治罪法第五百十九條ニ明記ス本條ニ於テモ被告者ノ現

在スルヲ要ス否ヲサレハ其効ナキ者トス治罪法ト参照ス可シ

終身之ヲ繫囚ス可シ 流刑ニ就テ適當ノ場所ヲ選定スルノ際稍難
 事ニ涉リ之ヲ無期ノ繫獄ニ換ヘント論スル者多シ然レトモ流刑ハ
 人民隱謀ヲ企ツルヲ防キ且其毒ノ傳染ヲ遏止シ及ヒ累犯ヲ防クノ
 良方ナルヲ以竟ニ廢棄ス可カラサルニ至ル其後法律上 紀元一千八
 月八日ノ法ニ於テ流所ヲ設置シテ之ヲ適用シ及ヒ之ヲ言渡スヲ得
 タリ

本國內ノ獄舎又ハ法律上明記シタル藩屬地ノ獄舎ニ於テ 紀元一
 千八百三十五年九月立法官ニ於テ法律ヲ議スルノ時ニ當リ此規則
 ニ付キ論說紛々頗ル激烈ニ涉リ陸地外城塞ノ内ハ苛酷ノ刑トシテ
 之ヲ取ヲサルノ說アリ然レトモ社會ヲ擾亂シタル重罪ノ犯者ニ對
 シ此規則ハ存セサル可カラス且陸地外城塞ノ内場所ハ法律ニ非サ

レハ決シテ之ヲ差定ムルヲ得ス蓋シ行政官ノ壓制ヲ防キ其保証ヲ
與ヘシ者ナレハナリ

第十八條

紀元一千八百五十年六月八日ノ法律第三條ヲ以準死ノ流刑ニ係ル
者ヲ廢棄シ紀元一千八百五十四年五月三十一日ノ法律ヲ以遂ニ本
條ヲ廢止ス

紀元一千八百五十四年五月三十一日ノ法律ヲ以廢棄シタル處ノ
舊第十八條ヲ錄ス左ノ如シ

舊第十八條 無期ノ懲役及ヒ流刑ニ處セラレタル者ハ準死ヲ生
ス可シ然レトモ政府ハ流刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ニ對シ民權
ノ全部或ハ一部ヲ行フヲ允許スルヲ得

紀元一千八百五十四年四月三十一日ノ法律ヲ錄ス左ノ如シ

第一條 準死ヲ廢止ス

第二條 期限ナキ施體ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ剝奪公權
及ヒ刑典第二十八條第二十九條第三十一條ニ定メタル法律上ノ
治産ノ禁ヲ受クル可シ

第三條 期限ナキ施體ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ生存中又
ハ遺囑ノ贈遺トシテ其財産ノ全部又ハ一分ヲ自由ニシ又ハ此等
ノ名義ヲ以食料ノ外ハ他ヨリ財産ヲ受クルヲ得ス

犯者法庭ニ於テ裁判言渡シヲ受ケ其確定前ニ爲シタル遺囑ノ贈
遺ハ總テ其効ナキ者トス

本條欠席裁判ノ言渡シヲ受ケタル犯者ニ對シテハ肖像ヲ以刑ヲ
報行シタル日ヨリ五年ノ後ニ非サレハ此規則ヲ適用ス可カラズ
第四條 政府ハ期限ナキ施體ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ニ對

シ前條ニ明記シタル治産ノ禁ヲ受ケシムルニ依リ一旦剝奪シタル民權ノ全部又ハ一分ヲ復セシムルヲ得ヘシ
政府ハ治産ノ禁ヲ受ケシムルニ依リ其剝奪シタル民權ノ全部又ハ一部ヲ在刑ノ地ニ於テ行フヘキヲ允許スルヲ得在刑ノ地ニ於テ犯者ノ爲シタル契約ニハ其裁判言渡シヲ受ケタル日所持シタル財産或ハ言渡シタル後恩惠ノ名ヲ以受ケタル財産ヲ該物件トスルヲ得ス

第五條 準死ノ効ハ現今既ニ準死ニ係ル者ニ對シ向後消盡ス可シ但シ他人ノ既ニ得タル權利ニ付テハ此限ニ非ス

此犯者ノ身分ハ前數條ノ規則ニ依リ之ヲ定ム可シ

第六條 該法律ハ其頒布前ニ犯シタル重罪ニ付キ流刑ノ言渡シヲ受ケシ者ニ適用ス可カラス

第十九條 有期ノ懲役ハ五年ヨリ少カラス二十年ヨリ多カラサル期限ヲ以之ヲ言渡ス可シ

五年ヨリ少カラス二十年ヨリ多カラス 立法官ニ於テ若シ此刑ノ最上點ヲ確定セサレハ裁判所ハ延シテ之ヲ無期ニ至ラシムルヲ得故ニ其最上點ヲ明記ス

第十九條ニ就テ裁判事例ヲ節録ス左ノ如シ

累犯罪ニ對シ言渡スヘキ有期ノ懲役ハ其最上點ヲ適用ス可シ若シ陪審ニ於テ酌量減等スヘキ情狀アリト認視シタル時ハ此刑ノ最下點ヲ言渡サ、ル可カラス此場合ニ於テ懲役十年ノ刑ヲ言渡シタル裁判ハ其効ナキ者トスルカ

覆審院ハ刑典第十九條及ヒ第四百六十三條第七項ニ依リ然リト判決セリ

「ホオル」カリヒエニ摸樣アルノ盜罪ヲ犯シタル「ジャンフ」ラソニア
 コット」ハ其罪累犯ニ係ルヲ以長期ノ懲役ヲ言渡ス可シト雖狀情ノ
 酌量減等スヘキヲ以第四百六十三條第七項ニ依リ第十條第九條
 ニ差定メタル短期ノ刑即チ懲役五年ノ刑ヲ適用スヘキナリ今累
 犯ノ摸樣及ヒ酌量スヘキ狀情ヲ明記シ懲役十年ノ刑ヲ言渡スハ
 現ニ刑典第四百六十三條ヲ犯ス者ナリ仍テ之ヲ破毀ス云々紀元
 一千八百六十二年九月十八日判決

第二十條 何人ニ限ラス城塞内拘留ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ歐洲
 大陸ニテ佛蘭西領地内ニ在ル城塞ニ之ヲ幽閉ス可シ但シ其城塞ハ
 行政規則ノ定式ニ依リ爲シタル皇帝ノ勅書ヲ以撰定ス可シ
 何人ニ限ラス城塞内拘留ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ皇帝ノ勅書ニ
 テ定メタル取締ノ規則ニ循ヒ拘留場内外ノ人ニ交通スルヲ得ヘシ

ホ

城塞内拘留ノ刑ハ五年ヨリ少カラヌ二十年ヨリ多カラサル期限ヲ
 以之ヲ言渡ス可シ但シ第三十三條ニ記載シタル場合ハ此限ニアラ
 ス

城塞内拘留ノ刑 此刑ハ紀元一千八百三十二年立法官ニ於テ之ヲ
 創定ス

歐洲大陸 拘留ノ場所ハ「コルス」島及ヒ他ノ植民地ニ於テ之ヲ幽閉
 スルヲ得ス蓋シ大陸外ノ場所ヲ擇ミ拘留スルヲ許ス時ハ行政上ノ
 處分或ハ人民ノ爲メ危險ニ涉ルノ恐アレハナリ
 但シ第三十三條ニ記載シタル場合ハ此限ニアラス 第三十三條ハ
 追放ノ刑ヲ受ケタル犯者本國ニ歸リ來タル場合ヲ記載ス此場合ニ
 於テ刑期ノ既ニ經過シタル時日ヲ扣除シ其未タ經過セサル時日ヲ
 算計シ更ニ城塞内拘留ノ刑ニ處ス

若シ第十七條ニ從ヒ城寨内ノ拘留ヲ以流刑ニ代用スル時ハ其拘留ハ乃チ無期トス

第二十一條 監役ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ男女ヲ論セス力役場内ニ入レ置キ工業ニ力役ス可シ其工業ヨリ生シタル利益金ノ一分ハ政府ヨリ差定メタル規則ニ循ヒ犯者ノ所得ト爲サシムルヲ得ヘシ

此刑ノ期限ハ五年ヨリ少カラス十年ヨリ多カラサル可シ利益金ノ一分ハ犯者ノ所得ト爲サシムルヲ得ヘシ 此條ニ於テ法律ヲ以特ニ其工業ヨリ生シタル利益金ノ一分ヲ犯者ニ與フト雖懲役ノ刑ニ於テ其明文ナシ蓋シ監役ノ刑ハ性質稍輕キヲ以ナリ

第二十二條

此條ハ紀元一千六百四十八年四月十二日ノ公布ヲ以之ヲ廢止ス

紀元一千八百四十八年四月十二日ノ公布ヲ以廢止シタル舊第二十二條ヲ錄ス左ノ如シ

舊第二十二條 何人ニ限ラス無期有期ノ懲役及ヒ監役ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ其刑ニ處スルニ先立チ衆庶ノ目撃スル公街上ニ一時間之ヲ肆シ置ク可シ又大字ニテ住所姓名及ヒ其刑名且處刑ノ原由ヲ摘記シタル表榜ヲ該頭上ニ建ツ可シ 有期ノ懲役又ハ監役ノ刑ヲ言渡シタル場合犯者累犯ヲ除クノ外ハ重罪裁判所ニ於テ街上肆シノ刑ハ受ケシメサル旨ヲ言渡スヲ得ヘシ

右街上肆シノ刑ハ十八才以下ノ幼者及ヒ七十年以上ノ老者ニ對シ決シテ之ヲ言渡スヲ得ス

第二十三條 有期ノ刑ノ期限ハ處刑言渡シノ確定シタル日ヨリ之ヲ

起算ス可シ

確定シタル日ヨリ起算ス可シ 舊條ニ於テハ犯者ヲ市上ニ公肆スルノ日ヨリ其刑期ヲ起算セリ此規則ハ言渡シヲ受ケタル犯者ニ對シ苛酷ニ渉ル者アリ何トナレハ市上肆ノ期限ハ檢察官及ヒ犯者ノ上告ニ就テ却下シタル判決ヲ司法省ヨリ檢事長ニ送達シタル日ヲ以其始メトス恩赦ヲ乞フノ上告モ亦其期限ヲ遲延スル者アリ且言渡シヲ受ケタル犯者上告中拘留ノ日數モ皆之ヲ通算セサレハナリ裁判ノ言渡シハ其言渡シヨリ三日ノ期限内ニ上告ヲナサレハ乃チ確定トス 治三七三 三三五
檢察官或ハ犯者上告スレハ覆審院ニ於テ上告ヲ却下シタル日ヲ以確定ス

第二十三條ノ舊文ヲ錄ス左ノ如シ

第二十三條 有期ノ懲役及ヒ監役ノ犯者ヲ公街ニ肆シタル日ヨリ之ヲ起算ス可シ

第二十四條 現ニ拘留セラレシ者ニ對シ言渡シタル禁錮ノ刑期ハ檢察官ノ控訴上告ニ拘ハラズ結果如何ヲ問ハス犯者ヨリ控訴上告ヲ爲サレハ於テハ裁判言渡シノ日ヨリ之ヲ起算ス可シ

刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者控訴上告ヲ爲シ該刑ノ輕減ヲ得タル場合ニ於テモ亦同シ

禁錮ノ刑期 若シ他ノ刑ヲ言渡ス場合ハ前條ニ記載シタル如ク上告却下ノ日ヲ以其裁判ノ確定トス

拘留セラレシ者ニ對シ 此規則ハ裁判言渡シノ前拘留セラレシ者ニ非ラサレハ之ヲ適用ス可カラズ抑此寬典ハ拘留ヲ經サル者ノ爲メニ設ケタル者ニ非ス拘留ヲ經サル者ノ位置ハ前條ノ下ニアリテ

其支配ヲ受シヘキナリ

法律上重罪裁判所ト輕罪裁判所トノ區別ヲ爲サス故ニ重罪裁判所ニ於テ禁錮ノ刑ヲ言渡スモ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ言渡スモ皆此規則ヲ適用ス可シ

覆審院ニアリテハ假令他ノ事件ニ依テ逮捕拘留セラレシ者ト雖其時間ハ檢察官ノ控訴上告ニ拘ハラヌ該者ヨリ控訴上告セサルニ於テハ裁判言渡シノ日ヨリ之ヲ禁錮ノ刑期ニ算入スヘシト云々
裁判言渡シノ日ヨリ 此規則ハ禁錮ノ刑ト拘留ト情況稍同シキニ依リ裁判言渡シヲ受ケタル犯者ニ對シ檢察官ノ意見ヲ以更ニ覆審ヲ請フモ其故ヲ以延滞シタル時日ヲ犯者ニ歸セシメサルハ實ニ至理ト稱ス可シ犯者自ラ控訴或ハ上告ヲナスアレハ此寬典ニ預ルヲ何得ストナレハ其控訴上告ニ依リ犯者自ラ拘留ヲ永フスレハナリ

第二十四條ニ就テ裁判事例ヲ錄ス左ノ如シ

禁錮ノ刑ニ處セラレシ者初審裁判ニ對シ控訴ヲ爲シ而シテ後其控訴ヲ願ヒ下ケタル場合ニ於テハ禁錮ノ刑期ヲ初審裁判言渡シノ當日ニ遡リ之ヲ起算スルヲ得ヘカラサルカ

覆審院ハ刑典第二十三條及ヒ第二十四條ニ依リ然リト判決ス其理由左ノ如シ

刑典第二十三條ニ據レハ有期ノ刑ハ裁判言渡シノ確定シタル日ヨリ之ヲ起算ス凡ソ輕罪ノ控訴ハ裁判ノ執行ヲ停止スルノミナラス控訴裁判所ニ於テハ初審裁判役ノ判決シタル裁判ヲ再審スルノ効ヲ有ス故ニ控訴ハ概シテ初審裁判ノ執行ヲ停止スルノ性質アリトス

控訴裁判所ニ就テ控訴ヲ爲シタル犯者ハ現ニ拘留セラレタル身

分ナリト雖其拘留ハ審問中拘留狀ニ因テ拘留セラレシ者ニシテ
裁判言渡シニ依リ之ヲ拘留シタル者ニ非ス故ニ控訴内ノ時間ハ
刑典第二十四條ニ記載シタル特別ノ場合ニ非サレハ之ヲ其刑期
内ニ算入スルヲ得ス特別ノ場合トハ檢察官ノ控訴上告ヲ爲シタ
ル時又ハ刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ノ控訴上告ニ因リ其刑ノ輕
減シタル時是ナリ

第二十四條ノ原則ハ控訴ヲ願下ケタル犯者ニ對シテモ之ヲ適用
ス可シ蓋シ控訴内ハ其裁判確定ノ者ニ非ス假令犯者ヨリ控訴ノ
取消シヲ願ヒ其効ヲ拋棄ス下雖自ラ爲シタル控訴ニ依リ一旦確
定ノ性質ヲ失ヒシ上ハ更ニ今之ヲ復シ初審裁判言渡シノ當日ニ
遡リ之ヲ起算スルヲ得ス且上告ハ別段ナル性質ヲ有ス故ニ上告
ヲ願ヒ下ケタル犯者ニ對シテハ亦別段ナル規則ヲ設ク控訴ノ願

ヒ下ケハ上告願ヒ下ケノ如ク別段ナル効ヲ以之ニ與フルハ不可
ナリ

一五〇五^五ハ八月一日フ^レシ^ニ輕罪裁判所ニ於テ禁錮二ヶ月ノ言渡シ
ヲ受ケ同月三十一日マ^シス^控訴裁判所ノ法庭ニ於テ一旦控訴シ
タル訴狀ヲ願ヒ下ケ同裁判所ハ同日裁判言渡書ヲ以之ヲ許可セ
リ而シテ輕罪裁判所ニ於テ此控訴ハ素ヨリ成立タサル者ト視做
シ九月二十八日ノ裁判ヲ以處刑言渡シノ日ヨリ其刑期ヲ起算ス
ヘシト判決ス是裁判ノ確定セサル時間ニ於テ刑期ヲ起算シタル
ヲ以刑典第二十三條ヲ犯ス者トシ其裁判ヲ破毀ス云々紀元一千
八百五十五年十一月二十二日判決

裁判言渡シニ對シ之ヲ上告シ而シテ後自ラ其上告ヲ願ヒ下ケタ
ル時ハ既ニ經過シタル時間ヲ刑期内ニ算入スヘキカ他ノ語ニテ

之ヲ詳ニスレハ此ノ如キ場合ニ於テハ裁判言渡シノ日ヨリ起算
スヘク願ヒ下ケテ許可シタル覆審院ノ判決ノ日ヨリ起算スヘカ
ラサルカ

覆審院ハ民法第千三百五十條及ヒ第千三百五十一條ニ據リ然リ
ト判決ス其理由左ノ如シ

覆審院ハ上告ヲ判決スルノ權アリ又其願ヒ下ケタル上告ニ對シ
効ヲ生セシムルト否カラサルトヲ判決スルノ權アリ或ハ又其判
決ヲ辨明スルノ權アリ之ヲ要スルニ何レノ裁判所ト雖覆審院判
決ノ權力ト其効驗トヲ拒ムヲ得サルナリ
凡ソ刑事ノ上告ハ格別ノ性質ヲ有シ且裁判言渡シノ日ヨリ三日
内之ヲ上告セサル可カラサルヲ以期限最モ短ク又原裁判所ノ裁
判言渡書ニ於テ上告ヲナスヘキ理由ノアルヤ否ヤ且其理由ハ果

シテ結果ヲ爲スニ足ルヘキヤ否ヤヲ記載セサルヲ以犯者固ヨリ
此等ノ事情ヲ通知スル能ハス此理由ニ依リ犯者熟慮ノ後自ラ上
告ヲ願ヒ下ケタルニ於テハ其身分ヲ以上告ヲナサ、ル犯者ト同
ク之ヲ認視スヘキナリ此ノ如ク上告ヲナサ、ル犯者ト同ク之ヲ
認視スヘキ以上ハ上告後拘留ノ時間ヲ刑期内ニ算入スルハ正シ
ク裁判ノ當ヲ得ル者トス云々紀元一千八百五十二年七月二日判
決「輕罪裁判所」ノ裁判言渡シニ對シ之ヲ控訴裁判所ニ控訴シ禁錮
ノ刑ノ輕減ヲ受ケタル犯者又控訴裁判所ノ裁判ニ對シ之ヲ上告
シ而シテ其上告ハ却下セラレタリト雖該犯ノ刑期ハ輕罪裁判所
ノ裁判言渡シノ日ヨリ之ヲ起算スルヲ得ヘキカ
覆審院ハ然リト判決ス其理由左ノ如シ

「バツコン」ハ「ナント」輕罪裁判所ノ裁判言渡書ニ依テ禁錮五年ニ處セ

アレ之ヲ「アンゼ」控訴裁判所ニ控訴シ控訴裁判所ノ裁決ニ依テ
其輕罪ニ適用スヘキ短期即チ禁錮一年ニ輕減ス抑此控訴ヲ「アン
ゼ」控訴裁判所ニ附シタルハ「レ」又「控訴裁判所ノ裁判ヲ破毀シ
タル後ニアリトス

控訴裁判所ニ於テ此刑ヲ輕減シタルニ依リ該犯「バッコ」ハ刑典第
二十四條第二項ノ規則ニ就テ「ナ」ト「裁判所ノ裁判言渡シノ日ヨ
リ刑期ヲ起算セシムル」ノ權ヲ有テ該犯十二月三十日「アンゼ」控
訴裁判所ノ裁判ニ對シ更ニ上告ヲ爲シ而シテ其上告ハ敗レテ却
下セラレタリ蓋シ上告ヨリ其判決ニ至ルノ時間ハ刑期ノ經過ヲ
差障フルノ現迹アリ然レトモ此上告ニ依テ犯者ニ對シ嚮ニ控訴
裁判所ニ於テ刑ノ輕減ヲ言渡シタルニ基ツキ第二十四條ノ規則
ヲ執リテ與フ可キノ寬典ヲ失ハシメ且第二十三條ノ規則ヲ以該

犯ニ適用スルノ理由ハ決シテ生セサルナリ

紀元一千八百三十二年立法官ニ於テ有期ノ刑ノ期限ニ就キ舊規
則ヲ改正セリ今該犯ニ對シ此改正ノ意趣ヲモ体認シ之ヲ裁判セ
サルヲ得ス「アンゼ」控訴裁判所ハ「バッコ」ノ請願ニ付キ其上告却
下ノ日即チ紀元一千八百四十七年三月三十日ヨリ十二月三十日
「アンゼ」控訴裁判所ノ裁判ノ後其受クヘキ刑ノ殘期ノミヲ受ク
ヘシト判決シタルハ決シテ法律ヲ犯シタル者ニ非ス依テ其上告
ヲ却下ス云々紀元一千八百四十七年七月三日判決

第二十五條 國祭又ハ教祭ノ日及ヒ日曜日ニハ刑ヲ行フ可カラズ

國祭又ハ教祭ノ日 紀元一千八百七十年ノ公布以前ハ裁判言渡シ
ノ即日該刑ヲ執行スヘキ恒例タリキ故ニ祭日及ヒ日曜日ヲ以其執
行ヲ遲延スル者ナシ今日ノ法律ハ此ノ如ク急遽ナルヲ要セス何ト

ナレハ上告ノ期限ト又覆審院ト書類ノ往復アルヲ以皆必須ノ時間ヲ要ス此時間ハ其執行ヲ中止セサルヲ得ス抑刑ノ執行ノ故ヲ以休日及ヒ祭日ヲ騷擾スルハ實ニ無益ト謂フ可シ訟訴法第千三十七條ハ本條ノ意旨ト相符合ス其條ニ云ク祭日ニ於テハ裁判手續キニ管シタル書類ノ送達及ヒ執行ヲ爲ス可カラス國祭或ハ教祭日トハ日曜日ノエル耶蘇降誕祭アッサンシヨ耶蘇升天祭アッワンプシヨ耶蘇生母ツッサン祭諸神及ヒ一月一日其他政府ノ特旨ヲ以設置シタル所ノ國祭日諭ヘハ國家ノ洪福ヲ表シ設置シタル國祭是ナリ當今ハ八月十五日ノ祭典ノニ國祭ト稱スト云フ

該條ハ治罪法第三百七十五條ニ抵觸ス治罪法第三百七十五條ニ云ク第三百七十三條ニ記載シタル期限ノ後二十四時間ニ其刑ヲ行フ可シト云々

第二十六條 刑ノ執行ハ裁判言渡書ヲ差示シタル土地ノ街衢ニ於テ之ヲ爲ス可シ

差示シタル土地 重罪裁判所ニ於テ最モ懲戒ヲ示スニ足ルヘキ場所ヲ擇ムハ難トセス然レトモ其裁判ヲ爲シタル土地ニ就テ之ヲ執行スルヲ恒例トス言渡書ヲ以之ヲ差示スモ只執行ノ土地ノニニシテ場所ヲ差示スニ非ス場所ヲ撰ムハ全ク地方官ノ權内ニ屬スル者ナリ

第二十六條ニ付テ裁判事例ヲ節錄ス左ノ如シ

重罪裁判所ハ裁判後ノ言渡シヲ以他ノ土地諭ヘハ犯者重罪ヲ犯シタル土地ニ於テ其刑ノ執行ヲ命スルノ權アルカ

覆審院ハ否ト判決セリ

紀元一千八百五十四年七月五日ノ裁判言渡書ハ指摘ス可カラサ

ル者トス何トナレハ裁判言渡書ニ於テ執行ノ爲メ別段ナル土地ヲ差示サ、レハ重罪裁判所所在ノ街衢ニ於テ執行スヘキ者トス此場合ニ於テ七月五日ノ裁判言渡書ハ更ニ間然スヘキ者ナシ七月五日ノ裁判言渡書ニ於テ執行ノ土地ヲ明言セサルヲ以暗ニ裁判所所在ノ街衢ニ於テ行刑スヘキヲ差示シタル者トス而シテ重罪裁判所ハ裁判後言渡書ヲ以暗ニ差示シタル場所ヲ換ヘ他ノ土地ニ於テ其刑ノ執行ヲ命スルノ權ナシ是故ニ紀元一千八百四十三年七月七日ノ裁判言渡書ハ其權限ニ越ユルヲ以之ヲ取消ス云々紀元一千八百四十三年八月三日判決ニ裁判言渡書ニ於テ刑ノ執行ノ爲メ別段ナル土地ヲ差示サスシテ之ヲ脱漏シタル時ハ言渡書ハ其効ナキノ理由トナスヘキカ
 覆審院ハ否ト判決ス其理由左ノ加シ

往年刑典公布ノ時ニ於テ仍ホ存置シタル法律アリ其法律ニ據レハ刑ノ執行ハ重罪裁判所所在ノ地ノ街衢ニ於テ之ヲ爲ス可シ故ニ裁判言渡書ニ執行ノ土地ヲ明言セサレハ暗ニ其裁判所所在ノ地ニ於テ執行スヘキヲ差示シタリト看做サ、ル可カラス
 刑典第二十六條ニ於テ執行ノ地ヲ差示スヘキヲ脱漏シタル裁判ハ其効ナシトノ意義アルハ嘗テ聞サル所ナリ云々紀元一千八百四十三年八月三日判決
 覆審院ニ於テ同一ノ理由ヲ以判決シタル事例アリ之ヲ節録ス左ノ如シ

檢察官ハ裁判所ニ對シ死刑執行ノ地ヲ差示スヘキヲ請求スルノ權ナシ又重罪裁判所ニ之ヲ差示スノ責ナシ裁判言渡書ニ於テ執行ノ地ヲ差示サ、レハ重罪裁判所所在ノ街衢ニ於テ之ヲ執行ス

可シト云々紀元一千八百六十二年三月二十日判決

第二十七條

死刑ノ言渡シヲ受ケタル女懷胎ナリト申立証據明白ナル時ハ出産ノ後其刑ヲ受ケシム可シ

死刑ノ言渡シヲ受ケタル女 該條ヲ推シテ之ヲ論スレハ裁判着手前ニ於テ懷胎ナリト申立タル婦女ハ公判ニ附スヘキカ

共和三年セルミナアル月三日ノ刑法ニ於テハ死刑ニ該ルヘキ重罪

ノ告發ヲ受ケタル婦女ハ其懷胎セサルヲ確認シタル後之ヲ審理ニ

附スヘシト云々而シテ紀元一千八百十六年十一月七日覆審院ノ裁

決書ニ曰ク此法律ハ既ニ廢棄シ且此犯者ハ刑典第二十七條ノ場合

ニ於テノミ其懷胎ヲ申立ルヲ得ヘシト云々故ニ懷胎ナリト申立タ

ル婦女ニ對シ法律上之ヲ審理ニ附スルハ固ヨリ論ヲ待タサルナリ

本條ハ死刑ノ言渡シヲ受ケタル婦女ノ申述ニノミ關シタル者トス

然レトモ立法官ハ裁判着手前ノ婦女ニ對シ其懷胎ヲ自ラ保護スル所ノ精神ヲ損シ或ハ公庭上ノ論辨ニ依リ神思ヲ疲勞シ遂ニ禍ヲ胎兒ニ貽サムヲ恐レ而シテ該女ヲ輒ク公判ニ付セシメサルハ輕罪裁判所檢事ノ賢明ニ任シタリ

法律ニ於テハ死刑ノ言渡シヲ受ケタル時ニ非サレハ懷胎シタル婦女ニ對シ既ニ言渡シタル刑ノ執行ヲ停止スルヲ得ス

第二十八條

流有期ノ懲役城寨内ノ拘留監役及ヒ追放ノ刑ヲ受ケシ者ハ剝奪公權ヲ受ク可シ

剝奪公權ハ裁判言渡シノ確定シタル日ヨリ之ヲ受ク可シ

剝奪公權 紀元一千八百三十二年ノ法律第四條ニ於テ剝奪公權ノ

規則ヲ確定シ且舊法ノ意義ノ未タ完備セサル者ヲ充足ス故ニ舊條

如ク其數種ノ權界ヲ本條ノ下ニ列記スルハ冗套ニ屬ストセリ只犯

者ニ對シ剝奪公權ヲ受ク可シト明言シタルノミニテ足レリ
第二十八條ニ就テ裁判事例ヲ錄ス左ノ如シ

剝奪公權ハ主刑ノ時間ニ均ク之ヲ言渡スヲ得ルカ
覆審院ハ否ト判決セリ

此上告ヲ受ケタル裁判言渡書ハ「ペルセエ」ニ對シ監役五年及ヒ市
上肆シノ刑ヲ言渡シ而シテ該犯ハ主刑ノ刑期間剝奪公權及ヒ法
律上治産ノ禁ヲ受ケシ身分タルヲ明言セリ

刑典第二十九條ハ犯者ニ對シ言渡シタル監役ノ刑期間治産ノ禁
ヲ受クヘキ者トス第二十八條ニ記載シタル剝奪公權ノ刑ハ然ラ
ズ別ニ至重ノ効ヲ生スル者ナリ

剝奪公權ハ犯者主刑滿期ノ後ニ至ルト雖尙ホ其身分ニ及フ者ニ
シテ重罪裁判所ニ於テ更ニ期限ヲ定ムルヲ許サス今上告ヲ受ケ

タル「ポアントアーロイトル」ノ重罪裁判所ハ權限ヲ犯シ及ヒ刑典

第二十八條ヲ犯シタリ仍テ法律保護ノ爲メ之ヲ破毀ス云々記元
一千八百三十六年三月二十四日判決

第二十九條 流有期ノ懲役城寨内ノ拘留及ヒ監役ノ刑ノ言渡シヲ受
ケシ者ハ其刑期間法律上治産ノ禁ヲ受ケシ者トス但シ治産ノ禁ヲ
受ケタル者ノ後見人及ヒ後見人ノ監察者ヲ任スルニ付キ差定メタ
ル法式ニ循ヒ後見人及ヒ後見人ノ監察者ヲ任シ其財産ヲ支配ス可
シ

流有期ノ懲役城寨内ノ拘留及ヒ監役ノ刑 本條ハ追放及ヒ剝奪公
權ノ言渡シヲ受ケシ犯者ニ對スルノ明文ナシ故ニ追放及ヒ剝奪公
權ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ其財産ヲ支配スルノ權利ハ決シテ失
ハサルナリ蓋シ立法官ハ刑ノ言渡シヲ受ケ其繫留ニ因リ財産ヲ支

配スル能ハサル者ノミニ對シ法律上治産ノ禁ヲ受ケシム
 法律上治産ノ禁ヲ受ケシ者トス 治産ノ禁ハ二個ノ種類アリ一ヲ
 裁判上治産ノ禁ト云ヒ一ヲ法律上治産ノ禁ト云フ裁判上治産ノ禁
 トハ裁判ニ依テ民事ヲ行フヲ得サル者即チ白痴狂癲ニ因テ其權利
 ヲ行フヲ得サル者是ナリ 民四八九 法律上治産ノ禁トハ法律ニ依テ
 其禁ヲ受ケタル者即チ本條ニ於テ明記スル所ノ規則ヲ以禁スル者
 是ナリ
 或者本條改正ノ議案ヲ呈シテ曰ク犯者ノ親屬若シ急迫ノ事情アリ
 後見人ニ依頼シ親屬ノ會議及ヒ裁判所ノ許可ヲ得タル時ハ其救助
 ヲ受クルヲ得ヘシト云々然レトモ此要點ハ民法上既ニ規則アルヲ
 以冗議ニ歸シ遂ニ採用セラレサリシト云フ
 法律上治産ノ禁ヲ受ケシ犯者更ニ贖造ノ證書ヲ使用シ陪審之ヲ有

罪ト認視ス而シテ其所爲ノ結果及ヒ道德上ヨリ之ヲ觀レハ其使用
 ノ罪ト此治産ノ禁ト各自ニ論スヘクシテ相觸ル者ニ非ス治産ノ禁
 ヲ受ケタル犯者ハ自ラ裁判所ニ出テ訴訟スルヲ得スト雖其既ニ爲
 シタル所業ハ法律上及ヒ道德上ニ於テ重罪或ハ輕罪ナリ覆審院ハ
 此理由ヲ以犯者治産ノ禁ヲ受ケシ時間ニ於テ贖造ノ證書ヲ使用シ
 タル重罪ニ付キ更ニ其刑ヲ言渡スハ決シテ妨ケナシト判決セセリ
 ト云フ

後見人及ヒ後見人ノ監察者ヲ命ス可シ 舊條ハ管財人云々ヲ記載
 ス然レトモ民法ト其權衡ヲ一ニシ遂ニ之ヲ刪除ス蓋シ民法ハ尋常
 治産ノ禁ニ付キ後見人及ヒ後見人ノ監察者ヲ任シテ其管財者ヲ置
 クニ代ヘリ此二人ノ支配ノ職務ハ民法後見ノ篇及ヒ治産ノ禁ノ篇
 ニ記載シタルヲ以之ヲ贅言セス

欠席裁判ノ言渡シヲ受ケシ犯者ノ財産ハ後見人之ヲ支配スルヲ得
ス失踪者ノ財産ト視做シ之ヲ支配ス之ヲ評説スレハ「トメエス」官署ニ
於テ之ヲ支配スヘキナリ

第二十九條ニ就テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ。
施体及ヒ加辱ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ其後見人ノ財産ヲ
以法律上ノ書入質ト爲サシムルノ權ヲ有スルカ

〔ボオ〕ノ控訴院ハ然リト判決ス其理由左ノ如シ
刑典第二十九條ニ於テ刑ノ言渡シヲ受ケタル者其刑期間法律上
治産ノ禁ヲ受ケシ者トス云々ヲ記載ス此法律ハ蓋シ最モ官備ス
且刑ノ言渡シヲ受ケシ者ヲ以之ヲ民法上治産ノ禁ヲ受ケタル者
ノ階級中ニ置ケリ此ニ由テ之ヲ視レハ犯者民法第二千百二十一
條及ヒ第二千百三十五條ニ從ヒ後見人ノ財産及ヒ入額ヲ法律上

ノ書入質ト爲ス權アリ云々紀元一千八百五十年八月十九日判決
刑典第二十九條ニ依リ法律上ノ治産ノ禁ヲ受ケタル犯者ハ財産
ヲ他ニ讓與スルヲ得ヘキカ

覆審院ハ否ト判決セリ

民法第千百二十四條ニ於テ治産ノ禁ヲ受ケシ者ハ契約ヲ爲スヲ
得ストノ明文アリ且民法第四百八十九條瘋癲者治産ノ禁ト民法
頒告前既ニ施行シタル刑法ニ據リ施体及ヒ加辱ノ刑ノ言渡シヲ
受ケシ犯者治産ノ禁ト其區別ヲナス法律上其區別ナケレハ裁
判役此區別ヲナスヲ得ス

上告ヲ受ケタル裁判言渡書ヲ觀ルニ紀元一千八百十六年十月六
日ト其年月日ヲ記入シタル証書ハ「ルパルト」「ドロワ」治産ノ禁ヲ受
ケタル時ニ於テ爲シタリト確認シ其效ナシト明言セリ此裁判ハ

民法第千二百二十四條第千六百六十七條第千三百三十八條及ヒ刑典第
二十九條ヲ正シテ適用シタル者ナリ仍テ上告ヲ却下ス云々紀元
一千八百二十五年一月二十五日判決
有期ノ施体及ヒ加辱ノ刑ヲ受ケタル犯者ハ遺囑ノ贈遺ヲ爲スヲ
得ルカ

「ヴォルアン」ノ控訴裁判所ハ然リト判決セリ

紀元一千七百九十一年ノ刑典ニ於テ監役ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ
犯者ハ治業ノ禁ヲ受ケ且親ヲ民權ヲ行フ能ハサルノ明文アリ而
シテ紀元一千八百十年ノ刑典此規則ヲ記載セズ唯治産ノ禁ヲ受
ケシ者トスルノ明文アリ此治産ノ禁ヲ推論シテ民權ヲ行フヲ得
サルノ原因ニ擴張スルハ不可ナリ
民法第九百二條ニ據リテ之ヲ觀レハ法律上不能力者ヲ除クノ外

ハ遺囑ノ贈遺ヲ爲スヲ得云々紀元一千八百十年ノ刑典第二十九
條有期ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ治産ノ禁ヲ受ケシ者トス云
々蓋シ治産ノ禁ノ効ハ親ヲ其財産ヲ支配スルヲ禁スル者ニシテ
自然法ニ於テ得ル所ノ權利及ヒ民法上遺囑ノ贈遺ヲ禁セサル所
ノ權利ニハ關係セサルナリ此理由ニ依リ「ロト」女ニ爲シタル遺
囑ノ贈遺ハ其效アリトス云々紀元一千八百二十二年十二月二十
八日判決

第三十條 刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ノ財産ハ刑期ノ終リシ後之ヲ本
人ニ還與シ後見人ヨリ其支配中ノ算計ヲ爲ス可シ

第三十一條 刑期ノ時間ハ金錢或ハ飲食ノ品及ヒ犯者所有物ノ入額
ヲ決シテ犯者ニ渡ス可カラズ

刑期ノ時間 此條ハ有期ノ懲役監役及ヒ流ノ刑ノ言渡シヲ受ケタ

ル者ニ就テ之ヲ論セリ
金錢或ハ飲食ノ品及ヒ犯者所有物ノ入額ヲ決シテ犯者ニ渡ス可カ
ラス 犯者其財物ヲ用ヒテ逃亡ヲ圖リ或ハ獄舎ヲ以嬉娛又ハ猥褻
ノ場ト爲スヲ恐ル故ニ之ヲ嚴禁ス

第三十二條 追放ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ政府ノ命ニ因リ佛蘭
西領地外ニ遷徒ス可シ

追放ノ刑ハ五年ヨリ少カラヌ十年ヨリ多カラサル可シ

第三十三條 追放ノ刑ニ處セラレシ犯者該刑ノ未ダ終ラサル中ニ佛
蘭西ノ領地内ニ歸リ來タル時ハ其人ニ相違ナキノ証ノミニテ城寨
内拘留ノ刑ヲ言渡ス可シ但シ此期限ハ犯者歸リ來タルノ日ヨリ追
放滿期ノ日ニ至ル迄ノ其時間ヨリ少カラヌ又其二倍ヨリ多カラサ
ル可シ

但シ此期限ハ犯者歸リ來タルノ日ヨリ追放滿期ノ日ニ至ル迄ノ其
時間ヨリ少ナカラヌ又其二倍ヨリ多カラサル可シ 舊條ハ此犯者
ニ對シ流刑ヲ言渡シタリキ紀元一千八百三十二年ノ法律ニ於テ之
ニ代フルニ城寨内拘留ノ刑ヲ以セリ然レトモ通常ノ城寨内拘留ノ
刑ト稍異ナレリ蓋シ其時間ニ就テハ非常ノ性質ヲ有ス

第三十四條 剝奪公權ハ左ノ數件ニ在リ

- 第一 總テ官職公務ヲ剝奪シ及ヒ其避任ヲ禁止スル事
- 第二 投票ヲ爲スノ權議員ヲ選舉スルノ權及ヒ議員ニ選舉セラ
ルノ權且總テ公權政權又ハ賞牌佩帶ノ權ヲ剝奪スル事
- 第三 陪審鑒定人或ハ事實ノ証人ト爲リ及ヒ參考ニ供スルノ外裁
判所ニ於テ證據ヲ陳述スルヲ禁止スル事
- 第四 親屬會議ノ議員ト爲リ及ヒ親屬ノ許諾ヲ以己ノ子ノ爲メニ

ナルハ格別更ニ其後見人監財人後見人ノ監察者及ヒ裁判所ヨリ命
スル輔佐人トナルヲ禁止スル事

第五 兵器ヲ携帶スルノ權護國兵ト爲ルノ權佛蘭西ノ兵籍ニ入り
兵役ヲ執ルノ權學校ヲ開クノ權教師校長或ハ幹事ノ名義ヲ以教育
ノ場所ニ於テ教授ヲ爲シ或ハ任用ヲ受クルノ權ヲ剝奪スル事
剝奪公權 此刑ハ加辱ニシテ汚職ノ重罪 一七六及ヒ偽誓ノ重罪 三
六六ニ適用ス

此刑ハ裁判言渡シノ日ヨリ其效ヲ生ス他ノ刑ト同視ス可カラズ
剝奪及ヒ禁止 此刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者現ニ其職ニ在レハ之ヲ
剝奪シ職ニ在サル者ハ向後其職務ヲ受クルヲ禁止ス
公務 公証人代書人使吏アシヤノドシヤノシ周施人手形賣買是ナリ
參考ニ供スルノ外 裁判役ハ訴訟ニ付キ闕ク可カラサル場合アリ

犯者ニ對シ信用ヲ加ヘスシテ唯其陣述ヲ聽クヲ得ヘシ何トナレハ
此犯者ハ誓ヲ爲シ及ヒ証人タルノ身分ヲ具セサレハナリ
後見人及ヒ監財人ト爲ル事 此至重ノ職務ハ恒ニ道德上ニ基キテ
之ヲ公任ス如何ソ既ニ名譽ヲ失ヒタル人ニ之ヲ任スルノ理アラム
ヤ己ノ子ノ爲メニスルハ格別 主刑滿期ノ後ニ非サレハ此職務ニ
當ル能ハサルハ論ヲ待タス 二〇八 然レトモ法律ノ深意ハ親子慈愛
ノ至情ヲ重クシ此法律ニ對シ怨懟スル所ナカラム但シ此場合ニ於
テモ親屬會議ノ承諾ヲ待チテ之ヲ任スヘシ

第三十四條ニ付テ裁判事例ヲ節録ス左ノ如シ
輕罪裁判所ニ於テ禁錮ノ屬刑トシテ公權停止ノ刑ヲ言渡シ而シ
テ其期限ヲ遺漏シタル時ハ其刑ノ短期ニ處スヘキカ

「ヲルアン」ノ控訴裁判所ハ裁判言渡書ニ此期限ヲ差定メサルハ遺

漏ニ出タルヲ以刑典上最モ宥恕ヲ垂レ該刑ノ短期ニ處ス可シ故ニ此刑期ハ五年ニシテ十年ニ非スト判決セリ云々紀元一千八百四十三年九月八日判決

加辱ノ刑ノ言渡シニ因リ証人ト爲ルヲ得サル者裁判所ニ於テ故サヲニ其限内ノ身分ヲ隱匿シテ誓ヲナシ詐僞ヲ陳述シタル時ハ僞証ノ重罪トナルカ

覆審院ハ然リト判決セリ

法律上參考ノ爲メニ非サレハ裁判所ニ於テ證據ヲ陳述スルヲ得スト云々此剝奪者ノ陳述ニ付キ其要スル所ハ裁判役陪審及ヒ被告入ヲシテ因テ以注意スル所アラシムルニ過キス若シ此陳述ニ對シ公然誓ヲ爲シタル証人ノ如ク之ヲ信用スルハ實ニ至嶮ナリ裁判所ニ於テ夙ニ其証人トナルヲ得サル身分ヲ認視スレハ此陳

述ハ參考ノ爲メ唯之ヲ取捨スヘキナリ今其身分ヲ隱匿シ裁判所ヲシテ公然証人ト認視セシメタルニ依リ僞証ノ罪アリトシ之ヲ裁判スルハ法律ヲ犯ス者ニ非ラス云々紀元一千八百四十三年七月二十九日判決

此陳述ハ正當ナル証人ノ裁判所ヲ欺クト同一ノ効ト其性質トヲ有スト云々紀元一千八百四十三年六月二十九日判決

第三十五條 剝奪公權ノ刑ヲ主刑トシテ言渡ス時ハ禁錮ノ刑ヲ屬刑トシテ之ヲ言渡スヲ得其禁錮ノ期限ハ裁判言渡シヲ以定ムル者ニシテ五年ヲ越ユ可ラス

若シ犯者外國人或ハ國民ノ身分ヲ失ヒタル佛蘭西人ナル時ハ必ス禁錮ノ刑ヲ言渡ス可シ

禁錮ノ刑ヲ屬刑トシテ之ヲ言渡スヲ得 剝奪公權ノ刑ヲ言渡シ總

テノ官職公務ヲ禁止スルハ人民ノ身分ニ就テ至重ノ刑罰ト稱スヘ
シト雖下等ノ身分ニ於テハ却テ有名無實ノ刑ニ属ス故ニ此規則ヲ
設クルナリ蓋シ禁錮ノ属刑ハ裁判役ニ於テ剝奪公權ノ本刑ヲ科シ
尙ホ十分ナラスト思量スル時ノミ之ヲ言渡ス可シ
必ス禁錮ノ刑ヲ言渡ス可シ 外國人或ハ國民ノ身分ヲ失ヒタル佛
蘭西人ニ對シ此禁錮ノ刑ヲ言渡スハ裁判役ノ「ハキユルタチイブ」爲
ヲ得又爲サ、ニ任スヘキ者ニ非ス何トナレハ剝奪公權ノ刑ハ外國
人ニ對シ僅々一部ノ權利ヲ停止スルノミ故ニ必ス禁錮ノ属刑ヲ以
之ヲ言渡シ其權衡ヲ均シクス

第三十六條 死無期及ヒ有期ノ懲役流域案内ノ拘留監役剝奪公權及
ヒ追放ノ刑ノ言渡シハ其文ヲ摘撮シテ之ヲ印刷ス可シ 此言渡シ
ハ該州ノ首府此言渡シヲ爲シタル府ノ街衢罪ヲ犯シタル邑刑ヲ行

ヒタル邑及ヒ該犯居住ノ邑ニ於テ之ヲ貼示ス可シ
紀元一千八百三十一年ノ法律ヲ以廢止セラレタル舊條ヲ錄ス左
ノ如シ

舊第三十六條 死無期及ヒ有期ノ懲役流監役「カルカン」追放及ヒ
剝奪公權ノ刑ノ言渡シハ其文ヲ摘撮シテ印刷ス可シ
此言渡シハ該州ノ首府此言渡シヲ爲シタル府ノ街衢罪ヲ犯シタ
ル邑刑ヲ行ヒタル邑及ヒ該犯居住ノ邑ニ於テ之ヲ貼示ス可シ

第三十七條

紀元一千八百三十年「カルト」第五十七條ヲ以廢止シタル舊條ヲ
錄ス左ノ如シ

舊第三十七條 凡ソ沒収トハ處刑人ノ財産ヲ官ニ収メ官ノ所有
ニ属スルヲ云フ此沒収ハ法律上別段記載シタル場合ニ非サレハ

之ヲ言渡スヲ得ス

第三十八條

舊第三十八條 凡ソ沒収ハ沒収シタル財産ノ金額限リ其正實ナ

ル負債ヲ拂フノ責アリ子孫或ハ他ノ卑屬ノ親ニ父ノ奪フ可カラ

サル部分ノ半額ヲ與フルノ責アリ又其食料ヲ給スルノ責アリ

第三十九條

舊第三十九條 國王ハ沒収シタル財産ヲ以處刑人ノ父母或ハ他

ノ尊屬ノ親寡婦公生或ハ私生ノ子養子他ノ正統ノ卑屬及ヒ其他

ノ親屬ニ對シ恩惠ノ爲メ之ヲ給與スルヲ得ヘシ

第二章 懲治ノ刑

第四十條

禁錮ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ懲治監内ニ繋留シ犯者

ノ望ム所ニ任セ場内ニ於テ設ケタル數種ノ工業中ニ服役セシム可

シ

此刑ノ期限ハ六日ヨリ少カラス五年ヨリ多カラサル可シ但シ累犯

ノ場合或ハ法律上他ノ期限ヲ定メタル場合ニ於テハ此限ニ非ラス

一日禁錮ノ刑ト稱スルハ二十四時間トス

一月禁錮ノ刑ト稱スルハ三十日トス

禁錮ノ刑ノ言渡シ 此刑ハ第二十三條及ヒ第二十四條ニ據リ該裁

判ノ確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

懲治監 懲治監ヲ以城寨内拘留ノ場所ト相混ス可カラズ紀元一千

七百九十一年七月二十二日ノ法律第三條ヲ按スルニ曰ク若シ重罪

裁判所ニ於テ城寨内拘留ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ニ對シ用フル

所ノ場所ヲ以懲治監ノ用ニ充ツル時ハ懲治監ノ場所ヲ明ニ區別ス

可シ又若シ行政規則ニ於テ拘留所ヲ懲治監ニ準スル時ハ此拘留所

ニ於テ該刑ヲ受クル者ト認視ス可シト云々
 六日ヨリ少カラズ 六日ヨリ日數ヲ減スル時ハ其禁錮ハ即チ違警
 罪ノ刑ナリ 四六五
 紀元一千八百十七年ノ法律ニ由リ之ヲ觀レハ一年以上禁錮ノ刑ノ
 言渡シヲ受ケタル犯者ハ「メニシ」ノサント「ラアル」獄舎ニ於テ監役或ハ懲
 役ノ言渡シヲ受ケシ犯者ト同ク之ヲ拘置スト云云
 控訴ニ於テ禁錮ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル時ハ控訴裁判所所在ノ獄
 舎ニ於テ該刑ニ處スヘキカ又ハ初審裁判所所在ノ獄舎ニ於テ該刑
 ニ處スヘキカノ疑問アリ此疑問ハ先ツ裁判ノ結局如何ヲ區別シ而
 シテ後之ヲ明辨ス可シ控訴ニ於テ初審裁判ヲ認可シタル時ハ初審
 裁判ヲ以執行ス故ニ禁錮ノ刑ハ初審裁判所々在ノ地ノ獄舎ニ於テ
 之ヲ受ケシム若シ初審裁判ヲ變更シタル時ハ其處刑ハ控訴裁判所

ニ屬ス故ニ所在ノ地ノ獄舎ニ於テ其刑ヲ受ケシムヘキ者トス
 第四十條ニ就テ裁判事例ヲ錄ス左ノ如シ
 犯者ヲシテ該刑ヲ受ケシムル爲メ懲治監内ニ押送スル迄其守衛
 ノ爲メ警視廳ノ拘留所ニ拘留シタル時間ハ犯者言渡シヲ受ケタ
 ル禁錮ノ刑ノ償ト看做シ之ヲ刑期内ニ算入スルヲ得ルヤ
 覆審院ハ否ト判決セリ
 警視廳ノ拘留ハ如何ナル關係アリト雖懲治監内ノ拘留ト看做ヲ
 得スベルツド「シヤツシ」ハ捕吏之ヲ逮捕シテ「巴里斯府」ノ警視廳ニ
 拘留ス之ヲ懲治監ニ押送シ其守衛ノ爲メ準備シタル所ノ處置ナ
 リ蓋シ刑ノ執行ニ付テハ時宜ニ應シ至要ノ處置ヲ準備スルヲ得
 而シテ之ヲ其刑ニ混スルハ甚タ不可ナリ
 又此拘留ヲ禁錮ノ刑ノ償ト看做スヲ得ス

如何ナル場合ヲ問ハス犯者自ラ裁判ヲ執行スヘキ地ヨリ逃亡シタルニ依リ更ニ復之ヲ押送スルノ際至要ノ處置ヲ爲シタルニ對シ之ヲ哀訴スルノ權ナシ

セマノノ裁判所ニ於テ警視廳ノ拘留所ヘ拘留サレタルハ是權限ヲ越スヤツシハ規則ニ從ヒ該刑ヲ受ケタル者ト判決スルハ是權限ヲ越スタルナリ因テ其裁判ヲ破毀スト云々

第四十一條 輕罪ノ爲メ禁錮ヲ受ケシ犯者ノ工業ヨリ生シタルノ利益金ハ一分ヲ懲治監内ノ費用ニ供シ一分ヲ犯者ニ時宜ヲ料リ慰安ヲ與フルノ用ニ供シ又其一分ヲ犯者出場ノ時與フル所ノ貯金ト爲ス可シ但シ此等ノ事ハ行政規則ニ循ヒ之ヲ定ム
輕罪ノ爲メ禁錮ヲ受ケシ犯者ノ工業ヨリ生シタル利益金 此文面ヨリ左ノ三件ヲ生ス

其一 如何ナル工業ト雖未決ノ拘留人ニ對シ之ヲ命スルヲ得ス此拘留人ハ輕罪ノ爲メ拘留セラレタル者ニ非ス何トナレハ未ダ裁判言渡シヲ受ケサルヲ以ナリ

其二 如何ナル工業ト雖違警罪ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ニ對シ服役セシムルヲ得ス

此二個ノ場合ニ於テ自分ノ所望ニ依リ爲シタル工業ノ利益金ハ全ク本人ニ屬セシム可シ

一分ヲ懲治監内ノ費用ニ供シ 此規則ハ紀元一千七百九十一年七月二十二日法律ノ趣意ト乃チ同一ノ理ナリ

犯者ニ時宜ヲ料リ慰安ヲ與フル時ノ用ニ供シ 此慰安ヲ與ヘ犯者ヲ賞スルハ行政官ニ屬ス犯者禁錮中行政官ニ於テ其慰安ヲ與ヘサレハ此部分ノ利益金ハ犯者ノ資金内ニ加入ス可シ云々ノ說アリ此

説穩當ナル者ニ似タリ
貯金ト爲ス可シ 此規則ノ要用タルハ人ノ能ク知ル所ナリ蓋シ處
刑人ヲ放解スルニ徒手所ヲ失ハシメス尙ホ其饑渴ヲ救ヒ且其再犯
ヲ預防ス

第四十二條 輕罪ヲ裁判スル裁判所ニ於テ別段定リシ場合ニ付中左
ノ公權民權及ヒ族權ノ全部或ハ一部ヲ行フヲ禁スルヲ得ヘシ

第一 投票ヲ爲スノ權及ヒ議員ヲ撰舉スルノ權

第二 議員ニ撰舉セラル、ノ權

第三 陪審ノ職務或ハ他ノ公益ノ職務或ハ更ニ官職ヲ受ケ或ハ此
職務官職ヲ行フノ權

第四 兵器ヲ携帯スルノ權

第五 親屬ノ決議ニ投票スルノ權

第六 後見人又ハ監財人トナル權但シ親屬會議シ其承諾ヲ得テ子
ノ爲メニ之ヲ行フハ此限ニアラス

第七 監定人或ハ証書類ノ証人トナルノ權

第八 參考ノ爲メニ供述スルノ外裁判所ニ於テ證據ヲ陳述スルノ
權

第四十二條ニ就テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ

詐欺取財ノ輕罪ヲ以其刑ヲ受ケタル公務人就裡使吏ハ刑典第四
百五條ニ記シタル刑ニ拘ハラヌ第四十二條ニ依リ有期間使吏ノ
職務ヲ行フノ禁ヲ受ケシムヘキカ

覆審院ハ否ト判決セリ

凡ソ公務ハ刑典第四十二條第三項ノ部内ニ屬スル者ニアラス
凡ソ公務ハ公ナル性質ヲ有スルモ政府ヨリ官吏ニ委任シタル公

權ノ一部ヲモ行ナハサル所ノ人ニ對シ之ヲ委任スル者ナリ
 抑刑典ハ他ノ法律ニ比スレハ其包括スル所甚ク狹シ官職ト公務
 トノ區域ハ刑典第四十二條第三項ト第三十四條第一項トノ成文
 アリテ嚴ニ之ヲ割別ス故ニ法律上別段記載シアル場合ノ外ハ公
 務ノ禁止及ヒ剝奪ヲ裁判所ニ於テ之ヲ言渡スヲ許サス
 刑典第四百五條ニ依リ詐欺取財ノ輕罪ヲ以禁錮一年ノ刑ニ處セ
 ラレタル「ヒシヤ」ニ對シ該刑滿期ノ後第四十二條ニ記載シタル
 權利ノ執行就裡五年間使吏ノ職務ヲ行フヲ禁シタル裁判ハ權限
 ヲ超エ且第四十二條第三項ヲ誤解シタル者ナリ仍テ之ヲ破毀ス
 云々紀元一千八百六十三年四月三十日判決
 第四十三條 裁判所ニ於テハ法律上別段ナル規則ヲ以前條ニ記載シ
 タル禁止ヲ言渡スヲ差許スカ或ハ命令シタル場合ニ非サレハ之ヲ

言渡ス可カラズ

第三章 重罪輕罪ニ對シ言渡スヘキ刑及ヒ其他ノ處分

第四十四條 紀元一千八百五十一年十二月八日ノ勅令ヲ以該條ヲ改正ス

紀元一千八百五十一年十二月八日ノ勅令 第三條 監視ノ刑ノ効ハ政府ニ於テ犯者刑期
 ノ終リシ後居住スヘキ場所ヲ定ムルノ權ヲ生スルニアリ犯者其居
 住ヲ爲スヘキ地ニ引續テ現在スルヲ証スルニ適當ナル法式ハ行政
 官ニ於テ之ヲ定ム可シ
 政府ニ於テ犯者ノ居住スヘキ地ヲ定ムルノ權ヲ生スルニアリ 舊
 第四十四條ハ此改定ノ本條ト全ク相異ナレリ舊第四十四條ニ於テ
 ハ政府處刑人ノ現住ヲ禁スヘキ場所ヲ定ムル權ヲ有セリ故ニ處刑
 人ハ禁止ノ場所ヲ除クノ外其望ニ從ヒ他ノ地所ニ移住スルヲ得今
 日ノ法律ハ政府ニ於テ其居住スヘキ地所ヲ定ムル權ヲ有セリ紀元

一千八百五十一年十二月八日ノ勅令ヲ以テ改正シタル處ノ舊第四十四條紀元一千八百三十二年ノ法律モ亦其以前保証人ヲ要シタリシ所ノ規則紀元一千八百三十二年ノ法律ヨリ變更セリ蓋シ此舊規則ハ處刑人若シ保証人ヲ立テサル時ハ政府其處刑人ニ對シ刑期ノ終リシ後差定メタル地ニ引續テ居住スヘキヲ命スル權ヲ有セリト認視セサル可カラズ紀元一千八百三十二年ノ法律第十四條ハ其刑ヲ受ケシ犯者ニ對シ最モ寬典トス何トナレハ此監視ノ刑ノ効ハ行政上危疑如何ト思料シタル場所ニ其現住スルヲ禁スルニ在ルノミ政府ハ只之ヲ禁スルノ權ヲ有ス故ニ處刑人ハ禁セサル地所ニ於テ他ノ國民ト同一ノ自由權ヲ有セリ其移住スルモ只二十四時間内ニ邑長ノ面前ニ出テ啓申スルヲ以足レリトス紀元一千八百五十一年ノ勅令ハ乃チ紀元一千八百三十二年ノ法律紀元一千八百三十二年ノ法律ニ復セリ然レトモ紀元一千八百三十二年ノ法律

法律ノ如ク其保証人ハ之ヲ要セサリキ

紀元一千八百三十二年立法官第四十四條ヲ論議スルノ際ニ於テ論者某住居ノ語ノ意義ヲ説明シテ曰ク法律ノ適用ニ於テ此語ハ如何ナル意義アリト雖必ス之ヲ行政上ノ處分ニ付シテ認視セサル可カラズ喻ヘハ巴里期府内ニ居住ヲ差定メタル者若シ二日或ハ三日オトイコ地名巴里期府近傍ノ邑ニ赴キシヲ以テ其住居ヲ變シタリシ者ト言フハ豈ニ苛酷ノ論ニ非サラムヤ是乃チ一時ノ他行ナリト云々

紀元一千八百五十一年十二月八日勅令ヲ以改正シタル所ノ舊條ヲ錄ス左ノ如シ

舊第四十四條 監視ノ刑ノ効ハ政府ニ於テ犯者刑期ノ終リシ後其現住スルヲ禁スヘキ地所ヲ定ムルノ權ヲ生スルニ在リ且犯者ハ放免前住居セムト欲スル所ノ地所ヲ啓申シ其經由セサルヲ得

サル所ノ路筋及ヒ通行中各地ニ滞留ノ時間ヲ差定メタル路次証書ヲ受ケ既ニ到着シタル後二十四時間内ニ邑長ノ面前ニ參出ス可シ或ハ又犯者他ニ轉住スル時ハ三日前ニ其地所ヲ官吏ニ指示シ更ニ路次證書ヲ受クルニ非サレハ住居ヲ變スルヲ得ス

紀元一千八百五十一年十二月八日ノ勅令書ヲ録ス左ノ如シ

第一條 監視ノ刑ヲ受ケタル者其監視ニ背クノ罪アリト確認シタル時ハ一般取締ノ處分ヲ以處刑人ヲ護送スル所ノカイヤンヌ或ハアルゼリイ以上ノ植民地ニ之ヲ送致スルヲ得ヘシ但シ此時間五年ヨリ少カラヌ十年ヨリ多カル可カラヌ

第二條 謀叛ノ徒黨ニ加ハリタル罪ヲ確認シタル者モ亦同一ノ方法ヲ適用ス可シ

第三條 本條ノ下ニ記載ス故ニ贅セズ

第四條 監視ノ刑ヲ受ケタル者ハ巴里期府及ヒ其近傍ノ邑ニ滞在スルヲ禁ス

第五條 前條ニ指示シタル者ハ此勅令布達ノ日ヨリ十日内ニ巴里期府及ヒ其近傍ノ邑ヲ退去ル可シ但シ行政官ヨリ滞在ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ非ス路次及ヒ救助ノ証券ヲ願フ者ニハ之ヲ附與ス可シ路次證書ニハ原住所並ニ新ニ撰ミタル地所ニ至ル迄ノ路筋ヲ定ム可シ

第六條 此勅令第四條第五條ニ記載シタル規則ニ背キタル場合ニ於テハ該者ヲカイヤンヌ或ハアルゼリイニ之ヲ送致スルヲ得ヘシ

第七條 此勅令ニ從テ植民地ニ送致シタル者ハ其懲役場ニ定メタル工業ニ從事セシム可シ又其民權及ヒ政權ヲ禁ス可シ且該者

ハ兵事裁判所ノ管轄ヲ受ケ兵事ノ法律ヲ該者ニ適用ス可シ但シ逃亡シタル場合ニ於テハ猶其受クヘキ期限ニ過キサル時間ノ禁錮ノ刑ニ處ス可シ該犯ハ禁錮ノ時間行政或ハ兵事ノ長ニ對シ兵事懲戒例ニ從フ可シ

第八條 行政權ノ處置ヲ以此處刑人ヲ送致シタル所ノ植民地ノ諸規則ヲ定ム可シ

第四十四條ニ就テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ

此監視ノ規則ニ背キタル者ハ刑典第四十五條ノ刑ヲ受クヘキカカ覆審院ハ然リト判決セリ其理由左ノ如シ

紀元一千八百五十一年十二月八日ノ勅令ハ一般ノ安寧ヲ保護スル爲メ監視ノ刑ノ效用ヲ變更シ而シテ刑典第四十四條ノ規則モ亦從テ之ヲ變更セリ

紀元一千八百五十一年ノ法律ニ於テハ監視ノ刑ノ效用トシテ該監視ヲ受ケタル者ハ巴里斯府及ヒ巴里斯府近傍ノ邑ニ滞在スルヲ禁ス

凡ソ監視ノ刑ヲ受ケシ者此禁ニ背キタル時ハ乃チ法律ニ對シ遵守スヘキ所ノ義務ニ背ク者ナリ而シテ此犯罪ノ刑ハ載セテ刑典第四十五條ニ在リ

紀元一千八百五十一年十二月八日ノ勅令第五條第六條ノ規則ハ此勅令第一條ノ適用ヲナシ而シテ該監視ニ背キタル者ニ對シ行政上ノ處分ヲ以執行スヘキヲ允許スルノミ今監視ノ刑ノ法律ニ背キタル者ニ對シ裁判所ニ於テ刑典ニ據リ該刑ヲ適用スルハ素ヨリ理ノ當然ナリ

該犯者ノ事實ヲ詳ニスルニ裁判官渡書ニ於テ「ライモン」ノ巴里斯

府ニ來タルハ既ニ其確証アリテ紀元一千八百五十一年十二月八日ノ法律第四條ニ明記シタル禁ヲ犯シ且「ライモン」ハ嘗テ巴里斯府ニ住居スルヲ禁セラレシ者ナリ
 斯ノ如ク證據ノ確認スヘキヲ以刑典第四十五條ニ依リ「ライモン」ニ該刑ヲ適用シタルハ道理ニ背キタル者ニ非ス故ニ上告ヲ却下ス云々紀元一千八百六十三年二月十九日判決

第四十五條 監視ノ刑ヲ受ケタル者前條ノ規則ニ背ク時ハ輕罪裁判所ニ於テ五年ニ過サル期限間禁錮ノ刑ヲ言渡スヘシ
 監視ノ刑ヲ受ケタル者前條ノ規則ニ背ク時 紀元一千八百三十二年ニ於テ改正シタル第四十四條ハ紀元一千八百五十一年十二月八日ノ勅令第三條ヲ以又之ヲ改正シタルニ依リ本條ノ刑ハ新ニ改正シタル第四十四條ノ規則ニ適用スルハ論ヲ待タス仍ホ昔日ノ如ク

行政上ノ規則ニ違背スル者ノミニ對シ此本條ヲ適用ス可キナリ
 輕罪裁判所ニ於テ言渡ス可シ 紀元一千八百三十二年ニ於テ廢棄シタル所ノ舊第四十五條ハ行政官ニ犯者ヲ拘留スルノ權ヲ附與シタリキ法律ノ日ニ正理ニ販スルヤ竟ニ此不規則ヲ改正セリ
 五年ニ過サル期限間 該條ノ下ニ於テ刑ノ長期ノミヲ定メテ短期ヲ定メス蓋シ法律ノ意懲治ノ刑ヲ適用スルモ警察ノ刑ヲ適用スルモ皆裁判役ノ權内ニ委任スル者ナリ
 改正律ノ公布前ニ於テ監視ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル者此規則ニ違背シタル時ハ改正律ニ從テ裁判セサルヲ得ス何トナレハ此犯罪ハ舊規則ノ得テ支配スル所ニ非サレハナリ

紀元一千八百三十二年ノ法律ヲ以廢棄シタル所ノ舊條ヲ錄ス左

警第四十五條 此命令ニ從ハサル場合ニ於テハ政府處刑人ヲ逮捕シ之ヲ拘留スルノ權アリ但シ其監視ノ刑ニ差定メタル期限間之ヲ拘留スルヲ得ヘシ

第四十五條ニ就テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ

監視ノ刑ヲ受ケタル犯者ニ對シ泛シ居住ヲ禁スヘキ土地ヲ差定

メテ居住スヘキ土地ヲ差示サ、ル時ト雖其居住ヲ禁シタル都府

ニ現在シタルニ於テハ監視ノ規則ニ背クノ罪トスルカ

覆審院ハ斯ノ如キ事件ハ刑典第四十四條及ヒ第四十五條ニ間據

ス可カカラスト判決セリ

刑典第四十四條及ヒ第四十五條ヲ考フルニ凡ソ監視ノ刑ヲ受ケ

タル者第四十四條ノ規則ニ背キタル場合ノミ第四十五條ノ刑ヲ

適用スルヲ得ヘシ且裁判言渡書ニハ刑ヲ適用スル所ノ罪狀ヲ明

示スヘキ者トス

上告ヲ受ケタル裁判言渡書ニ於テ「キヤルドウケルソオシ」ニ對シ其

居住スヘキ地所ヲ差定メタル顛末及ヒ其地所ヲ立去リタル顛末

路筋ヲ記載シタル路次証書ヲ與ヘタル顛末及ヒ其路筋ヲ經由セ

サルノ顛末ヲ明記セス故ニ刑典第四十五條ニ記載シタル犯罪ノ

原素トナル性質ハ之ヲ徴スル者ナシトス

以上ノ場合ニ於テ「リヨソ」ノ控訴裁判所ハ刑典第四十五條ニ依リ

該刑ヲ言渡セリ是第四十五條ヲ誤用シタル者ナリ因テ此裁判ヲ

破毀ス紀元一千八百十五年八月十五日判決

監視ノ刑ヲ受ケタル者其居住スヘキ地所ニ赴クタメ路次証書ヲ

受ケ而シテ其路筋ニ循ハサル時ハ監視ノ規則ニ背クノ罪アリト

スルカ

「オルレアン」ノ控訴裁判所ハ然リト判決セリ
 監視ノ刑ヲ受ケタル「ルナウール」ハ紀元一千八百五十年七月三十
 一日「アザンソン」ノ縣廳ヨリ「モンタルグイス」ヲ經テ「モルレス」ニ赴ク
 爲メ路次証書ヲ受取リシ顛末ハ該審問書及ヒ求刑ノ原告書ニ於
 テ明瞭セリ然ルニ「ルナウール」路次証書ヲ受取リタルノ後其住所
 ニ趣カス既ニ路筋ヲ離レ六週間ニ達スヘキ「シヨエール」ノ邑内ニ於テ
 逮捕サレ且路次証書ハ夙ニ自ラ破棄シテ之ヲ出ス能ハサリキ
 「ルナウール」逮捕ノ際ニ當リテ自ラ「ピヲソ」ト偽名シ且偽リテ「オル
 レアン」ハ余カ定住ノ地所ト稱シ凡ソ監視ヲ免レムカ爲メ其抵拒
 シタル所業ハ乃チ「ダンタチア」ノ罪跡アリトス
 斯ノ如ク事件ノ合發シタルハ監視ノ規則ニ背ク輕罪ナリ仍テ上
 告ヲ却下ス云々紀元一千八百五十年十二月三日判決

監視ノ刑ヲ受ケタル者許可ヲ得スシテ其差示サレタル居住ノ地
 所ヲ轉去シタル時ハ規則ニ違背シタル者トシ刑典第四十五條ノ
 刑ニ處スヘキカ
 舊第四十四條ノ未タ改正セサル時ニ於テ覆審院ハ然リト判決セ
 リ
 「ベリエ」^エ「アントレキ」^ニヲ出發シタル後第四十四條ノ規則ニ從ヒ其許
 可ヲ求メスシテ數次其住居ヲ轉移セリ而シテ第四十五條ニ記載
 シタル刑ヲ受ケタルハ至當ナリトス仍テ上告ヲ却下ス云々紀元
 一千八百四十五年十月十八日判決
 五年間監視ノ刑ヲ言渡シ而シテ刑典第四十四條ノ規則ニ違背ス
 ルニ依リ又禁錮ノ刑ヲ言渡シタル犯者ハ其刑期間此監視ノ時間
 ヲ中止シ滿期ノ後更ニ之ヲ受クヘキカ

覆審院ハ然リト判決セリ其理由左ノ如シ

刑典第十一條ニ依テ之ヲ觀レハ監視ハ乃チ一ノ刑名ナリ

凡ソ監視ノ刑ヲ受ケシ者更ニ輕罪ヲ犯シ就裡刑典第四十四條ニ

記載シタル規則ニ違背シテ禁錮ノ刑ニ處セラレタル場合ニ於テ

其禁錮ノ故ヲ以一ノ刑名タル監視ノ刑ヲ免カルヘキノ理ナク且

其明文アルハ更ニ見聞セサル所ナリ

凡ソ刑典第四十五條ニ依リ禁錮ノ刑ヲ言渡スヘキ場合ハ法律上

輕罪ト認視シタル今次ノ犯罪ヲ罰スル者ニシテ之ヲ嚮ニ言渡シ

タル監視ノ刑ニ換ヘ又ハ之ニ加重スルノ謂ニ非サルナリ

「ロデルシ」ハ年庚幾歲迄ト差定メ或ハ某月某日迄ト差定メタル言

渡シヲ受ケタルニ非ス監視五年ノ言渡シハ素ヨリ定期アリ而シ

テ又之ヲシテ其定期ニ超エシムルヲ得ス

凡ソ犯者他ノ刑ヲ受ケシ時間ハ正ク監視ノ刑ヲ受ケタル身分ヲ
有セサル者トス

現今施行スル所ノ刑典第四十五條ハ紀元一千八百十年ノ刑典ニ

反シ禁錮ノ刑期ヲ監視ノ刑期ニ超ユルヲ禁セス舊第四十五條而

シテ該條ハ監視ノ刑ニ就テ時間ノ過不及アルニ拘ハラヌ禁錮五

年ノ最上點ヲモ言渡スヲ得ルナリ

「ロデルシ」ハ監視五年ノ刑ヲ受ケ而シテ該刑ハ紀元一千八百三十

五年三月十五日ヨリ始メテ其効ヲ有スル者トス此刑期間ニアリ

テ「ロデルシ」ハ刑典第四十四條ニ明記スル所ノ規則ニ違背スル者

數次遂ニ其刑ヲ受ケ二十月十六日ノ禁錮ニ處セラレ、ニ至ル蓋

シ禁錮ノ二十月ハ監視ノ刑期ヲ後ニ退クル者ナリ故ニ「ロデルシ」

紀元一千八百四十年三月某日巴里斯府ニ於テ逮捕サレシハ乃チ

未タ監視ノ刑ヲ免レサル者ナリ然ルニ「オルレア」控訴裁判所ニ於テハ「ロデルシ」ノ犯罪ニ就テ刑典第四十五條ヲ適用スルニ對シ排議シタルヲ以之ヲ破毀ス云々紀元一千八百四十一年五月十九日判決

刑典第二百七十條及ヒ第二百七十一條ニ記載シタル監視ノ規則ニ背クノ輕罪及ヒ流浪ノ輕罪ハ同時ニ之ヲ併訴スルヲ得ルカ且被告者政府ヨリ差定メラレタル土地ヲ以其定住所ト供述スト雖仍ホ流浪ノ罪ニ依リ刑ノ言渡シヲ受クヘキカ但シ此住居ハ該所ヲ立去ルニ從ヒ乃チ之ヲ失フ者トスルカ
覆審院ハ皆然リト判決ス其理由左ノ如シ
刑典第四十五條ニ擬シ罰スル所ノ輕罪ハ監視ノ刑ヲ受ケタル犯者刑期間法律上明記スル所ノ規則ニ違背スル者ナリ故ニ監視ノ

刑ヲ受ケタル犯者政府ノ取締ニ抗シ遁レ避ケムトスルノ意ヲ以既ニ差定メラレタル住所ヲ立去リタル時ハ其他ノ模様アルヲ要セス直ニ第四十五條ノ刑ニ處スヘシ
刑典第二百七十一條ニ擬シ罰スル所ノ輕罪ハ全ク其原素ヲ異ニス蓋シ此輕罪ハ被告者一定ノ住所ヲ有セス又生活ノ方法ヲ有セズ及ヒ恒ニ何等ノ職業ヲ爲サ、ル者ナリ
犯者政府ヨリ差定メラル所ノ住居ヲ去リ而シテ此住居ヲ以其定住所ト陳スルヲ得ムヤ且差定メラレタル住居ハ該所ヲ立去ルニ從ヒ乃チ之ヲ失フ者トス是故ニ該犯ノ一身ニシテ一時ニ監視ノ規則ニ背クノ輕罪及ヒ流浪ノ輕罪ヲ犯セリ此二個ノ輕罪ノ原素ハ各相異ナレリ而シテ齊シク其證據アレハ同一ニ之ヲ罰ス素ヨリ相觸ル、ノ妨ナシ

今上告ヲ受ケタル該裁判ヲ觀ルニ被告者差定メラレタル「カラン」
 「タン」ノ土地ヲ立去リタルニ因リ監視ノ規則ニ背クノ輕罪トシテ
 其刑ヲ言渡シ且此土地ニ住居ヲ有セサル流浪ノ罪ト共立去リタ
 ル違則ノ罪ト同一ノ事件ニ付キ二個ノ刑ヲ言渡ス可カラサル者
 トシ流浪ノ刑ニ處スルニ對シ排議シタルハ刑典第二百七十條ヲ
 犯ス者ナリ仍テ之ヲ破毀ス云々紀元一千八百五十五年九月七日
 判決

流浪ノ輕罪及ヒ監視ノ規則ニ背クノ輕罪ヲ犯シタル者ニ對シ流
 浪ノ輕罪ニ適用スヘキ監視ノ屬刑ト監視ノ規則ニ背クノ輕罪ニ
 適用スヘキ刑ト並ヒ用ヒテ之ヲ言渡スヲ得ルカ
 覆審院ハ刑典第四十五條及ヒ第二百七十一條ニ依リ然リト判決
 ス其辨明左ノ如シ

刑典第二百七十一條ニ曰ク凡ソ流浪ノ罪ヲ犯シタル者ハ其刑滿
 期ノ後五年ヨリ少カラス十年ヨリ多カラサル時間監視ノ刑ヲ受
 ク可シ
 治罪法第三百六十五條ニ曰ク凡ソ數個ノ重罪或ハ輕罪ヲ犯シタ
 ル場合ニ於テハ其最モ重キ一個ノ刑ノミヲ言渡ス可シ云々但シ
 主刑ニ非スシテ一ニ重罪或ハ輕罪ニ對シ屬刑ノ名ヲ以監視ヲ
 言渡ス等ノ如キハ此規則ノ限ニアラス
 凡ソ監視ノ刑ハ別段ナル性質ヲ有シタル犯罪ニ擬スヘキ者トス
 且社會恒ニ危懼ノ情ヲ懷クヲ以預シメ取締ノ方法ヲ設ケ治ク一
 般ヲ保護ス然ルニ犯者此別段ナル罪科ヲ犯スノ外更ニ又重キ罪
 科ヲ犯シ而シテ其罪科ノ故ヲ以監視ノ刑ヲ免レシムルハ全ク法
 律ノ主意及ヒ條款ニ背馳スル者ナリ

「ナムシ」ノ控訴裁判所ニ於テ刑典第四十五條ノ刑ノミヲ言渡スヘシトシ意見ヲ主トシ流浪ノ輕罪及ヒ監視ノ規則ニ背ク輕罪アリト確認シタル「マルギョリットポアラン」ニ對シ監視ノ刑ヲ言渡スニ排議シタルハ是治罪法第三百六十五條ヲ誤用シ且全ク刑典第二百七十一條ヲ犯ス者ナリ因テ之ヲ破毀ス云々紀元一千八百五十三年五月十三日判決

第四十六條

紀元一千八百三十二年ノ法律ヲ以廢シタル所ノ舊第四十六條ノ文ヲ錄ス左ノ如シ

舊第四十八條 監視ノ刑ヲ受ケシ犯者ハ保証人ヲ立自由權ヲ得タル時保証書ニ差定メタル時間ニ於テ犯者一箇或ハ數箇ノ重罪又ハ輕罪ヲ犯シ確定ノ裁判ニ依リ該刑ノ言渡シヲ受ケタル時ハ

保証人ノ証書中ニ記載シタル金額ヲ納ム可シ若シ之ヲ納メサレバ直ニ拘留スルヲ得ヘシ且其金額ハ重罪或ハ輕罪ニ依リ損害ヲ受ケシ者ニ之ヲ給與ス可シ蓋シ損害ノ賠償物品ノ還附及ヒ其入費ハ第一ニ之ヲ拂フ可シ

第四十七條 有期ノ懲役城寨内ノ拘留及ヒ監役ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ法律ノ固有力ニ依リ其刑期ノ終リシ後畢生間監視ノ刑ヲ受ク可シ

城寨内ノ拘留 此新刑ハ紀元一千八百三十二年ノ法律ヲ以増補シ遂ニ本條ニ追録セリ
法律ノ固有力ニ依リ 之ヲ詳説スレハ縱令裁判言渡書ニ於テ此屬刑ヲ遺漏シタル時ト雖法律ノ固有力ニ依リ監視ノ屬刑ヲ受クヘキノ意ナリ

畢生間監視ノ刑ヲ受ク可シ 此刑ノ言渡シヲ受ケタル犯者ハ社會ニ對シ一分ノ信用ヲモ有セサルヲ以之ヲシテ畢生間警察ノ眼光ヲ離ル、ヲ得サラシム

第四十七條ニ付テ裁判事例ヲ錄ス左ノ如シ

無期ノ監視ハ期滿免除ヲ以免カル、ヲ得ルカ

監視ノ刑ヲ受ケシ犯者主刑ノ終リシ後或ル場所ニ居住セシムト

申請シ允許ヲ得スシテ行政官其職務ヲ以居住スヘキ地ヲ差定メ

リ然ルニ犯者其地ヲ立去ルヲ得ルカ

覆審院ハ皆否ト判決セリ

凡ソ監視ノ刑ハ其性質繼續スル者ナリ故ニ期滿免除スルヲ得ス

何トナレハ此刑ノ執行ハ法律上行政官ニ與ヘタル權内ノ處分ト

相關涉セサル者ナリ

又上告ヲ受ケシ裁判言渡シヲ觀ルニ犯者行政官ノ命令ニ從ハス且行政官ハ犯者ニ對シ都府内ノ居住ヲ禁シタリ犯者其居住セムトスルノ地ヲ差定メテ之ヲ申請セス且行政官其職務ヲ以差定メタル住所ニ趣クヲ承諾セサリキ蓋シ此差定メタル住所ハ犯者ニアリテハ固ヨリ循行スヘキ者ニシテ刑典第四十四條ニ因テ生スル犯者ノ自由權ヲ奪ヒタル者ニ非ス且行政官ノ命令ニ背クヲ以刑典第四十五條ニ擬シ該刑ヲ言渡スハ至當ナリトス

右ノ理由ニ付キ此上告ヲ受ケタル裁判ハ至當ノ適用ヲナス者ナリ仍テ上告ヲ却下ス云々紀元一千八百三十四年一月三十一日判決

軍事裁判所ニ於テ監役ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル軍人主刑ノ終リ

シ後法律ノ固有力ニ因リ監視ノ刑ヲ受クヘキカ

覆審院ハ刑典第四十四條第四十五條第四十七條及ヒ第五條並ニ
紀元一千八百二十九年七月十五日ノ法律第一條ニ因リ然リト判
決セリ

凡ソ刑典第四十七條ハ一般ノ規則ニシテ彼此ノ區別ヲナサズ且
軍律ノ不備ニ於テ普通刑法ノ部分ヲ借り之ヲ適用スル時ハ其刑
典内定ムル所ノ規則ニ從ヒ且該刑ニ附属スル總テノ効用モ亦同
ク借り用ヒサル可カラズ但シ特別ノ規則ヲ以定メタル場合ハ此
限ニ非ス
常律ト軍律トノ混同ヲ防ツ爲メ刑典第五條ノ規則ヲ設ク然レト
モ軍律ニ於テ別段ナル場合アリテ常律ヲ以之ヲ補フ時ハ第五條
ノ規則ヲ離ルヘシ
右ノ理由ニ因リ上告ヲ受ケタル裁判ハ刑典第五條ヲ誤用シ且第

四十四條第四十五條及ヒ第四十七條ヲ犯セリ仍テ之ヲ破毀ス云
々紀元一千八百四十二年八月十二日判決

第四十八條 追放ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ法律ノ固有力ニ依リ

其刑期ノ終リシ後該刑期ニ均キ時間監視ノ刑ヲ受ク可シ

追放ノ刑 此刑ハ犯者ヲ帝國外ニ追放スル者ナリ 三二 但シ此刑期

ハ五年ヨリ少カラス十年ヨリ多カラサル者トス

該刑期ニ均キ時間 追放ノ刑ハ國事犯ニ適用ス前條ニ論スル犯罪

ニ比スレハ兇惡ノ狀情最モ輕シ

第四十九條 國ノ内部或ハ外部ノ安寧ヲ害スル重罪又ハ輕罪ニ付キ

刑ノ言渡シヲ受ケシ犯者ハ前條ト同ク監視ノ刑ヲ受ク可シ

國ノ内部或ハ外部ノ安寧 第三編第一卷第一章及ヒ第二章ヲ參照

大可シ

前條ト同ク 此條ニ於テハ監視ノ期限ヲ差示サスシテ同ク監視ノ刑ヲ受ク可シト云フ蓋シ法律ニ於テ前條ニ讓ル者ト看做スヘキナリ故ニ國ノ安寧ヲ害スル重罪或ハ輕罪ニ對シ言渡ス所ノ主刑ノ刑期ニ照シ同ク其監視ノ刑期ヲ定ムルハ素ヨリ至當トス

監視ノ刑ヲ受ク可シ 此條ハ第四十七條ノ如ク法律ノ固有力ニ依リ云々ヲ記載セズ故ニ此條ノ監視ハ裁判言渡書ヲ以之ヲ言渡ス可シ而シテ此條ハ「アンペラチフ」必ス爲サハル可カラサルノ意ナルヲ以若シ之ヲ言渡サ、レハ其裁判ハ覆審院之ヲ破毀スルヲ得

第五十條 前數條ニ定メタル場合ノ外犯者ニ對シ法律上別段ナル規則ヲ以監視ノ刑ヲ言渡スヲ允許シタル場合ニ非ム可カラス

法律上別段ナル規則ヲ以監視ノ刑ヲ言渡スヲ允許シタル場合ニ非サレハ 獸類ヲ毒殺シタル犯罪ニ因リ刑ノ言渡シヲ受ケタル場合等ナリ 四五二 若シ法律上差定メタル場合ノ外監視ノ刑ヲ言渡シタル時ハ縱令全部ノ裁判ハ破毀ヲ受ケストモ此部分ノミハ覆審院之ヲ破毀スルヲ得ヘシ

第五十一條 犯者ヨリ被害人ニ物品ヲ還付スル時被害人損失ノ償ヲ請求スルニ於テハ損失償ヒヲ言渡ス可シ若シ其金額別段法律上ニ於テ差定メサル場合ハ裁判役之ヲ差定ム可シ但シ被害人ノ承諾アルモ其償金ヲ他事ニ移シ用フヘキヲ言渡ス可カラス

物品ヲ還付スル時 還付トハ贖物ノ代價ヲ以之ヲ賠償シ或ハ現品ヲ返還スルノ謂ナリ

損失ノ償 事主物品ヲ奪レシ時ハ多少ヲ論セス必ス其損失ヲ受ク

故ニ法律上其償ヲ言渡スノ權ヲ與ヘリ舊條ニ於テ其金額ハ還付物品ノ金額四分ノ一ヨリ下ル可カラストセリ蓋シ立法官ノ論意當時ニアリテ其償ノ金額ハ四分ノ一ヨリ少カラサル可カラスト思料シタル故ナリ此改正條ハ稍異ナレリ損失ノ償ヲ言渡スハ裁判役ノ存意ニ任シ且被害者ノ請求ヲ要セリ而シテ其金額ハ裁判役還付物品ノ價額四分ノ一ヨリ或ハ之ヲ少フスルヲ得又之ヲ多フスルヲ得此改正法ハ最能ク普通法ノ原則ト相符合ス

損失ノ償ハ假令還付ノ言渡シヲ爲サハル時ト雖之ヲ要求スルヲ得ヘシ 民一三八二 往時參議院ノ法律議案ニ曰ク法律上物品還付ノ規則ニ就テ損失償ヒノ規則ヲ加ヘタルハ他ナシ裁判役ニ於テ刑事ノ償ハ物品還付ニ止リテ他ノ損失ノ償ハ言渡シヲ爲ス可カラサル者ト慢ニ誤認セムヲ恐ル故ニ預シメ之ヲ防キ之ヲシテ注意スル所アリ

ラシム

被害人ノ承諾アルモ其償金ヲ他事ニ移シ用フヘキヲ言渡ス可カラズ 立法官ノ論意ハ若シ裁判役ヲシテ其償金ヲ他事ニ轉用スヘキ言渡シヲ爲スヲ得セシメハ喻ヘハ其邑ニ於テ窮民教育ノ爲メ之ヲ轉用スル如キ他ノ方法ヲ假リテ其言渡シヲ容易ニシ且其償金額或ハ損失ノ金額ニ越ユルニ至ラム抑又償金ヲ受クヘキ者ハ獨リ被害人ニシテ他人之ニ關涉ス可カラス故ニ此償金ハ直ニ被害人ニ與ヘサルヲ得ス然レトモ後日ニ至リ被害人隨意他事ニ轉用スルハ固ヨリ自由ナリトス

紀元一千八百三十二年ノ法律ヲ以改正シタル所ノ舊第五十一條ヲ錄ス左ノ如シ

舊第五十一條 犯者ハ被害人其他ノ者ニ對シ損失償ヒノ言渡シ

ヲ受ク可シ若シ其金額法律上ニ於テ別段差定メサル場合ハ裁判
役ノ裁判ニ任ス可シ但シ損失償ヒノ金額ハ還付物品ノ金額四分
ノ一ヨリ下ル可カラス又被害人ノ承諾アリト雖其償金ヲ他事ニ
移シ用フヘキヲ言渡ス可カラス

第五十一條ニ就テ裁判事例ヲ録ス左ノ如シ

私訴原告人ハ寺院損失ノ償ト裁判言渡書ノ印刷及ヒ其揭示ノ費
用トヲ請求シ他ノ損失ノ償ヲ請求セサル時ト雖裁判役ハ損失償
ヒノ規則ニ依リ之ヲ言渡スヲ得ルカ

覆審院ハ然リト判決セリ其理由左ノ如シ

今上告ヲ受ケシ裁判言渡書ヲ觀ルニ私訴原告人ヲ保護シ損失償
ヒノ規則ニ依リ之ヲ言渡シタル頗末ハ明瞭タリ

私訴原告人ハ其金額二分ノ一ヲ寺院ノ償ニ充テ又其二分ノ一ヲ

言渡書ノ印刷及ヒ其揭示ノ費用ニ充テ請取ルヘキヲ請求シテ他
ノ損失ノ償ヲ請求セザリシ頗末モ亦明瞭タリ

私訴原告人ハ其請求スヘキ要償ノ金額ハ正シク之ヲ請求シタル
者ナリ治罪法第六十一條ニ依テ之ヲ論スルニ裁判役ニ於テ違
警罪ト確認シ法律ニ依リ該刑ヲ言渡シタル後私訴原告人其損失
ノ償ヲ請求シタル時ハ又之ヲ裁判セサル可カラス云々故ニ裁判
役ハ其裁判ヲ爲ス者ナリ

私訴原告人ハ其請求ス可キ事情ナシトシ他ノ要償ハ更ニ之ヲ請
求セサル者ナリ刑典第五十一條ニ曰ク私訴原告人ノ請求或ハ承
諾アリト雖他事ニ移シ用フヘキヲ言渡ス可カラスト云々故ニ裁
判役ハ此言渡シヲ爲サ、リシ者ナリ

此ニ由テ之ヲ觀レハ該裁判ハ治罪法第六十一條及ヒ刑典第五

十一條ニ循ヒ正シク判決スル者ナリ仍テ上告ヲ却下ス云々紀元
一千八百三十年二月二十五日判決

第五十二條 犯者罰金ヲ出シ又ハ物品ヲ還付シ又ハ損害ヲ賠償シ又
ハ裁判費用ヲ償フヘキノ言渡シヲ受ケシ時其言渡シニ循ハサルニ
於テハ該犯者ヲ拘留スルノ方法ニ依テ執行ヲ催督スルヲ得ヘシ
拘留スルノ方法 此拘留ハ法律上差定メタル一ニノ場合ニ於テ債
主負債主ヲ入監セシメテ裁判執行ヲ催督スルノ方法ナリ訴訟法第
七百八十條此規則ヲ明記ス刑法ニ於テ言渡ス所ノ禁錮ト同視ス可
カラズ蓋シ禁錮ハ一箇ノ刑名ニシテ拘留ハ其裁判及ヒ貴務ヲ執行
セシムルノ方法ナリ
本條ニ記載シタル所ノ拘留ハ罰金物品ノ還付及ヒ損失ノ賠償ニ付
テ之ヲ催督スルノ方法ナリ第一ノ場合 罰金ニ於テハ檢察官ノ請求ニ

依リ之ヲ催督シ第二ノ場合 物品ノ還付ニ於テハ私訴原告人ノ請求
ニ依リ之ヲ催督ス但シ此二個ノ場合ハ訴訟法ニ記載シタル法式ニ
循ハサル可カラズ就中債主ハ負債主ニ其催督書ヲ送達セサル可カ
ラス又日出前日没後ニ負債主ヲ拘留スルヲ得ス 訴七八一 且法律上
ノ法式ニ從ヒ獄中ノ名簿ニ負債主ノ姓名ヲ登記ス可ク 訴七八九又
負債主ハ訴訟法第八百條及ヒ紀元一千八百三十二年四月十七日ノ
法律第三十五條及ヒ第三十九條並ニ紀元一千八百四十八年十二月
十三日ノ法律第八條及ヒ第九條ニ明記スル規則ニ從ヒ放解ヲ受ク
ヘシ然レトモ公訴原告人ト私訴原告人トニ在テハ訴訟法第七百八
十九條ノ規則ニ循ヒ食料ヲ準備スルニ當リニノ差別アリ私訴原告
人ハ少クトモ一月ノ食料ヲ官署ニ準備スルノ責アリ公訴原告人ハ
此責ナシ蓋シ此公訴ニ依テ拘留シタル被告人ハ他ノ刑事ノ入監者

ト同ク官署ノ食料ヲ受クレハナリ紀元一千八百八十八年三月四日ノ布告書ヲ參照ス可シ
本條ノ規則ニ付テ其最モ注意セサル可カラサル者アリ之ヲ細論スル左ノ如シ

其一 訴訟法第七百八十九條ニ於テ債主ハ負債主ニ催督書ヲ送達シタル後一日ヲ經テ之ヲ拘留スルヲ得ヘシト雖本條ノ規則ハ然ラズ紀元一千七百九十一年二月二十一日ノ法律第一章第二十六條ニ於テ其時間ハ三日ナリト確定シタリキ又田野ニ管シタル犯者ニ付テハ紀元一千七百九十一年九月二十八日ノ法律第一章第五條ニ依テ其時間ハ二十四時間ナリト確定シタリキ
其二 債主負債主ニ催督書ヲ送達スルノ前裁判ノ確定スルヲ以至要トス何トナレハ刑事ハ其裁判ヲ假ニ執行スルヲ得サレハナリ治

三七三、三七五

其三 犯者ニ對シ之ヲ催督スルニ他ノ方法ヲ用フル者アリ即チ拘留ノ方法ト共ニシ或ハ其方法ト別ニシ財產取押ノ方法ヲ用フル者是ナリ

其四 檢察官ノ請求ニ因リ拘留シタル所ノ犯者ハ若干時間ヲ經ルノ後其貧窮ノ實証ヲ確認スルアレハ之ヲ放釋スルヲ得第五十三條第四百六十七條第四百六十九條紀元一千八百三十二年四月十七日ノ法律第三十五條及ヒ紀元一千八百四十八年十二月十三日ノ法律第八條ヲ參照スヘシ然レトモ該犯若シ民事原告人ノ請求ニ依テ拘留ヲ受ケタル時ハ此規則ヲ適用ス可カラス

第五十二條ニ就テ裁判事例ヲ錄ス左ノ如シ
初告裁判所ニ於テ拘留ヲ言渡サスト雖控訴裁判所ニ於テハ法律

ノ固有力ニ依リ拘留スヘキ場合ニ之ヲ言渡スヲ得ルカ
 覆審院ハ然リト判決セリ
 上告ヲ受ケシ裁判言渡書ヲ觀ルニ檢察官ノ控訴ナシト雖該犯ニ
 對シ既ニ言渡サレシ罰金ニ付キ催督ヲ言渡シ而シテ犯者之ヲ出
 サハル時ハ更ニ之ヲ拘留スヘキヲ言渡スハ固ヨリ至當ナリ
 「ソシヤンルロトル」ノ初審裁判所ニ於テ其言渡書中拘留スヘキヲ記
 載セスト雖裁判上罰金ヲ言渡シタル後其責務ヲ怠レハ拘留ハ腫
 ヲ接テ至ル者ナリ何トナレハ紀元一千七百九十一年七月二十二
 日ノ法律第四十一條及ヒ刑典第五十二條ニ記載シタル拘留ハ裁
 判執行ヲ催督スル爲メ法律ノ固有力自ラ存スレハナリ仍テ上告
 ヲ却下ス云々紀元一千八百二十七年七月十四日判決
 拘留ノ言渡シハ贓金還付ノ言渡シヲ實踐セシムル爲メ民事裁判所

又

ニ於テ之ヲ爲スヲ得ルカ又其言渡シヲ受ケシ者七十年ノ老人ナ
 リシト雖亦同一ノ處斷ヲ爲シ得ルカ

覆審院ハ皆然リト判決セリ

民法第二千七十條ニ於テ民事ノ負債主ニ付テハ齡ヒ既ニ七十年
 ナル者ハ其拘留ヲ免スト雖輕罪ノ被告者ハ此限ニアラス

訴訟法第八百條ハ民法第二千七十條ト決シテ相觸ル、者ニ非ス
 負債主齡ヒ既ニ七十年ニ至ルカ或ハ既ニ七十一年以上ナル時ニ非
 サレハ其規則ヲ適用ス可カラス

被告者某ニ對シ言渡シタル拘留ハ輕罪ノ事件ニ付キ其處分ヲ爲
 シタル顛末ハ明白ナリ何トナレハ拘留前此事件ニ付テ其訴訟ヲ
 受ケ處刑ノ言渡シアリ其確証モ亦明白ナレハナリ仍テ上告ヲ却
 下ス云々紀元一千八百十七年七月十六日判決

不直税或ハ「オクトラワ」入府税ニ關スル所犯ニ付キ輕罪裁判所ニ於テ言渡シタル罰金及ヒ追徴金ハ刑典第九條ノ刑例ニ準シ刑ノ性質ヲ有スル者トスルカ若シ刑ノ性質ヲ有シタル者トセハ裁判言渡書ニ別段拘留スヘキヲ記載セスト雖犯者其裁判ヲ執行セカ
ルニ於テハ之ヲ拘留スルヲ得ルカ
覆審院ハ刑典第九條第五十二條及ヒ民法第二千六十七條第二千七十條ニ依リ然リト判決セリ其理由左ノ如シ
共和七年「ワント」月五日ノ法律第九十條ニ依テ之ヲ觀ルニ不直税ノ所犯ハ懲治罪取締リノ方法ニ循ヒ之ヲ公訴スルヲ得ヘシ
刑典第九條ニ依リ之ヲ觀ルニ輕罪裁判所ニ於テ言渡シヲ得ヘキ罰金ハ一箇ノ刑ナリ而シテ同典第五十二條ニ依テ之ヲ觀ルニ罰金言渡シノ執行ハ拘留ノ方法ヲ以テ之ヲ催督スルヲ得ヘシ

此規則ハ刑事上一般ニ通用スヘキ者トス凡ソ犯者ニ對シ罰金ヲ輕罪裁判所ニ於テ言渡シタル場合ハ彼此ヲ論セス皆此規則ヲ適用セサル可カラス何トナレハ罰金ハ刑ノ性質ヲ有ス就裡不直税ノ所犯ニ於テハ殊ニ其性質ヲ有スル者ナリ
不直税ノ所犯ニ就テ言渡シタル所ノ裁判言渡書ニ其拘留スヘキヲ記載スルヲ要セス何トナレハ原告者ハ法律ニ依リ拘留スヘキ方法ヲ以テ之ヲ催督スルノ權利ヲ有スレハナリ
烟草及ヒ其他ノ物品ニ管シタル被告者ニ對シ其裁判言渡シ前ニ於テ假ニ之ヲ拘留スルト此規則ヲ同視ス可カラス蓋シ不直税ノ所犯ハ必ス罰金ヲ課ス而シテ其罰金ハ亦必ス裁判言渡書ヲ以テ此場合ニ於テ之ヲ拘留スルハ刑典第五十二條ニ依リ其執行ヲ催督スルノ方法ナリ

凡ソ民法第二千六十七條ハ單一ノ民事ニノミ之ヲ適用スヘキ者ナリ同法第二千七十條ニ明記シタルカ如ク之ヲ輕罪ノ犯者ニ適用ス可カラス仍テ其裁判ヲ破毀ス云々紀元一千八百三十二年二月十四日判決

紀元一千八百四十二年覆審院ノ裁判ニ於テ輸出入税ノ所犯ニ對シ科スル所ノ罰金ハ民事上要償ノ性質ヲ有シテ刑ノ性質ヲ有セズト看做シ前裁判ニ反對シタル裁判ヲ爲ス者アリ其裁決書ヲ節録ス左ノ如シ

税關ニ關スル法律ヲ犯シタル犯者ニ對シ言渡ス所ノ罰金ハ單一刑ノ性質ヲ有セス詐偽ヲ以官府ニ損失ヲ醸シタル其要償ノ性質ヲ含ム者ト認視ス此要償ハ別段ナル税關ノ法律ニ於テ其性質ヲ生シ就中共和二年「セルミナル」月四日ノ法律及ヒ紀元一千八百十

六年四月二十八日ノ法律ニ依リ最モ能ク其性質ヲ生スル者ナリ云々紀元一千八百四十二年三月十八日判決

輕罪又ハ重罪ニ對シ言渡シタル損失ノ償ニ付キ刑事裁判所ハ其職務ヲ以犯者ヲ拘留スヘキ言渡シヲ爲シ得ルカ

覆審院ハ然リト判決セリ

刑典第五十二條ニ依テ之ヲ觀ルニ罰金物品ノ還付損失ノ賠償及ヒ裁判ノ費用ニ就キ言渡シタル裁判ノ執行ハ犯者ヲ拘留スヘキ方法ヲ以之ヲ催督スルヲ得ヘシ

此規則ニ循ヘハ凡ソ重罪或ハ輕罪ニ付キ損失償ヒノ言渡シニハ法律ノ固有力ヲ以此拘留ノ方法ヲ附與シタル者トス故ニ刑事裁判所ニ於テハ職務上ノ權利ヲ以其裁判ヲ執行セシメムル爲メ必ス拘留ヲ言渡サヘルヲ得ス仍テ其上告ヲ却下ス云々紀元一千八

百五十三年七月十四日判決

識別ナキノ確証アルヲ以無罪ノ言渡シヲ受ケシ幼年者ニ對シ民事上損失ノ償及ヒ裁判費用ニ付テ言渡シヲ受ケ而シテ其裁判ヲ執行セシメムル爲メ之ヲ拘留スルヲ得ルカ
 覆審院ハ民法第二千六十條ニ依テ否ト判決ス
 凡ソ民事上ニアリテ被告人ヲ拘留スヘキ數箇ノ場合アリテ民法中數條ノ下ニ之ヲ明記ス此場合ノ外ハ裁判役ニ於テ拘留ノ言渡シヲ爲スヲ禁止セリ同法第二千六十條ニ於テ又其拘留シ得ヘキ數條ノ下ニ明記シタル場合ト雖幼年者ニ對シ拘留ノ言渡シヲ爲スヲ禁止ス且此規則ハ輕罪ニ付テノ規則ト相抵觸スル所ナシ即チ同法第二千七十條ニ於テ其旨趣ヲ明記セリ
 刑典第五十二條ニ依リ之ヲ觀ルニ罰金物品ノ還付損失ノ賠償及

ヒ裁判費用ニ就テ其言渡シヲ爲シタル時ハ犯者ヲ拘留スヘキ方法ヲ以裁判ノ執行ヲ催督スルヲ得然レトモ第五十二條ハ重罪或ハ輕罪ニ對シ爲スヘキ刑ノ言渡シ及ヒ其他ノ言渡シ云々ト標題シタル刑典第一篇第三章ノ内ニ在テ他ノ名例ト同ク相排列ス此標題上ヨリ其要點ヲ論スレハ該條ニ記載シタル罰金物品ノ還付損失ノ賠償及ヒ裁判費用ニ管シタル規則ハ即チ重罪或ハ輕罪ノ裁判上ニ於テ其言渡シト直ニ附着ス故ニ罰金等ノ言渡シハ輕重罪ノ犯者ニ對シ言渡シタル刑ニ附屬シテ始テ効用ヲ生ス可キ者トス

右ノ理由ニ付キ幼年者法律上ノ放免ヲ受ケシ上ハ其拘留ノ方法ヲモ免除セサルノ理ナシ仍テ其裁判ヲ破毀ス云々紀元一千八百四十二年三月十八日判決

恩赦ヲ受ケシ處刑人ニ對シ恩赦ノ故ヲ以裁判費用ニ管シタル出
金ノ言渡シニ付テ其執行ヲ督責スルノ拘留モ之ヲ赦スヘキカ

〔ナンシ〕控訴裁判所ハ否ト判決セリ其理由左ノ如シ

此訴訟ノ淵源ヲ詳察スルニモワマイーヅハ紀元一千八百三十五年
九月十三日〔アンセル〕商業裁判所ノ裁判ニ於テ某月某日倒産ヲ爲
シタリト言渡サレシ顧末ハ明白ナリ

紀元一千八百三十七年八月三十一日詐偽倒産ノ犯罪ニ依テ監役
八年ノ刑ニ處セラレ共上畢生間ノ監役ヲ言渡サレ且一万二千七
百二十〔フラン〕八十八〔サンティム〕通用錢ノ裁判費用ニ付テ其賠償スヘ
キヲ言渡サレ若シ賠償セサル時ハ二年間拘留スヘキヲ言渡サレ
シ顧末モ亦明白ナリ而シテ紀元一千八百四十四年恩赦ニ依リ監
役刑期ノ剩殘ノミヲ赦免サレタリキ

以上ノ顧末ニ依テ之ヲ觀ルニ恩赦ハ社會保護ノ爲メ法律ニ依リ
言渡シタル監役ノ刑ニ推及シ之ヲ赦免スルノ理ナシ故ニ處刑人
〔モワマイーヅ〕ニ對シ裁判費用ノ賠償ヲ催督スル爲メ今日ニ至ル
迄之ヲ拘留シタルハ其處斷至當ナリトス

〔モワマイーヅ〕紀元一千八百四十三年四月某日恩赦ヲ擧ケ其理由
ニ依テ拘留ノ言渡シヲモ免レ得ヘシ云々ト申立ルト雖抑恩赦ハ
犯者審理ヲ受ケシ後言渡サレタル該刑ヲ赦免スル者ニシテ官府
ニ於テ該犯ノ爲メニ既ニ立替ヘ置シ此裁判費用ノ賠償ニ付テ爲
シタル言渡シハ赦免ヲ用フ可カラス

凡ソ法律上及ヒ裁判上ニアリテ爲シタル拘留ハ赦免ス可カラサ
ルヲ以其原則トス又刑典第五十二條及ヒ紀元一千八百十二年四
月十七日ノ法律第三十七條ニ依テ之ヲ觀ルニ拘留ハ刑ノ性質ヲ

有セス蓋シ負債者ヲシテ其責務ヲ盡サシメムカ爲メ債主ヲ保護シタル催督ノ一方法ナリ

右ノ理由ニ付キ「モワマイーヅ」ハ裁判費用ノ賠償ノ爲メ將サニ受ケムトスル所ノ拘留ニ對シ國王ノ赦免狀ヲ持出シ免除セラレムヲ申立ルハ甚タ道理ナシトス仍テ其控訴ヲ却下ス云々紀元一千八百四十五年十二月二十一日判決

雇主共雇人ノ爲シタル所業ニ付キ刑事裁判所ニ於テ民事上損失償ヒノ言渡シヲ受ケタル時ハ其執行ヲ催督スル爲メ之ヲ拘留スルヲ得ルカ

覆審院ハ否ト判決ス其辨明左ノ如シ

民法第二千六十三條ニ依テ之ヲ觀ルニ裁判役ハ法律上差定メタル場合ノ外ハ拘留ノ言渡シヲ爲ス可カラサル者トス

刑典第五十二條ハ重罪輕罪或ハ違警罪ノ犯者ニ對シテノミ之ヲ適用ス可ク民事上ノ責務アル者ニ對シ之ヲ適用ス可カラズ民事上ノ責務アル者ハ民法ニ依テ之ヲ支配ス「パリ」控訴裁判所ハ上告者ニ對シ刑典第五十二條ニ依リ拘留ノ言渡シヲ爲シタルハ其道理ナシトス

訴訟法第二百二十六條ニ依テ之ヲ觀ルニ凡ソ裁判役ハ其金額三百「フラン」以上ノ要償ニ付キ被告者ニ對シ拘留ノ言渡シヲ爲スヲ得ヘシト云々然レトモ裁判役ハ其事宜ト事情トニ因テ之ヲ拘留スルト否カセサルトハ其權内ナリトス然レトモ此場合ニ於テ拘留ヲ言渡シタルハ不適法トス何トナレハ此拘留ハ訴訟法第二百六條ニ據ラスシテ命令詞ヲ以記載シタル刑典第五十二條ニ依レハナリ

「アリ」控訴裁判所ハ政府ノ布達ニ基キ施政上ノ規則ヲ以其拘留ヲ
 言渡セリ是全ク民法第二千六十三條ニ觸ル、者トス仍テ其裁判
 ヲ破毀ス云々紀元一千八百四十三年六月十八日判決
 重罪輕罪或ハ違警罪ノ裁判ニ於テ數名ノ犯者ニ對シ連帶ニ出金
 ノ言渡シヲ爲シ其金額ハ三百フラン以上ニ至リ之ヲ各犯ニ分科
 スレハ其金額ハ三百フラン以下ナリト雖拘留ノ期限ハ差定メサ
 ル可カラサルカ
 覆審院ハ紀元一千八百三十二年四月十七日ノ法律第七條及ヒ第
 四十條ニ依リ然リト判決セリ
 今上告ヲ受ケタル裁判言渡書ヲ觀ルニ三名ノ上告者ハ連帶ニシ
 テ各百フランノ罰金及ヒ其他裁判費用ノ言渡シヲ受ケタリキ此
 言渡シハ各犯者ニ對シ三百フランニ超エタル金額ヲ連帶ニ負ハ

シメタル者トス故ニ紀元一千八百三十二年四月十七日ノ法律ニ
 循ヒ拘留ノ時間ヲ差定メサル可カラス
 該裁判ハ其期限ヲ定メス故ニ前文ニ記載シタル第七條及ヒ第四
 十條ヲ犯ス者ナリ仍テ其裁判ヲ破毀ス云々紀元一千八百四十三
 年二月三日判決

第五十三條 官府ノ爲メ犯者ニ對シ罰金及ヒ裁判費用ヲ出スヘキ言
 渡シヲ爲シタル時若シ犯者施体又ハ加辱ノ刑期終リシ後罰金及ヒ
 裁判費用ヲ出サ、ルヲ以滿一年以上ノ拘留ヲ受ケ然ルニ其金額ヲ
 出ス能ハサルハ事實全ク貧困ニ因ルノ確証ヲ公正ナル方法ニ於テ
 認視シタル上ハ假ニ之ヲ保釋スルヲ得ヘシ又輕罪ニ管シタル時ハ
 拘留ノ期限ヲ六月ニ減ス可シ
 總テノ場合ニ於テ犯者若シ金額ヲ出ス可キ身代ニ復スル時ハ再ヒ

之ヲ拘留スヘシ

滿一年以上ノ拘留 紀元一千八百三十二年四月十七日ノ法律第三十五條ニ於テ拘留ノ規則ヲ改正ス該條ニ曰ク治罪法第二百二十條ニ明記シタル方法ニ據リ犯者ノ貧困ヲ確認シタル時該犯ニ言渡シタル罰金及ヒ其他出金ノ金額二十フランヲ超エタル場合ハ十五日間三十フラン乃至五十フラン迄ハ一月間五十フラン乃至百フラン迄ハ二月間百フランヲ超エタル場合ハ四月間拘留シタル後皆之ヲ放免スヘシ

又前文法律ノ第五章第三十三條第三十四條第三十六條第三十七條第三十八條第三十九條第四十條第四十一條及ヒ紀元一千八百四十八年十二月十三日ノ法律第四章第八條ヲモ參照ス可シ此第八條ニ於ルハ拘留ノ最上點ヲ三月ニ減シ且犯者ハ私訴原告人ニ對シ官府

ニ對スルト同ク貧困ノ事情ヲ證明シ其拘留ニ付テ故障ヲ訴フルヲ得セシム

輕罪ニ管シタル時 紀元一千八百三十二年四月十七日ノ法律第三十五條及ヒ紀元一千八百四十八年十二月十三日ノ法律第八條ヲ以テ亦此規則ヲ改正ス蓋シ拘留ノ期限ヲ六月ニ減スルニ非スシテ其言渡シニ依リ出金スヘキ金額ノ多寡ニ準シ拘留ノ期限ヲ十五日一月二月或ハ三月ニ減ス

第五十四條 犯者ノ財産不足ヲ生シタル時罰金ヲ徵スルト物品ヲ還付シ又ハ損失ノ償ヲ爲スト相觸ル、場合ニ於テハ還付及ヒ損失賠償ノ言渡シハ先取リノ權ヲ有スル者トス

罰金ヲ徵スルト物品ヲ還付シ又ハ損失ノ償ヲ爲スト相觸ル、場合ニ於テハ 犯者財産ノ不足ヲ生シタルニ際シ物品ノ還付及ヒ損失

ノ賠償ハ罰金ノ言渡シヨリ先取リノ權ヲ有スルハ最モ道理ニ適セ
 リ何トナレハ罰金ハ官府ノ所有ニ歸スル者ニシテ他ノ損失ヲ補フ
 ノ謂ニ非ス此ニ反シ物品ノ還付又ハ損失ノ賠償其性質ヲ論スレハ
 私訴原告人現ニ損失シタル所ノ者ヲ復セムトシテ之ヲ要求スル故
 三道理上衡ノ錘子ヲ私訴原告人ニ傾ケ其財産ヲ保護セサル可カラ
 然レトモ本條罰金ノミニ對シ先取リノ權理ヲ附與シ而シテ裁判
 費用云々ヲ明記セス蓋シ裁判費用ハ罰金ト其性質ヲ異ニシ法律亦
 其特權ヲ與ヘ之ヲシテ私訴原告人ヨリ先取リスルヲ得セシム
 治一
 二八

第五十五條 同一ノ重罪又ハ輕罪ニ依リ刑ノ言渡シヲ受ケシ各犯者

ハ罰金還付損失ノ賠償及ヒ裁判費用ヲ連帶ニ擔當ス可シ 民事上義
 罰金還付損失ノ賠償及ヒ裁判費用ヲ連帶ニ擔當ス可シ

ル

務者ノ連帶ハ各義務者同一ノ物件ニ付キ其義務ノ全部ヲ行ハサル
 可カラサルノ責アリ若シ其數人中ニ一人義務ノ全部ヲ行フニ因リ
 其他ノ數人義務ノ放釋ヲ得シ時ハ其義務ヲ行フヘキ數人ハ相連帶
 シテ之ヲ行フ者ト云フ云々民法第千二百條ヲ照シ以明瞭スヘシ刑
 事上ニアリテ之ヲ論スルモ同一ノ重罪或ハ輕罪ヲ犯シタル共犯者
 ハ己ノ部分ノミニ屬スル物品ノ還付損失ノ賠償及ヒ裁判費用ヲ償
 フノ責アリト思量スルハ是性理ニ戾ル甚タシトス蓋シ數人ノ犯者
 同一ニ其罪ノ全部ヲ犯シタルヲ以數人ノ間ニ於テ之ヲ分割スルノ
 理ナシ是故ニ數人中ノ一人其罪或ハ憎ムヘキ者アリト雖各犯者ト
 同シ連帶ニ其言渡シヲ爲サ、ル可カラス然レトモ其共犯者ニ對シ
 連帶ニ言渡シタル罰金ノ全部或ハ過額ニ至ル迄其一人ニテ出金シ
 タル時ハ其一人他ノ數人ニ對シ之ヲ取戻スヲ得ヘシ 民一二一三、一

二一四

刑法上連帶ハ法律ノ固有力ヨリ生スル者ニシテ別段ニ之ヲ言渡ス
ヲ要セス唯共犯者ニ對シ共同一ナル重罪或ハ輕罪ノ刑ノ言渡シヲ
爲スヲ以足レリトス且民法第千二百二條ヲ觀ルニ曰ク連帶ハ唯思
料ヲ以之ヲ定ムヘカラス但シ此規則ハ法律ノ固有力ニ依リ連帶ヲ
生スル場合ニ於テハ之ヲ適用ス可カラズ

第五十五條ニ就テ裁判事例ヲ錄ス左ノ如シ

數人同一ノ重罪ヲ犯シ其刑ノ言渡シヲ受ケ而シテ其數人中ノ一
人他ノ犯罪ニ付キ又其審理ヲ受ケタリ此重罪ニ管セサル數人ハ
共犯ノ重罪ニ付キ裁判ノ費用ヲ連帶ニ擔當スルハ無論ナリ其一
人ノ犯シタル重罪ニ付キ裁判費用ヲモ連帶ニ其言渡シヲ受ク可
キカ

覆審院ハ刑典第五十五條ニ依リ否ト判決セリ

「ゼクミール」及ヒ「サバルチヌ」ハ「ヂペロン」ト同ク「ボオルカリヒエ」摸樣ア
ル盜罪

ノ罪科ヲ犯シタルニ依リ其刑ノ言渡シヲ受ケシ顛末ハ明白ナリ

「ヂペロン」ハ其審理中「ピクミール」サバルチヌニ關セス數次竊盜罪ヲ

犯シタル公訴アルヲ以其審理ヲ受ケシ顛末モ亦明白ナリ

此ノ如キ顛末ニ依テ之ヲ論スレハ此上告人「ピクミール」並ニ「サバル

チヌ」ノ兩人ハ刑典第五十五條ニ循ヒ「ヂペロン」ト共ニ犯シタル重

罪ニ關シ生スル所ノ費用ハ連帶ニ其責アリトス

今上告ヲ受ケシ裁判言渡書ヲ觀ルニ「ピクミール」サバルチヌ「ヂペ

ロン」ノ三人ニ對シ連帶ニ其裁判費用ヲ言渡シ就裡陪審ノ締問ニ

付シタル總テノ事件ト上告人ノ關係セサル事件トノ審判及ヒ裁

判ニ依リ生シタル費用迄ヲ追徴ス故ニ此裁判ハ刑典第五十二條

ヲ犯ス者トス仍テ其裁判ヲ破毀ス云々
 此原則ニ基キタル覆審院ノ裁判事例數個アリ之ヲ左ニ節録ス
 其一 裁判ノ調理ヲ要セム爲メ二個ノ新聞社ニ對シ同一ノ事件
 ヲ併セ訴フル時ト雖此一紙兩件ノ訴訟ハ時宜ヲ料リ爲ス者ニシ
 テ犯罪ノ區分スヘキアレハ此ニ拘ハラス其區分ヲ爲サハルヘカ
 ラス故ニ重罪裁判所ニ於テ二個ノ社長ニ對シ連帶ニ其費用ヲ言
 渡スハ刑典第五十五條ヲ犯ス者ナリ
 其二 二個ノ犯者一人ハ重罪ノ主犯トシ一人ハ其重罪ノ從犯ニ
 シテ且他ノ輕罪ノ主犯トシ訴ヲ受ケタリ而シテ其裁判費用ヲ連
 帶シテ二人ニ言渡スハ刑典第五十五條ヲ犯ス者ナリ
 二個ノ犯者同一ノ場所同一ノ時間ニ於テ同一ノ被害者ニ對シ犯
 シタル同一ノ輕罪ノ証アリト審理シタル時ハ連帶ニ裁判費用ヲ

言渡ス如ク其罰金ヲモ連帶ニ之ヲ科ス可キカ
 覆審院ハ刑第五十五條ニ依リ然リト判決セリ
 今上告ヲ受ケシ裁判言渡書ヲ觀ルニ二個ノ犯者其一人ハ四百フ
 ラノノ罰金ヲ科セラレ其他ノ一人ハ二百フラノノ罰金ヲ科セラ
 ル此二犯ハ猥褻ノ罪ヲ犯シテ其審理ヲ受ケシ者ナリ且此二犯ハ
 同一ノ場所同一ノ時間ニ於テ同一ノ被害者ニ對シ共ニ此輕罪ヲ
 犯シ而シテ其一人ハ殊ニ首謀者タル故ヲ以倍數ノ罰金ヲ科セリ
 此二犯ノ間ニ於テハ其意旨ニ付テモ又其所業ニ付テモ相連絡ス
 ルヲ以等差ノ論スヘキナシ故ニ連帶ニ罰金ヲ科スルヲ至當トス
 [サノミエウル]輕罪裁判所ニ於テハ裁判費用ハ連帶ニ之ヲ言渡ス
 可ク罰金ハ連帶ニ之ヲ科セサルヲ道理ニ適スルトシ之ヲ言渡サ
 ハルヲ以此裁判ハ全ク刑典第五十五條ヲ犯ス者トス仍テ其裁判

ヲ破毀ス云々紀元一千八百二十七年十一月三日判決
刑典第五十五條ニ定メタル連帶ハ違警罪ニ對シ科スル所ノ罰金
ニハ之ヲ言渡スヲ得サルカ

違警罪ノ犯者ニ對シ其裁判費用及ヒ罰金ヲ連帶ニ言渡スヲ得ル
カ

覆審院ハ皆然リト判決セリ其理由左ノ如シ

今上告ヲ受ケシ裁判言渡書ヲ觀ルニ上告者ノ請求シタルカ如ク
罰金ヲ連帶ニ科セサリキ是紀元一千七百九十一年七月十九日二
十一日ノ法律第二章第四十二條ニ於テ凡ソ輕罪違警罪ニ對シ罰
金ヲ科スルニ其共犯者ハ連帶ニ之ヲ言渡ス可キヲ明記ス然レト
モ又刑典第五十五條ニ依テ之ヲ觀ルニ同一ノ重罪又ハ同一ノ輕
罪ニ付キ其刑ノ言渡シヲ受ケシ共犯者ノニ連帶ニ其罰金ヲ科ス

ヘシト云々此規則ヲ參照スレハ第二ノ規則即チ刑典第五十五條
ハ裁判上同一ノ重輕罪ヲ除クノ外連帶ニ其罰金ヲ科スルヲ禁ス
ルノ意自カラ存ス故ニ上告ヲ受ケシ該裁判ニ於テ違警罪ノ主犯
ト其從犯トニ對シ連帶シテ其罰金ヲ科ス可カラスト異議シタル
ハ刑典第五十五條ノ成文及ヒ其趣意ニ循ヒタル者トシ本院ニ於
テハ上告者ノ理由ハ更ニ採用セサル所トス然レトモ重輕罪ニ付
キ司法ノ施政規則ニ關スル紀元一千八百十一年六月十八日ノ布
告第一百五十六條ヲ觀ルニ曰ク凡ソ裁判ノ費用ハ所業ノ同一ナリ
シ主犯及ヒ從犯者ニ對シ連帶ニ之ヲ言渡ス可シ云々今「アントワ
ステックリッツ」^ツ「シュルドブランク」ノ二人ハ暴聲罵詈ノ罪ヲ犯シ遂ニ違
警罪ニ問擬セラレ而シテ裁判上其費用ニ付キ連帶ニ之ヲ言渡サ
ル、ヲ以前文第一百五十六條ノ規則ヲ犯ス者トス仍テ其裁判ヲ破

毀ス云々紀元一千八百四十九年五月十二日判決
重罪ノ被告人其識別ナキヲ以無罪ノ言渡ヲ受クルト雖懲治場内
ニ拘留スヘキヲ言渡サレシ時其裁判費用ハ其犯人ノ丁年者ト共
ニ連帶ニ之ヲ言渡スヲ要スルカ

覆審院ハ然リト判決セリ

治罪法第三百六十八條ニ依テ之ヲ觀ルニ凡ソ負訴訟トナリシ總
テノ被告人ハ其裁判費用ヲ辨償スヘキ言渡シヲ受ケサル可カラ
ス而シテ其費用ニ付キ連帶ニ之ヲ言渡スハ刑事ニアリテハ一般
ノ原則ナリ今識別ナクシテ重罪ヲ犯シタル幼年者ニ對シ此原則
ヲ適用ス可カラストノ取除ケハ法律上別段ノ規則アルニ非レハ
不可ナリ法律上決シテ別段ノ規則ナシ然ルニ上告ヲ受ケタル該
裁判ハ連帶ニ之ヲ言渡セリ是正ノ法律ニ適シタル者ナリ仍テ其

上告ヲ却下ス云々紀元一千八百四十一年四月八日判決

十六年以下ノ幼年者重罪ヲ犯シ識別ナキ証アルヲ以該刑ノ言渡
書ヲ下サス裁判ノ費用ニ於テモ連帶ニ之ヲ言渡サ、リシ幼年者
ト俱ニ公訴ヲ受ケシ其共犯人ノ丁年者ニ對シテノミ裁判費用ヲ
言渡シタル時丁年者ハ其裁判ニ不服ヲ唱へ此費用ハ共犯ノ幼年
者ニ對シ連帶ニ之ヲ言渡サシメムカ爲メ該裁判ニ付キ上告スル
ヲ得ルカ

覆審院ハ否ト判決セリ

重罪被告人「テシャルタン」ハ其識別ナキノ証アルヲ以無罪ノ言渡
シヲ受ケテ該刑ノ言渡シヲ受ケス故ニ該犯ニ對シ刑典第五十五
條ヲ適用ス可カラス然レトモ重罪裁判所ニ於テハ共ニ重罪ヲ犯
シタルヲ以其幼年者ニ對シ私訴ノ賠償ノ名義ヲ主トシ裁判費用

ハ此上告者ト俱ニ連帶ニ之ヲ言渡スハ至當ナリ
今上告ヲ受ケシ裁判言渡書ヲ觀ルニ連帶ニ言渡スヘキ其言渡シ
ヲ遺漏シ檢察官之ヲ上告スレハ其順序ヲ得然ルニ之ヲ爲サスシ
テ「フウルシヨ」ハ「テシヤルタン」ヲ相手トシ之ヲ上告スルハ其當ヲ
得ス仍テ其上告ヲ却下ス云々紀元一千八百四十六年一月十六日
判決

犯罪或ハ準犯罪ニ由リ生シタル賠償ノ言渡シニシテ罰金ニアラ
サルモ刑典第五十五條ノ規則ヲ適用スヘクシテ民法第千二百二
條ニ明記シタル原則ヲ適用セサルヘキカ
覆審院ハ然リトシ民法第千二百二條ト刑典第五十五條トヲ誤認
シ上告シタルヲ以其理由ヲ辨明シ判決スル左ノ如シ
凡ソ民法第千二百二條ハ民事上尋常契約ノ規則ニ供スヘキ犯罪

又ハ準犯罪ニ由リ生シタル要償ノ訴訟ニハ之ヲ適用ス可カラズ
犯罪又ハ準犯罪ニ由リ生シタル賠償ハ刑典第五十五條ノ規則ヲ
適用ス可シ

刑典第五十五條ハ刑事上一般ノ適用トス凡ソ數人ノ共犯者ニシ
テ其損害ヲ爲サムトスル共同ノ意旨アリ共意旨ノ所業ニ付テ現
ハル、時ハ連帶ニ其損失ヲ償フ責務ヲ擔當セシムルハ法理ト天
理トニ基キテ其原則ヲ設クル者ナリ今上告ヲ受ケシ裁判言渡書
ヲ觀ルニ數名ノ共犯者「ツッレツ」ノ都府及ヒ大藏省ニ對シ損失ヲ釀
シタルヲ以其損失ノ賠償ヲ言渡サレシハ明白ナリ此共犯ノ間ニ
ハ彼此ヲ分タズ連帶ニ之ヲ言渡スハ當然ナリ而シテ重罪裁判所
ニ於テ連帶ニ之ヲ爲セシハ決シテ民法第千二百二條及ヒ刑典第
五十五條ヲ犯ス者ニ非ス仍テ上告ヲ却下ス云々紀元一千八百四

十四年七月七日判決

數名ノ共犯者罪ヲ犯シ而シテ協議スルト否トヲ問ハス罪ノ輕重ニ依リ同一ノ刑ノ言渡シヲ受ケサルモ共犯者ニ對シ連帶シテ言渡スヘキカ

覆審院ハ然リト判決セリ

「ロツシイ」ノ兄弟兩名共罪各差等アリ故ニ言渡シタルノ刑モ各自其差等アリ今其罪ト刑トノ差等アルヲ以該犯ヲシテ刑典上ニ明記シタル凡ソ共犯者ハ其罰金及ヒ裁判費用ヲ連帶ニ擔當ス可シトノ規則ヨリ免カレシメムトス豈其理アラムヤ

且刑典第五十五條ノ規則ハ共犯者ノ間ニ於テ共ニ預シメ計畫シ而シテ後其罪ヲ犯シタル狀情アルヲ要スルニ非ス共犯者其計畫ヲ喋セス卒爾ニ其罪ヲ共犯シタル場合ト雖乃チ此規則ヲ適用ス

ヘキナリ且此規則ハ假令罪狀ノ變更スルニ從ヒ刑ノ輕重アルモ同一ノ犯罪ヲ以處刑ノ言渡シヲ受ケシ者ハ乃チ之ヲ適用ス可シ云々紀元一千八百十三年十月八日判決

「ハリ」控訴裁判所ニ於テハ前裁判ニ反對シタル裁判ヲ爲セリ之ヲ節録ス左ノ如シ

刑典第五十五條ニ明記シタル罰金物品ノ還付損失ノ賠償及ヒ裁判費用ノ返辨ニ付キ連帶ノ規則ハ數名ノ者相共ニ同一ノ罪ヲ犯シタルニ依リ其刑ノ言渡シヲ受ケシ者ニ限り之ヲ適用ス可シ故ニ連帶ノ言渡シハ同夥中ニテ共謀シタル製造人販賣人ノ間ニハ之ヲ爲ス可ク他ノ者ト謀ラス偽板ノ書籍ヲ再板シ或ハ販賣シタル犯者ノ間ニハ之ヲ適用ス可カラス云々紀元一千八百四十三年二月十六日判決

同一ノ性質ニシテ各自各別ノ重罪或ハ輕罪ニ付キ一紙數名ヲ合シ公訴シタル場合ニ於テハ犯者ニ對シ其裁判費用及ヒ損失ノ賠償ヲ連帶ニ言渡ス可キカ

覆審院ハ否ト判決セリ

刑典第五十五條ニ依テ之ヲ觀ルニ同一ノ重罪或ハ同一ノ輕罪ニ付キ該刑ノ言渡シヲ受ケシ共犯者ニ非サレハ裁判費用及ヒ損失償ヒテ連帶シテ之ヲ言渡サス此規則ハ數人ニ對シ公訴シタル重罪或ハ輕罪ニシテ其姓名一紙ノ内ニ籠絡セシト雖遵守スヘキ者トス紀元一千八百五十年六月二十七日判決

第四章 重罪又ハ輕罪ノ累犯ノ刑

累犯トハ同キ罪科ヲ累次相犯スノ謂ニシテ佛蘭西之ヲ「レシチア」ト云フ羅甸語ノ「イテリンムガテレ」ニ胚胎ス蓋シ再ヒ陷ルノ義ナリ

ニ重罪輕罪又ハ違警罪ヲ犯シ刑典ニ依テ其刑ニ處セラレシ後又同性質ノ重罪輕罪又ハ違警罪ヲ犯ス時ハ即チ累犯ナリ累次ノ犯ハ初次ノ犯ヨリ其罪最モ重ク犯者惡事ニ浸染シ且嚮キノ處刑ニ對シ悔改ノ心ヲ表セス社會ヲシテ恒ニ危懼ノ狀アラシム故ニ累犯ノ刑ハ初犯ノ刑ヨリ之ヲ嚴ニス

重輕罪ノ累犯ト違警罪ノ累犯トニハ最モ著シキ差等アリ重輕罪ノ累犯ハ其初犯年月ノ如何ヲ論セス初犯ノ刑ヨリ最モ重キ刑ニ擬ス違警罪ノ累犯ハ之ニ異ナレリ初犯ノ裁決ヲ受ケタル後十二月間ニ同裁判所ノ管轄内ニ於テ違警罪ヲ累犯スルニ非サレハ累犯ノ刑ヲ擬セス第四百八十三條ヲ參照ス可シ

凡ソ累犯者ハ復權ノ寬典ヲ蒙ルヲ得ス 治六三四 余治罪法ニ於テ司法警察官吏ノ公罪累犯ノ場合ハ別ニ條款アルヲ論ス 治二八一

四七一

第五十六條 何人ヲ問ハス施体又ハ加辱ノ刑ヲ受ケシ者主刑トシテ
剝奪公權ニ該ルヘキ第二ノ重罪ヲ犯シタル時ハ追放ノ刑ヲ言渡ス
可シ

若シ追放ノ刑ニ該ルヘキ第二ノ重罪ヲ犯シタル時ハ監役ノ刑ヲ言
渡ス可シ

若シ城塞内拘留ニ該ルヘキ第二ノ重罪ヲ犯シタル時ハ同刑ノ長期
ヲ言渡ス可シ但シ此長期ハ二倍ニ至ル迄加フルヲ得ヘシ若シ有期
ノ懲役ニ該ルヘキ第二ノ重罪ヲ犯シタル時ハ同刑ノ長期ヲ言渡ス
可シ但シ此長期ハ二倍ニ至ル迄加フルヲ得ヘシ若シ流ニ該ルヘキ
第二ノ重罪ヲ犯シタル時ハ無期懲役ノ刑ヲ言渡ス可シ
何人ヲ問ハス無期懲役ノ刑ヲ受ケシ者同刑ニ該ルヘキ第二ノ重罪
ヲ犯シタル時ハ死刑ヲ言渡ス可シ

ヲ

五七一

但シ陸海軍裁判所ニ於テ刑ノ言渡シヲ受ケシ輕重罪ノ犯者第二ノ
輕重罪ヲ犯シ累犯ノ刑ヲ言渡ス場合ハ初犯ノ言渡シニ軍律ヲ用ヒ
テシテ常律ニ依リ罰スヘキ重罪及ヒ輕罪ニ對シ其刑ヲ言渡シタル
者ニ限ル可シ
紀元一千八百三十二年刑典改正ノ時ニ當リテ本條第一項中重罪ヲ
犯シノ一語ヲ刪リ之ニ代フルニ施体或ハ加辱云々ノ語ヲ以テセリ
此改正ニ依テ利益ヲ生スル者數件アリ諭ヘハ施体或ハ加辱ノ刑ニ
該ルヘキ罪ヲ犯シ其裁判ヲ受ケシ後更ニ又重罪ヲ犯シ而シテ初次
犯罪ハ幼年者タルヲ以其罪ヲ減等シ禁錮ノ刑ニ處セラレシ者ノ如
キハ此改正ニ依テ始メテ累犯ノ刑ノ言渡シヲ免ガル、ヲ得タリ
覆審院ハ重罪裁判所ニ於テ重罪ニ對シ其職務ヲ以言渡シタル輕罪
ノ裁判ト此罪丁年者ニアリテ犯セハ重罪タリ而シテ重罪裁判所ノ

管轄ニ屬スル者ト雖此重罪ノ被告者幼年ナルヲ以別段ノ規則ニ依リ輕罪裁判所ニ於テ言渡シタル輕罪ノ裁判トヲ區別セリ第一ノ場合ニ於テ之ヲ裁判ス左ノ如シ重罪裁判所ニ於テ被告ノ幼年者タルニ依リ懲治檻ノ拘留ハ言渡シノ目途タル所業ノ性質ヲ變セス是乃チ被告人ノ犯シタル重罪ノ爲メナリト云々第二ノ場合ニ於テ之ヲ裁判ス左ノ如シ刑典第一條ノ第一項ト治罪法第七十九條及ヒ第二百三十一條ニ由テ累犯ノ刑ヲ參照スルニ懲治ノ刑ヲ以罰スヘキ輕罪ノ裁判ハ輕罪裁判所ニ屬シ重罪ノ性質ヲ有スル犯罪ノ裁判ハ重罪裁判所ニ屬ス故ニ重罪裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ犯罪ナリト雖懲治ノ刑ヲ用テ罰スヘキニ依リ其裁判ヲ輕罪裁判所ニ與フヘシ輕罪裁判役ハ其職務ヲ以之ヲ言渡シタル時ハ乃チ輕罪ニシテ重罪ノ性質アリト認視スルヲ得スト云々

此ノ如キ區別ヲ爲シタルモ今日ニ至リテハ既ニ冗事ニ屬セリ何トナレハ第五十六條第一項中重罪ヲ犯シノ一語ヲ剛リ施体或ハ加辱云々ノ語ヲ記載スレハナリ故ニ施体或ハ加辱ノ刑ノ言渡シヲ受ケサレハ罪科ノ重罪ニ該ルト否トハ措テ推論セサルヘキナリ又情狀ヲ酌量シテ其罪ヲ輕減シ重罪被告者ニ對シ懲治ノ刑ヲ言渡シタル時モ亦同一理ナリ何トナレハ紀元一千八百三十二年ノ改正ハ重罪ニ付テ刑ノ言渡シアルヲ以足レリトセス施体或ハ加辱ノ刑ノ言渡シアルヲ要スレハナリ

本條ニ就テ一ノ注意スヘキ者アリ凡ソ累犯ノ場合ニ於テ其刑ヲ言渡スニハ第一ノ重罪ヲ犯シタルノミヲ以足レリトセス第二ノ重罪ヲ犯ス以前該刑ノ言渡シアルヲ以至要トス故ニ紀元一千八百六十三年二月八日某一ノ重罪ヲ犯シ同年十二月某日檢察官之ヲ公訴シ

ダリキ而シテ某又他ノ重罪ヲ犯シ紀元一千八百六十三年九月四日
該刑ノ言渡シヲ受ケタリキ此九月四日ノ裁判言渡シハ二月八日ノ
重罪犯ヨリ後チナルヲ以重罪裁判所ハ此犯罪ニ對シ累犯ノ刑ヲ言
渡スヲ得スト云々是紀元一千八百四十四年一月二十六日及ヒ同年
二月十一日ノ裁判ニ係ルヲ以之ヲ節録スト云フ

陸海軍裁判所ニ於テ此規則ハ毎ニ覆審院ニ上告シタル所ノ問題ヲ
決ス可シ蓋シ法律上累犯ノ刑ヲ適用スヘキ場合ハ常律ヲ以罰スヘ
キ所ノ重罪及ヒ輕罪ニ對シ第一ノ言渡シアリシヲ要スルナリ
常律ニ依リ罰スヘキ 縱令初犯ノ罪重キニセヨ重罪或ハ輕罪ニシ
テ單ニ軍事ニ關スル時ハ累犯ノ刑ヲ以之ニ適用スルヲ得ス立法官
ハ常律ノ眼ヲ以重罪或ハ輕罪ノ性質アリト看做サス故ニ常律ニ於
テ掲載セサル所ノ犯罪ヲ累犯ノ場合ニ於テ普通法ニ依リ其刑ヲ加

重スル所ノ例ニ倣ヒ之ヲ罰スルヲ要セス脱隊ノ如キ軍律ニ從ヘハ
乃チ重罪ナリト雖其後次ノ犯ニ對シテハ累犯ノ刑ヲ擬ス可カラズ
第五條ノ注解
ヲ參看スヘシ
紀元一千八百三十二年ノ法律ニ依テ廢棄シタル所ノ舊第五十六

條ヲ錄ス左ノ如シ

舊第五十六條 何人ヲ論セス重罪ヲ犯シ其刑ノ言渡シヲ受ケシ
者剝奪公權ノ刑ニ該ルヘキ第二ノ重罪ヲ犯シタル時ハ「カルカン」
ノ刑ヲ言渡ス可シ

若シ第二ノ重罪「カルカン」或ハ追放ノ刑ニ該ルヘキ時ハ監役ノ刑
ヲ言渡ス可シ

若シ第二ノ重罪監役ノ刑ニ該ルヘキ時ハ有期ノ懲役及ヒ烙印ノ
刑ヲ言渡ス可シ